

曾^そ

根^ね

崎^{さき}

心^{しん}

中^{ちゆう}

解題

元祿十六年五月七日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に五十一歳)であつて、俗に世話物の初作と稱される名高い淨瑠璃である。

本曲は、おやま操の名人辰松八郎兵衛がお初の出遣を勤めて、空前の好評を博した劃期的のものである。(改訂増補の「お初天」神記」は附載せぬ)

作者

近松門左衛門は作者名であつて、姓を杉森、名を信盛、通稱を平馬といひ、巢林子、不移山人、散人不移子、又は平安堂と號した。承應二年、京都地方に生れた。其の家柄は、彼の辭世といはれてゐる文に、「代々甲冑の家に生れながら武林を離れ」とあるから、武士の家に生れたのであらう。

「竹豊故事」(寶曆六年の序がある)に近松の事を述べて、「元來は京都の産にて、去る堂上の御家に仕へ、本姓は杉森氏にして由緒正敷人成しが、故有て浪人と成」とある。「淨瑠璃譜」には、「出生は近江國、高觀音近松寺御坊にて出家をきらひ、京都にくらし居られし」と見え、「南水漫遊」「嬉遊笑覽」「橋庵漫筆」「卯花園漫錄」「養笠雨談」には、越前又は北越の産とし、一説に三州ともいふと見え、「戲財錄」には、唐津の近松寺に遊學し、衆生化度の爲大悟還俗したといふ説が載つて居り、これから推測して唐津の生れといひ、大田南畝の「平安堂近松翁墓碣」の文稿に、「按翁本姓杉森、諱信盛、字平馬、長門萩人」と見え、「聲曲類纂」にも萩の生れといひ、「増補和漢書畫一覽」には、出雲國大原郡近松村の生れといひ、「戲曲小説通志」には、周防國山口の生れといひ、其の他長門國大津郡深川村の産ともいふ。近頃、淀藩士杉森家の系譜が公にされた。それによつて、巢林子の祖父市兵衛信重は、淀藩主稻葉美濃守に仕へ、父信義は嘗て越前宰相に仕へた人であるとの説が有力になつた。

十九歳の時、「白雲や花なき山の恥かくし」の句を詠んで、山岡元隣撰の「寶藏」追加發句に載つた。二十四歳の頃は正親町從一位に仕へたといひ、又阿野家の雜掌であつたともいふ。戲曲に筆を染めたのも此の頃である。彼の壯年時代は、己が好む所に從つて俳優の群に投じ、都萬太夫座(四條の歌)の道具方となり、或は堺の夷子島で、榮宅(貞享四年頃)と組んで「徒然草」の講釋をした事もある。三十四歳の時から竹本義太夫と提携し、義太夫の旗揚を祝して「出世景清」(貞享三年二月四日)を作つた。また

歌舞伎脚本にも筆を揮つたが、寶永六年霜月に名優坂田藤十郎が死んでからは、歌舞伎との縁薄くなり、享保九年霜月二十二日に七十二歳で歿した。墓碑は兵庫縣川邊郡小田村久々知の廣濟寺(目蓮宗)と、大阪市東區中寺町(市電上本町)妙法寺(華宗)とにあり、法名を阿禪院移矣日一具足居士といふ。彼には妻もあり、多門といふ子もあつたが、それ等の傳記も明らかでない。

巢林子自筆、九月十三日、後藤小左衛門宛消息文の中に、「御賢息様へも宜御左右可被下候。多門、義も以別紙可申上候へ共云々」と見え、また同自筆、六月廿三日、和田忍笑宛扇の禮狀の文中に、「多門、ばへ毎度御言傳奉存儀尙々大形に被成云々」とある。また「反古籠」に門左衛門の事を記して、「西の座(竹本座)より一年の給金五十兩なり、増して百兩にせん事を云ひければ、辭して曰く、我生涯は五十兩づつにて足りぬ、死後に及びて、其増金五十兩を俸へ合力して給はるべしと云ひける故、約束の如く歿して後竹本座より、俸へ一年五十兩づつ送りしは、父巢林子の餘澤なりと、吉田鬼眼語りき」とある。

巢林子の閱歴に就いて、これ以上疑問はどこまでも疑問であつて、正確な詳しい事が知れぬのは遺憾に堪へぬ。

彼は篤學で、神祇釋教戀無常の世態も人情も味ひ盡した人である。そして古典籍は勿論、新刊書をも涉獵した。(堀川波設) (寶永四年二月上) 演)を作るには、錦文流作の「熊谷女編笠(寶永三年刊)を参考し、心中宵庚申(享保七年四月上演)を書くには、彼が作品に使用した詞は、紀海音作の「心中二つ腹帯(享保七年四月上演)を参考した事などは、これ等の作を併せ見て知り得るのである。(殆んど出なかつたやうである) 加之幸若舞曲や謠曲・神代から享保に及び、國訛も會津から薩摩の果までの諸國に及んでゐる。(然し彼の旅行は、近畿外には)。加之幸若舞曲や謠曲・狂言は勿論、當時の歌謠俗曲などの音楽方面の物をも取入れて、之を彼の劇詩中に應用した。

彼はまた、當代の學者高僧、其の他各方面の人々に接して、見聞を博め知識を擴げつつ、絶えず努力錬磨の功を積んだ。そして義太夫の爲に其の深博な蘊蓄を傾倒し、以て我が劇詩の向上に生涯を捧げた。斯くて門左衛門の靈腕・義太夫の美聲、相俟つて天下の人氣を博し、神韻纏渺たる幻華藝術を大成して、永く世に傳ふべき妙文の數々を残した。實に我が國空前の國民的大劇詩人と謂ふべきである。

彼は、在來の感傷詠歎を旨とする傳襲的な舊套を打破して、前人未踏の境地を開拓した。即ち現實生活に即して眞の人間を描寫した。それは時代物よりも世話物に於て、最も能く現はれてゐる。

彼の世話物には、好んで遊蕩兒や遊女や心中物を書き、卑俗な悪洒落も往々あるので、古來士君子の讀む物にあらずとして、随分批難されたものである。これ等は彼が淫靡な元祿時代に在つて、その作品の好評を博すると否とは、竹本一座の生活に影響するのであるから、努めて俗受けに重きを置かねばならぬ、苦しい立場にあつたからでもあらう。彼の作品を深く吟味すれば、批難した見方の皮相であり、誤つてゐる事に氣附くであらう。

凡そ文藝作品の特徴は、必ず其の時代の影響と、作者の個性とによる事が多い。殊に優秀な作品に於て、作者の個性の表はれる事が著しいのである。吾人は巢林子の襟度を彼の愛の藝術の中に見出して、言ひ知れぬ懐かしさを感じる。「菜根譚」に「この心常に放ち得て寛平ならば、天下自から險側の人情なからん」とあるが、これは彼が體得した所である。

娯樂を以て淨瑠璃の本義と心得てゐた時代に、彼は不易の人情と義理とを絡ませて、彼の心に儼立する道德觀を劇詩の上に絶叫した。そして我が國民精神を傳へて國民性を明らかにし、以て或は武士道の謳歌となつて現はれ、或は懐かしい人情の極致となつて現はれてゐる。罪な子を述べても、其の者の心の中の悶々悲痛の情を、微に入り細に互つて説き盡して、同情の涙を潑ぐ。また淪落の女にも情愛の極美を盡して、其の薄幸な運命を悲しむ。そしてこれ等人間苦・社會苦に泣く人々に對して、現實世界で救ふ事が出来ぬならば、せめて宗教の世界で之を救はうとした。ここに於て「因果應報の理」「煩惱即菩提」「成佛得脱」「懺悔滅罪」を説き、「現世は夢幻の如く泡影の如きものである。衆生を迷はし惱ますものは總て煩惱である。煩惱を斷滅し眞理を證得して無我無念の境界に達する。之を涅槃といひ、人生究竟の樂地である」との釋尊の教理を應用して、信仰に生きる心胸の輝きを投げかけたものである。斯くして彼は愛の藝術の爲に、不斷の精進を續けた。

人は我執の偏見から脱して、更に進出するは容易な事でない。大衆が道德論を千言萬語聽かされたとして、直に轉向するものもなく、高遠な眞理が耳に入るものでもない。されど近松の如き大劇詩人が、理想に燃え信仰に燃えて力を注いだ靈腕には、一言一句も自信の緊張を示し、讀者は之に陶醉して美しい詩の國に遊び得るのである。

吾人は、近松の詞章が年を追ひ洗煉されて圓熟し、益々美化され詩化されて行くのを觀て、深き興味を覺えると共に、其の奥底に流れる崇高な理想を汲んで、其の現實化を思はざるを得ないのである。且又彼が社會風教の上に大きな効果を與へ、後世の劇詩に其の範を垂れた業績を偲んで、甚深の感謝を捧げねばならぬと思ふ。

巢林子著作目次 淨瑠璃及歌舞伎脚本（歌舞伎脚本には△の符を附す。曲名の下の年月日は刊行又は初上演の時）

瀧口よこぶえ 延寶四年十一月。二十四歳

念佛往生記 同六年カ。二十六歳

「竹子集」(延寶六年八月刊)に「大原問答」と見え、後に修訂して「大原問答青葉笛」(寶永七年三月四日上演)と改題す。

赤染衛門榮花物語 同八年一月。二十八歳

烏羽戀塚物語 天和元年以前。(この曲は「大竹集」天和元年刊に出づ)

元祿十一年に修訂して、「一心五戒魂」と改題す。

東山殿子日遊 延寶九年一月。二十九歳

つれづれ草 同九年五月上旬

世繼曾我 天和三年九月。三十一歳

以呂波物語 貞享元年三月カ。三十二歳

凱陣 八島 同初年頃カ

賢女の手習井新曆 貞享二年一月。三十三歳

千載集 同二年カ

元祿十四年に修訂して、「薩摩守忠度」と改題す。

盛久 同二年カ

後年修訂して「主馬判官盛久」と改題す。

出世景清 同三年二月四日。三十四歳

三世相 同三年五月

「夕霧三世相」「遊君三世相」「夕霧追善物語」ともいふ。

佐々木先陣 同三年七月十五日

題簽「佐々木大鑑」。

本朝用文章 未詳

天智天皇 元祿二年三月三日。三十七歳

正徳五年九月本曲の一章を増補改作し、題簽「豊年秋の田」巻頭「四季花うり」として刊行す。

津戸三郎 元祿二年五月

「門出八鳥」と同文なり。「門出八鳥」の刊年不詳。

忠臣身替物語 同二年八月十五日

題簽「今様かしは木」。『外題年鑑』に「今様柏木 元祿二年八月十五日」とある。

鳥帽子折 同三年一月。三十八歳

元祿十二年一月修訂して、「源氏烏帽子折」と改題す。

十一 段 同三年三月三日

「源氏十二段」ともいふ。元祿十四年九月に「源氏十二段 長生鳥畫」と改題す。

大覺大僧正御傳記 同四年十一月以後。三十九歳

「女人即身成佛記」(元祿四年十一月カ)を修訂せるもの。

日本西王母 同五年秋。四十歳

「外題年鑑」に「日本西王母 元祿五年四月八日」とあれども、秋の上演であらう。又本曲と同文のものに「南大門 秋彼岸」がある。其の何れが先なるかを知らず。

△佛母摩耶山開帳 同六年三月。四十一歳

松風村雨束帶鑑 同七年三月三日。四十二歳

融 大 臣 同七年八月カ

多田院開帳 元祿八年三月六日。四十三歳

釋迦如來誕生會 同八年四月八日

鎌田兵衛名所盃 同八年十月十二日

△今源氏六十帖 同八年正月カ

△傾城阿波鳴門 同八年三月カ

△曾我太夫染 同八年七月カ

△姫藏大黒柱 同八年十一月カ

△水木辰之助 錢振舞 未詳

曾我七以呂波 元祿九年九月カ。四十四歳

題簽「義經追善女舞」。

頼朝伊豆日記 同十年七月十五日。四十五歳

百日會我 同十年十月十三日

「團扇會我」を修訂して改題したもの。

△百夜小町 同十年

△夕霧 七年 忌 同十年

△大名なぐさみ曾我 元祿十年

△上京の謠初 同十一年正月。四十六歳

△傾城江戸櫻 同十一年正月

當流小栗判官 同十一年二月十四日

△一心二河白道 同十一年夏カ

△傾城佛の原 同十二年一月。四十七歳

△阿彌陀が池新寺町 同十二年十月カ

根元曾我 不詳

今川了俊 不詳

浦島年代記 元祿十三年一月六日。四十八歳

天鼓 同十四年春。四十九歳

△御曹司初寅詣 同十四年春

△傾城富士見る里 同十四年春

せみ丸 同十四年五月六日

曾根崎心中

源頼義大掛物十幅一對 元祿十四年九月九日
「頼義北國落」を修訂して改題したもの。

曾我五人兄弟 同十四年十一月一日

△傾城壬生大念佛 同十五年春。五十歳

大磯虎稚物語 同十五年五月カ

賀古敦信七墓廻り 同十五年七月十五日

最明寺殿百人上臈 同十六年三月四日。五十一歳

△傾城三の車 同十六年春

曾根崎心中付り観音廻り 同十六年五月七日

△辛崎八景屏風 同十六年秋

源五兵衛薩摩歌 同十七年一月十五日。五十二歳

△吉祥天安産玉 寶永元年冬

△春日佛師枕時鶏 同元年冬

雪女五枚羽子板 同二年春カ。五十三歳

△傾城金龍橋 同二年夏カ

用明天皇職人鑑 寶永二年十一月

△傾城 若紫 同三年前

源義經將棊經 同三年正月二十五日。五十四歳

田村將軍初觀音 同三年春

初日本領會我 同三年三月二十七日

心中二枚繪草紙 同三年三月二十七日

後日加増會我 同三年夏

兼好法師物見車 同三年五月五日

碁盤太平記 同三年六月一日

與兵衛ひぢりめん卯月紅葉 同三年夏

會我扇八景 同三年七月十五日

吉野忠信 同四年一月二十日。五十五歳

堀川波鼓 同四年二月十五日

京都で上演した時に「堀川波鼓」と改題す。

卯月の潤色 同四年夏

酒呑童子枕言葉 寶永四年九月九日

享保三年十月上演の時に、第三段以下を修訂して「傾城酒呑童子」と改題す。

重井筒 同五年春カ。五十六歳

お房・徳兵衛の情死は寶永四年十二月十六日未明である。よつてこの初上演は其の翌年の春であらう。

傾城反魂香 同五年四月カ

高野山心中萬年草 同五年四月十六日

女人堂 同五年四月十六日

丹波與作待夜のこむろぶし 同五年六月

正徳二年三月再演の時に、「丹波與作」と改題す。

淀鯉出世瀧徳 同五年末カ

おなつ 五十年忌歌念佛 同六年一月。五十七歳

清十郎 同六年一月。五十七歳

心中刃は氷の朔日 同六年六月十六日

梔狩劔本地 同六年九月九日

會我虎が磨 同七年一月。五十八歳

百合若大臣野守鏡 同七年一月カ

「外題平鑑」に寶永七年五月六日から上演としてあれども、新年の事を作り込んであるから、正月の上演であらう。

二郎兵衛 今宮の心中 寶永七年夏カ

「外題年鑑」に寶永七年正月二十三日から上演としてあれども、夏の事を作り込んであるから、夏の上演であらう。

孕 常 盤 同七年八月

源 氏 冷 泉 節 同七年八月

忠兵衛 冥途の飛脚 同八年三月五日。五十九歳

吉野 都 女 楠 正徳元年九月十日

大 職 冠 同元年冬カ

夕霧 阿波 鳴波 同二年春カ。六十歳

けいせい 懸物揃 同二年三月四日

弘徽殿 鶉羽産家 同二年五月五日

五百番 廻山 姥 同二年七月十五日

長町 女 腹切 同二年秋

傾城 吉岡 染 同二年十一月二日

天 神 記 同三年二月二十五日。六十一歳

曾根崎心中

癡 靜 胎 内 摺 正徳三年五月

相模 入道 千疋 犬 同四年四月八日。六十二歳

娥 哥 かる た 同四年八月一日

義太夫の元祖竹本筑後掾は、本曲を興行中に病に罹り、九月十日に歿す。享年六十四。

嗟 峨 天皇 甘露 雨 同四年十月十五日

大 經 師 昔 曆 同五年一月。六十三歳

元文五年十一月再演の時に、「戀八卦柱曆」と改題す。

持統 天皇 歌 軍 法 同五年八月一日

嘉平次 生 玉 心 中 同五年八月一日

國 性 爺 合 戰 同五年十一月一日

國 性 爺 後 日 合 戰 享保二年二月十五日。六十五歳

鍵の 權 三 重 帷 子 同二年八月二十二日

聖徳 太子 繪 傳 記 同二年十一月十六日

山崎 與 次 兵 衛 壽 の 門 松 同三年一月二日。六十六歳

日 本 振 一 袖 始 同三年二月二十二日

△日本振袖始 享保三年夏カ

本年冬、京都榊山座に上演す。

會我會稽山 同三年七月十五日

博多小女郎波枕 同三年十一月二十日

本朝三國志 同四年二月十四日。六十七歳

平家女護島 同四年八月十二日

傾城島原蛙合戦 同四年十一月六日

井筒業平河内通 同五年三月三日。六十八歳

雙生隅田川 同五年八月三日

日本武尊吾妻鑑 同五年十一月四日

これ等の他に巢林子の作であらうと疑はれるものに、

花山院后諱 江州石山寺源氏供養

助六心中蟬のぬけがら 牛若千人斬

惟喬惟仁位諱 十六夜物語

京わらんべ (以上延寶・天和頃の作)

甲子祭 源三位頼政(扇の芝)

紙屋治兵衛 心中天の網嶋 享保五年十二月六日

きいの國や小はる 同六年二月十七日。六十九歳

後太平記 津國女夫池 同六年四月十五日。六十九歳

寛保二年四月上演の時に、「室町千屋敷」と改題す。

△津國女夫池 同六年春

女殺油地獄 同六年七月十五日

信州川中嶋合戦 同六年八月三日

唐船噺今國性爺 同七年一月二日。七十歳

心中宵庚申 同七年四月二十二日

關八州繫馬 同九年一月十五日。七十二歳

舍利社託宣

葵の上 藍染川

平安城 龜谷物語

頼朝濱出 巴太鼓

頼朝濱出 巴太鼓

大原御幸 信濃源氏木曾物語 辨慶京土産 花洛受法記
 自然居士 柏崎都の富士 くら假名太平記
 弱法師 多田院開帳 佐藤忠信二十日正月 當麻中將姫
 義經東六法 傾城淺間嶽 文武五人男 信田小太郎
 けいせい弘誓船 五がらの平太 甲賀三郎 (以上貞享頃から寶永初年までの作)
 などがあつた。また巢林子添削のものに、

猫魔 (達元祿頃の作) 善光寺御堂供養(享保二年作) 右大將鎌倉實記(享保九年作)
 などがあつた。また巢林子の作を並木宗輔が添削したもの、

日蓮記 兒硯(寛延二年刊)
 がある。

實 説

元祿十六年四月七日、大阪堂島新地(昔蜷川の南岸)天満屋の抱妓お初と、内本町醬油商平野屋の手代徳兵衛とが、曾根崎天神の森で情死した實説に據つたもので、當時の浮世草子では、「心中大鑑(寶永元年刊)卷三、「曾根崎の曙」にもこのことが作られてゐる。

情死の時日は、「心中大鑑」と「外題年鑑」とには「四月二十三日」とあれども、攝陽奇觀「卷之二十三、元祿十六年の條に「四月七日夜おはつ徳兵衛梅田に而心中云々」とあつて、墓石の表面に「妙力信女靈 元祿十六未年四月七日」、側面に「俗名天満屋内はつ」と刻せる圖が載せてある。また「曾根崎心中」の文中にも「この上はもう娘はやらぬ、やらぬからは銀を立て、四月七日までにきつと立て、商ひの勘定せよ」と見え、またこの淨瑠璃の上演を五月七日にしたのも、忌日の縁によつたものであらう。

お初の年齢に就いては、「曾根崎心中」道行の文に「まことに今年はこの年、わしも二十五歳の厄の年、わしも十九の厄年」とあれども、「心中大鑑」には「男は二十五歳、女は二十一歳」になつてゐる。

墓石に就いては、「遊女誠草」に、丸屋しげがお初の墓参をする條に、「誠に眞如の本がくさん久しやう寺にこそ参らる」と見え、「色茶屋

諸分車に「初様の事は過ぎつる元祿十に六つあまる卯月曾根崎の森にて、平徳様といふ客と心中して、ゆふべの露消えて跡なき鏡、又見る事もなく本傳寺久誠寺様に名のみ残り、石塔の文字さへうとく云々」とあれば、最初は生玉中寺町東側久成寺に建てられ、その後お初の評判高くなるにつれて、追善供養の爲か何かで梅田・中寺町などの所々にも建てられたものであらう。

影 響

本曲が竹本座に上演されて大評判となつたので、俄に淨瑠璃・歌舞伎狂言・浮世草子に心中物の流行となつた。

淨瑠璃では、「心中涙の玉井」(元祿十六年七月豊竹座上演。お初・徳兵衛の情)、「遊女誠草」(寶永元年五月竹本座上演。お初の跡を追う)、

「曾根崎心中」(享保二年八月一日初日竹本座)、「お初天神記」(享保十八年二月二日初日豊竹座)、「曾根崎模様」(寶曆十一年五月十八日、座上演。原作の改訂増補)。

「よみ賣三巴」(明和五年七月一日)、「往古曾根崎村噂」(安永七年九月座元竹田萬治)などがあつた。

歌舞伎では、「曾根崎十三回忌」(正徳五年四月大阪)、「心中野中時雨」(享保四年七月大阪角の芝居に上演。享保四)、「曾根崎初夢曾我」

(享保九年大阪角)、「心中黒小袖」(享保十五年江戸)、「女夫星浮名天神」(元文三年正月大阪)、「浮名の箱」(寶曆六年八月江戸)、「家櫻女肆榮」

(寶曆八年正月江戸)、「女夫星浮名天神」(阪角の芝居に上演)、「後日曾根崎」(明和四年五月江戸)、「仕立莊三襖紅粉」(明和八年三月江戸)、「春世

界花麗曾我」(寛政三年正月江戸)、「若紫江戸子曾我」(寛政四年三月江戸)などがあつた。又浮世草子に「心中大鑑」(書方軒撰)、「曾根崎

情鶉」(自笑・其磧撰)がある。

近松が心中を謳歌してからは、心中する者が多くなつたとの説がある。余が思ふに、それは近松が流麗な文で心中物を作つた

事によつて、特に人目を惹き世人の注意を喚起したといふに過ぎないのであらう。よしや心中する者が殖えたにしても、それは

断じて近松の責任ではない。人は義理名聞の爲にも死ぬ。一時の憤激からも死ぬ。又窮苦の深酷な時にも死ぬ。元祿頃の世には

さういふ自殺者が多かつた。さうした情死に對する批判は、ここに今更述立てる必要もあるまい。

自分が一生苦樂を共にする最愛の夫の死に對して、何を樂しみに己れ獨り生き長らへよう。寧ろ一蓮托生を欣求するのが婦の道である。妻は黒髪を切つて夫の棺に納める風習のあるのもこの譯である。臣は君の爲に命を捧げ、婦は夫の爲に身を捧げるのが人の道である。近松の心中物はこの道義を強調し、斯ういふ情死者に對して深い同情を寄せ、慈悲の手を差伸べて、温かい人情を説いた愛の藝術である。かくて情死は近松によつて、初めて深い意義が附けられたのである。

彼は「生玉心中」中の卷に、「性は善なる涙なり」と書き、「兼好法師物見草」中之卷に、「佛性同體の人間、子と生れ親となる」と書いてゐるが如く、儒佛の説に従つて我が趣味を高め雅懷を養つた。其の美しい心を以て物を深く見てゐた。故に彼は世間から非難される情死者に對しても、正面から堂々と義理人情の犠牲となつた譯を縷説して之を憐んだのである。

近松の文を能く理解すれば、人倫道德の確立する嚴肅な義理人情を基として、和を説き愛を強調したものである事が悟られるであらう。そして現世では悲惨な最期を遂けても、來世では佛力によつて淨土に往生する事を説いた彼の藝術によつて、光明を感受するであらう。吾人は近松が情死に對する考察を、彼の劇詩中に斯くの如く發見して、共鳴共感するのである。

然し寛闊な元祿時代でも、全體遊女は公衆の享樂の爲の者であるからは、遊客も遊女も互に一人を思ひ合ひ獨占すること、遊客が遊客なるを忘れ、遊女が遊女なるを忘れた者である。遊戯的の戀愛を認めぬ野暮であるとも考へられる。井原西鶴もさう考へた。彼は「五人女」卷三に茂右衛門・おさんが姦通して墮落する事を記して、おさん「兎角世に長らへる程つれなき事こそまされ、この湖に身を投げて長く佛國の語らひ」と言へば、茂右衛門「惜しからぬは命ながら、死んでの先は知らず云々」と、答へたとある。これでは決して情死はせぬ。これが現實の世態である。西鶴と近松とは共に現實の世相人心を美しい筆致で藝術化し、描寫してゐるけれども、西鶴は其の心髓を抉る鋭さがあり、近松は醜いものを理想化する美しさがある。従つて兩者の間に心中に關しても斯くの如き相違を見る（「八百屋お七下之卷、評」）。吾人は近松の文を讀む時、純眞の愛に生きて、和合を樂しむ事のどんなに幸福であらうかをしみじみと思ひ、其の妙文に對して限りなき愛著を感じるものである。

曾根崎心中

(觀音廻り。生玉社前。天満屋。道行。曾根崎の森)

登場人物の主な者

徳兵衛 (内本町替油商平野屋の手代。二十五歳) お

初 (天満屋の遊女。徳兵衛の愛人。十九歳) 油屋 九平次 (徳兵衛の悪友)

榎 榎

大阪蛸川新地遊廓天満屋の美妓お初は田舎客に連れられ、大阪順禮三十三所の觀音堂を巡り終へて、生玉社の出茶屋に憩うた。やがて其の田舎客はお初を残して、近くにある芝居を見物に出掛けた。

その後でお初は、愛人徳兵衛が下男を伴つて來るを見、「これく徳様、ここへく」と手招きした。徳兵衛はそれと氣附いて、下男に用を命じ、去らせてお初の所に走る。お初「妾は病になる程貴方を思ひ焦れてゐますぞえ。それにどうして逢ひに來て下んせぬ」と、怨んで歎く。徳兵衛「私も其方を思ひ忘れる時もなく、氣苦勞の絶え間もない。この間も主人が私を、主人の内方の姪と女夫になれと言はれた。私には其方があるから、主人の心に逆ひ、主人が母に與へた其の婚約銀二貫目を取戻し、主人に返さうとして持つてゐた所、其方も知つてゐる友油屋九平次に銀をかして呉れと頼まれたので、友の力になるのもござと思ひ、彼の念を救ふ爲に其の銀を彼に用立てた。彼も不義理はせぬ奴、今日にも返金するだらう」と語る。

折節九平次が、悪友達等と生酔ひ機嫌で來る。それを見た徳兵衛は、「これ九平次、この間用立てた銀を返してくれ」と督促した。然るに九平次の内心は、徳兵衛をお初に對する戀敵と憎んで工んだ事であるから、「さやうな銀を汝から借りた覺はない。友を騙るなどはせぬものぞ」と、罵る。そして喧嘩となり、徳兵衛は理も非に落ち、毆打されて大勢に取巻かれる。お初は愛人の身を氣遣うて叫びもがくを、折から歸つて來た田舎客に引摺られて、無理に駕籠に乗せられ、涙を袖で隠しながら詮方なく別れる。

其の夜、天満屋では朋輩妓等寄集り、口々に、生玉で毆打された徳兵衛の悪評を語つてお初に聞かせる。お初は傷心の情に打たれて、聞くに堪へぬ折から、徳兵衛悄然としてお初を尋ねて来る。お初は人目を避けて愛人を縁の下に忍ばせる。九平次も亦來り、非を理に言ひなして徳兵衛を痛罵し、問はず語りに豪勢振りを見せてお初に戯れる。お初はこれをあひしらひ、蛾眉を逆立てて愛人を辯護する。徳兵衛は縁の下で悲憤の涙に暮れ、お初の足を取つて己が咽を撫で、以て死覺悟を暗示すれば、お初も愛人と共に死ぬ決心を見せる。かくて九平次も歸り人も寂靜まつた時を窺ひ、お初は天満屋を脱け出で、愛人と手を携へて情死の道をたどる。

〔道行〕 青春の血に燃える兩人は、戀の奴となつて互に手を取りつ取られつ、住み馴れ通ひ馴れた蜷川新地の遊廓を跡に見て、名残を惜みながら梅田橋を渡る。歡樂の巷に残る燈火や、まだ寝もせで諠ふ小唄の聲に耳を傾け、ありし昔の我が身を思ひ出でて、無量の感慨に打たれながら曾根崎の森に迎り著く。ここに死場所を求めて、互に主の恩・親兄弟の恩を謝して遙かに暇乞を告げ、心靜かに念佛を唱へて一蓮托生を欣求し、恩人に先立つ罪を謝して少しも怨嗟の聲なく、翌四月七日の曉刃に伏して潔い情死を遂げた。お初年十九、徳兵衛年二十五。後の世までも哀れな戀物語となつて、人々に唄はれ、回向の種となつた。

評

三十三所觀音堂を順禮する場は、それにふさはしい莊重典雅な謡曲文を引用し、流麗な詞章によつて、願ある身の優しい姿を見せた。生玉の遊び場では、戀愛の三角關係と、金錢貸借とに絡む大喧嘩となり、歡樂の巷の天満屋では、相愛の兩人が絶望の悲哀に泣き、遂に涙に濕る夜の道行となる。吾人はこの近松情調の満ちた妙文に暫くは陶醉するであらう。

彼等の情死した理由を考案すれば、餘りに單純であつて無意味のやうである。が徳兵衛の死は、面目を潰されて生きては居ないといふ、強い義理の觀念から出たのであつて、當時の人々は、義理の爲には生命をも輕んじた一例である。又お初の死は、身

を捧げた愛人と死別しては最早生存の價値なく、共に死ぬが婦道であるとの信念から出たものである。現代の或人々のやうに、苟くも言譯さへあれば遁れて、涼しい顔をしてゐる者とは、其の道義觀念に於て甚だしい懸隔がある。

道行の文は、種々の逸話をもつ名高い文である。

「増訂一話」言卷四十五に「徂徠先生近松が曾根崎心中を讀みて、七つの鐘(本曲の原本に)が六つ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響の閉きをさめ、といふに至りて、巻を擲つて嘆じて曰く、近松の妙處の中にあり、外を問ふに及ばず」と見えてゐる。

又「俗耳鼓吹」に「曾根崎心中の道行の中に、何々として何々と死に行身の、道の霜、一足づつに消て行と云所迄作りしが、言葉盡きて心たらず、いかに〜と案じほけたる、其頃伊勢の涼菟搦に來合れけるを悦び、いかがして取續けんや、御助言し給へと投かけたり、菟搦閉ながら、外の咄して酒飲み物云て笑ひ遊ぶ、門左衛門ひたすらに、すゝめてたのめるにぞ、菟何やかや雑談しながら、夢の夢こそはかなけれど、成ともやり給へと云しに、近松大に悦び、やがて作り入しと也」とある。

これらの話は勿論信じ難けれど、又以てこの道行文が餘り有名なので、種々の傳説を生むに至つたことが察せられる。

この道行文と酷似したものに、「辛崎心中」といふがある。どちらが前に作られたかに就いては、推定するより外はない。思ふに「辛崎心中」の文の方に多少妥當を缺く文句があるから、「曾根崎心中道行文」がはじめに作られ、之を「辛崎心中」に添削して、應用したものであらう。

○げにや安樂世界より：觀世音仰ぐも
謡曲・田村に出づ。觀音廻りの場であるから、謡曲
がかりて莊重に出た。

○示現 顯示顯現の義。佛・菩薩が御姿を現し給
ふこと。御姿を變じて出現し給ふこともある。

○高き屋：販ひ「高し」から「高き屋」と同韻語
に續けた頭韻法。そして俗に仁徳天皇の御製といふ
「高き屋にのほりて見れば煙立つ、民の簷は髪はひに
けり」に據る。此歌は「新古今集」卷七、賀部に出づ。
○契り置きてし 難波津の股盛を契り置かれ

曾根崎心中 付り觀音廻り

げにや安樂世界より、今此娑婆に示現して、我らが爲の觀世音仰ぐも高き高き屋
に、上りて民の賑はひを、契り置きてし難波津や、三つづ、十と三津の里、札所

たゞいふに、後文の「靈佛にかけて彌陀の靈願にまかせた。

○三つづつ十と三津の里 大阪なる三十三所觀音堂札所を、三津の里にいひかく。「三津の里」は即ち高津・飯津・難波津の總稱で、大阪をいふ。

○札所 願經者が參詣して札をうつ三十三所の觀音堂。

○をりはの乞目 駕籠を下り際「は」を、雙六の打方なる折柄にいひかく。

○乞目：十八九 此よ乞ひねがふ賽の目數三・六を、戀を含んだ目元、その年齡十八九にいひかけた。

○顔佳花 「かきつばた」(薔子花)の異名。美人にかけていふ。

○初花 顔佳花の初花を、新しく全盛に向ふ色ざかりの遊女お初にいひかけた。

○照る日の神 日の神即ち天照大神をいひ、天照大神を男體とするこは「十二段草子」にも見ゆ。

○日負け 太陽の直射を受けて病むこと。この文は、男を避けて深い間柄にならぬやうにすれば、戀に苦悶することもあるまいの意をいひかく。

○頼みありける 「新古今集」卷二十に「清水觀世音の御歌まなむいひ傳へたる」とあつて、「なほ頼めしめが原のさしも草、われ世の中にあらむ限りは」などあるによつていふ。

○西國三十三所 京都及びその近國三十三ヶ所の觀音を奉祀せる寺院をいひ、これを願經するを西國願經といふ。(下卷「願經歌」を見よ)。

○對ふ 匹敵する。

札所の靈地靈佛廻れば、罪

も夏の雲暑苦しとて駕籠を

早、下際の乞目三六の、十

八九なる顔佳花、今咲出し

の、初花に笠は被す共、召さ

す共、照る日の神も男神、よ

けて日負けはよもあらじ、

頼み有ける願禮道、西國三十三所にも對ふと、聞くぞ有難き、一番に天満の、大

融寺、此御寺の、名も古りし昔の人も、氣の融の、大臣の君が、鹽竈の浦を、都

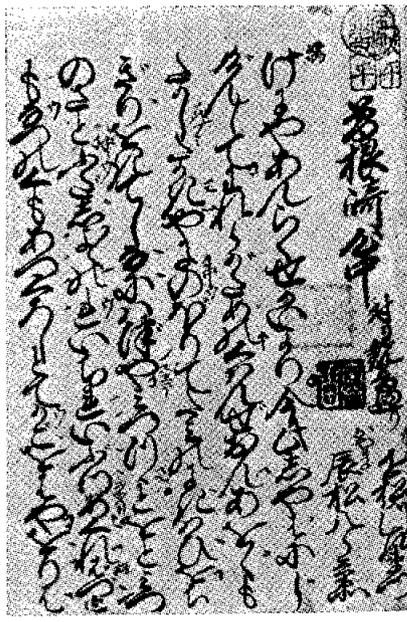
に堀江漕ぐ、潮汲み舟の跡絶えず、今も弘誓の艦拍子に、法の玉鉾急い、

○大融寺 ①大阪願經を見よ。この文は、第一番の札所大融寺をいうて、其の寺に緣故ある融大臣をいひ、融左大臣が河

原院を京都六條川原に造り、毎月朔二十石を難波から汲み運んで池に入れ、海の魚貝等を糶ましめ、陸奥鹽釜の浦を移して海士の鹽屋に燻を立てて、御遊の慰みとされたといふ。「都に」は京都をいひ、「堀江」は難波の地をいひ、「漕ぐ潮汲み舟」といへる

も、この故事によつてであつて、舟の跡絶えずし、大阪の繁盛にいひつづけた。

○氣の通る 察しよ。粹な。これに融をいひかく。源



融は嵯峨天皇の皇子で、寛永七年薨す、年七十四。世に河原左大臣と稱す。

○弘誓の艦拍子 弘誓とは、佛が一切衆生を弘く濟度しようとの誓願をいふ。衆生命終の時、極樂から觀音を始め二十五菩薩が弘誓の舟で來迎されるを、觀音廻り故それによそへていふた。

○玉鉾 玉鉾の身を道にかけていふ、即ち道の枕詞であるが、(二)では道の意。

◎大阪順禮 大阪三十三所觀音堂札所を順拜する。

○補陀落 梵語Otakata。實在の地名でなく、觀音菩薩の居給ふ海中の島。この文は、順禮歌「補陀落や岸打つ波は三龍野の那智のお山に響く瀧つ瀬」の中の句を引用した。

◎大江の岸 大阪京橋筋三丁目四丁目。

○鶏も二番 鶏の二番鳴きに二番の札所をいひかけた。鶏は日出前二時間の頃より鳴き、二番鳴けば東の空は白む。

○長福寺 ◎「大阪順禮」の條に詳説した。札所の寺は◎「大阪順禮」の條を見よ。

○久方の 「ひさかた」の義で、太陽の形を喻へた(或は日差す方の義さもない)こと、日の枕詞となり、轉じて天・月・雨・雲などの天象の物に冠せられた枕詞である。「久方の光」は「久方の日の光」といふを略したのである。

○神明宮 第三番札所。

○法住寺 第四番札所。

○あだの法界寺 我が身に關係ない戀を妬むを法界憎氣といふ。いたづらに法界憎氣するを法界寺にいひかけた。

○法界寺 第五番札所。

◇この邊から字句も調子も次第に軟かに細かくなり行く筈づかひ心にいはいよ。

○大鏡寺 第六番札所。

○すしや 「すし」は意氣又は生意氣の意。蓋し「粹麗するし」の義であらう。「すし」は感動の意を示

大坂順禮胸に木札の、補陀落や、大江の岸に打つ波に、白む夜明けの、鶏も二番に長福寺、空にまばゆき久方の、光に映る我影のあれ、走れば走るこれ、

又、止まれば止まる振の好し悪し見る如く、心もさぞや神佛、照す鏡の神明宮、拜み廻りて法住寺、人の願ひも我如く誰をか戀の祈りぞと、徒の悋氣や法界寺、

東は如何に、大鏡寺草の若芽も春過て、後れ咲なる菜種や罌粟の、露に簞る、夏の蟲、己が妻戀ひ、優しやすしや、彼方へ飛び連れ、此方へ飛び連れ、彼方や東

風風ひた、羽と羽とを袷の袖の、染めた模様を花かとして肩に止まれば自づから、紋に揚羽の超泉寺、扱善導寺栗東寺、天瀧の札所残りなく、其方に廻る

夕立の雲の羽衣、蟬の羽、の薄き手拭、暑き日に、貫く汗の玉造稻荷の宮に迷ふとの、闇は理り御佛も、衆生の爲の親なれば、是ぞ小橋の興徳寺、四方に眺めの

果しなく、西に舟路の海深く、波の淡路に消えずも通ふ、沖の汐風、身にしむ鷗、汝も無常の煙に咽ぶ、色に焦れて死なふなら、神ぞ此身はなり次第、さて、げに

よい慶傳寺、縁に引かれて、又いつか、爰に高津の遍明院、菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺、上りやすなく下りやちよこちよこ、上りつ下りつ谷町筋を、

す助詞。

○ひた〜〜 伊た〜風に騎るさま。

○揚羽の蝶 蝶の一種、體長八分乃至一寸、體色鮮黃、四翅あつて前翅は長三角形、後翅は半圓形をなし、共に黒色の地色に黄色の斑紋がある。物にとまるときは翅をあけて合はす。これを圖案とした紋所にもこの名のある。

○超泉寺 第七番札所。

○善導寺 第八番札所。

○東東寺 第九番札所。

○羽衣 天女の著る飛行の衣。蝶の中に體眞黒色で、羽が透きとほりその中に青筋のあるものを羽衣といへば、それをいひかけた。この文は「夕立の雲」から、雲間を飛行する羽衣につづけ、蝶の名に羽衣といふがあるをいひかけて「蝶の羽」につづけ、その蝶の羽の薄きを、手拭の薄きといひかけ、「薄き」に對して厚きをいうて「曇き」にいひかけた。

○稻荷の宮 大阪城南玉造稻荷宮内の觀音堂は十番の札所。この文は、狐は夜陰に乗じて人を騙すとの俗説によつてかきひびく人の親の心は闇にあらぬとも、子を思ふ道にまじひぬるかなの古歌の語を取つて、衆生の爲の親といひ、小橋に伯母をいひかけ、興徳寺に子にいひかけた。

○御佛も衆生の爲の親 「法華經」譬喩品に「今此三寶是我有、其中衆生悉是吾子」。

○興徳寺 小橋寺町にあつて十一番札所。興徳寺からの眺望は、元祿頃はこの如くであつた。

歩み習はず行き習はねば、所體類れア、恥かしの、漏りて裳裾がはら〜、

はつと翻るを打掻き合はせ、弛みし帯を引締め、〜、締めてまつはれ藤の棚、

十七番に重願寺、是から幾つ生玉の本誓寺ぞと伏拜む、珠數に繋がん菩提寺や、

早天王寺に六時堂七千餘巻の經堂に經讀む鳥の時ぞとて、餘所の待つ宵きぬ〜

○汝も無常の煙に咽ぶ 蓬塵燼く煙のたなびく中に飛ぶ鷗を見てかく感じた。そして無常の煙(即ち火葬の煙)から、その縁語死なうしにつづけた。

○色 戀。

○神ぞ 「神ぞ照覽ある」の略されたもので、自誓の詞。

○慶傳寺 第十二番札所。

○遍明院 第十三番札所。

○菩提 梵語Bodhi。不生不滅の眞理を證悟すること、即ち佛果のこと。

○長安寺 第十四番札所。

○誓安寺 第十五番札所。

○すな〜〜 そろ〜。近松作「孕落登」に「庭の撒き砂、すな、と歩み寄り」。

○所體 なりかたち。身形(みなり)。

○羽東師の森 山城國乙訓郡羽東師村志水の西にある名所。この文は歌枕をいひかけて飾つたに過ぎぬ。この歌枕を、その森に關係なくた文飾にした例は幾つもある。

○藤の棚 第十六番札所。藤はまきつくものなれば「纏めて

まつはれ藤」につづけた。

○生玉 幾つ生きると、札所を行くを生玉の地にいひかけた。

○本誓寺 第十八番札所。

○菩提寺 第十九番札所。寺院には菩提樹を植えた所多く、その實は賢いで念珠とすれば「珠數に繋がん菩提」につづけた。

○天王寺 四天王寺をいひ、天王寺區元町にある。古來大阪市内著名な名所である。

○六時堂 第二十番札所。

○七千餘巻 一切經の巻數。

○經堂 第二十一番札所。

○經讀む鳥 鶯をいふ。「俳諧感時記茶草」に「經よみ鳥」鶯をいふ、その鳴聲法華經といふが如し、故に此名あり。この文は鶯に關係なく、法華經を讀むをきかせて、鳥に西の刻をいひかけた。西は午後六時頃。

○きぬ〜 男女相會うたその夜の翌朝。後朝。この文は「新古今集小侍従の歌」待つ宵に更け行く鐘の聲きけは、あかね別れの鳥はものかはの語句をこつて修飾した。

- 金堂 第二十二番札所。
- 講堂 第二十三番札所。
- 萬燈院 第二十四番札所。
- 新清水 第二十五番札所。
- 新清水に暫しとて…逢坂の關 「新古今集」西行の歌「道のべに清水流る、柳陰、暫しとてこそ立ちまじりつれ」及び「新古今集」にやがて休らふ逢坂の、關の戸まじし」に據る。
- 逢坂の關の清水 天王寺西門筋相坂の清水をいふ。そして近江なる逢坂の關の清水は有名であるから、それをいひかけて文飾とした。
- 無明の酒 酒に酔へば失心して眞理理法を知ることができず。「妙法華經」七に「勿飲無明酒」。「無明の酒の酔ひ醒ますとは、煩惱の迷まめて、まじりを閉くに喩ふ。
- 吹きて亂る…相思ひ 「新古今集」西行の歌に「風に靡く富士の煙の空に消えて、行くへも知らぬ我が思ひかな」に據る。
- 是も亦 富士の煙もさうであるが、煙草の煙も亦の意。
- 相思ひ草 煙草の異稱。
- 道草に 道草をして時を費し。
- 雲の脚 雲の動くこと。
- 時雨の松の下寺町 「雲の脚」「時雨」を續け、時雨の爲松の下蔭に宿るを「下寺町」にいひかく。
- 心光寺 第二十六番札所。「信心心」「心光寺」は同じ頭音を用ひて修飾した所謂眼韻法。

も、思はで辛き鐘の聲、こん、金堂に講堂や萬燈院に點す灯は、影も輝く蠟燭の新清水に暫しとて、やがて休らふ、逢坂の關の清水を汲み上げつ、手に拵ひ上げ口漱ぎ無明の酒の酔ひ醒ます、木々の下風、冷々と右の袖口左の袖へ、通る煙管に燻る火も、道の慰み熱からず吹きて、亂る、薄煙、空に消えては是も亦、行方も知らぬ、相思ひ草、人忍ぶ草道草に、日も傾きぬ急がんと又立出る雲の脚、時雨の松の下寺町に信心深き心光寺、悟らぬ身さへ大覺寺さて金臺寺・大蓮寺廻り、くはて是ぞ早、三十番に、三津寺の大慈大悲を頼にて、懸くる佛の御手の絲、白髪町とよ黒髪は戀に亂る、妄執の、夢を覺さん博勞の、こ、も稻荷の神社佛神水波のしるしとて蔓竝べし新御靈に、拜み納まるさしも草草の蓮葉な世に交り、三十三に御身を變へ色で、導き情で教へ、戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世音誓ひは、妙に有難し

立迷ふ、浮名を餘所に、漏さじと包む心の内本町、焦る、胸の平野屋に春を重ねし雛男、一つなる口桃の酒、柳の髪も徳々と呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋れ木の、生醬油の袖したるき戀の奴に擔はせて、得意を廻り生玉の社にこそは

○大覺寺 第二十七番札所。信仰によつて悟らぬ身までも覺るを「大覺寺」にいひかけた。

○金臺寺 第二十八番札所。

○大蓮寺 第二十九番札所。

○大慈大悲 大慈大悲の觀世音。

○懸くる佛の御手の絲 佛が手に懸け給ふ絲で、信者はその絲をひかへて彌陀に絲を結び引接を乞ふのである。「榮花物語」に「御堂殿御臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かせ給ひ」。

○白髮町 白髮町の觀音堂をいひ、第三十二番札所。

○黒髮は懸に亂るる 「千載集」戀部の歌に、「長からむ心も知らず黒髮の、亂れて今朝は物をこそ思へ」。この文は、「白髮」というたので「黒髮」といひ、「亂るゝ安執」とつづけた。

○猿 古來懸夢を食ふと傳へられてゐる想像の歌で、體は熊に似て、象の鼻、犀の目、虎の足、牛の尾をしてゐる。「猿」を「博勢」町にかけた。

○ここも稻荷 第十番札所も稻荷社内であるが、ここの博勢町も稻荷で第三十二番札所。

○佛神水波 佛は神の本地で、神は佛の垂迹なれば、神と佛とは恰も水と波とのやうなものと恐で、本地垂迹説に據つた。諸曲「誓願寺」に、「神といひ佛といひ、只これ水波の隔てなり」。

○いらか 屋上の瓦。「いらか」は、「いろこ」の標。「優名類聚抄」に「驛川伊路久都、俗云伊侶古」。屋上の瓦が觸つたる様より出た語である。

○新御靈 第三十三番札所。

著きにけれ出茶屋の床より、女の聲ありや徳様ではないかの、コレ徳様へ

と手を叩けば徳兵衛、合點して打領き、コレ長藏、己は後から往の程に、其方は

寺町の久本寺様長久寺様、上町から屋敷方廻つてさうして内へ往にや、徳兵衛も

○さしも草 さしも多くの民草。天下無敵の人民。新古今集卷二下なる歌「なほ頼めしめが原のさしも草、われ世の中にあらむ限りは、清水觀音の詠まはれてゐるから、同じ觀音の縁によつてか、いひ、次の文句「草の運葉な」を呼び出した。

○運葉 浮葉なこもを、運の浮葉の風や水にびらつくに喩へた語。輕佻浮華。

○三十三に御身を變へ 觀世音菩薩は三十三身に化現して、法を説かれた事が「法華經普門品」に見えてゐる。

○色で導き情で教へ 姿を變へ光を和らけて、情慾に迷ふ人々に接して教を垂れ給ふをいふ。

○誓ひ 救世の誓願、即ち觀世音菩薩が衆生濟度の誓願をいふ。

○三重 二八眞の頭莊を見よ。

○内本町 心の内を「内本町」にかけた。内本町は本町町の東に當り、平野屋はこの町内にある。

○春を重ねし 幾春も年季を重ねた。

○雛男 雛人形のやうな美男。

○一つなる口 酒も一杯位は飲める口。

○桃の酒 三月縁の節供の酒。この文、「一つ」の語に應じて「柳」を「桃」にかけた。

○柳の髪 長く美しい毛髪の形容。そして「桃の縁語」「柳」に續けた。

○徳々 徳兵衛を重ねていふ省略。「髪も解く」にいひかけた。

○粹 推の義である。察しの上のこと。重氣。伊達。

○名取川 埋れ木を産出する奥州の名所。「粹の名を取る」にいひかけた。

○埋れ木 世に埋れて名の顯はれぬ事を、名取川の名物埋れ木にいひかけた。

○したたるき あつさりしない。しつこい。近松作「傾城反魂香」中之巻に「ア、いだだるい、手の隙がない、通りやう」。この文は、奴の袖に生着油が滴つてゐるに、徳兵衛のしつこい戀をいひかけた。「戀の奴」の奴は、丁種をいふのであるは勿論。そして徳兵衛が戀の奴(戀)からんで自由を悉はれ、身をもあくづすを「戀の奴と成る」といふことなつてゐる歌をいひかけたのである。

○生玉の社 大阪市天王寺區生玉町にある生國魂神社をいふ。現在の社は大正三年の建築で、生玉造といふ形式である。社地丘上にあつて大阪市街が見渡される。昔は附近に色茶屋興行物などがあつて、盛り場であつた。

○出家屋 出店茶屋。

○長藏 醬油で袖がしばたれてゐる奴の名。

○久本寺 大阪市天王寺區谷町八丁目にある。

○長久寺 大阪市天王寺區谷町八丁目にある。

○上町 大阪東横堀以東の山手の總稱。

○屋敷 武家屋敷。谷町以東から寺町にかけて武家の屋敷内であつた。

○や 「往にや」「言や」「や」は、やれの時で、物柔らかな命令。

○とも とも。座れずともは「座れないでなし」の意。

○道頓堀 芝居なごがあるので、寄つて遊ぶなどの意。

○これはどうぢや これはどうして此所に居るのぢや。

○贅言ひて 高慢けなむたご言うて。贅言ひうて。

○物真似：むつかしい 客は物真似芝居を見にそれ其處へ行つた。その客が戻つて、妾と貴方とさうしてゐるを見れば、やかましう言ふに違ひない。芝居では老若男女、貴賤、僧俗、武士、傾城など、それ／＼の者を真似るによつて、芝居を物真似といふ。

○駕籠 遊女屋を得意光してゐる駕籠昇をさす。

○梨も礫も打たんせぬ 礎を打つて合圖するより出た言葉で、音沙汰なきをいふ。梨と書けども無の義。

○首尾 様子。貴方の内輪の事情を存せぬほといふのである。

○便宜 たより。

○丹波屋 徳兵衛が馴染の色茶屋。

○お百度 お百度詣り。頻繁に問ひ合はす意。

○座頭 馴染の盲人であつて、三味線を弾き唄を講つて酒宴の座興を助けたもので、幫間の一種の大市はその名。

○在所 徳兵衛の郷里をさす。

はや戻ると言や、それ忘れず共安土町の紺屋へ寄つて錢取りや、道頓堀へ寄り
 やんなや」と、影見ゆるまで見送りく、簾を上げて「コレお初じやないか、こ
 れはどうじや」と編笠を、脱がんとすれば「ア、まづやはり被て居さんせ、今日
 は田舎の客で、三十三番の観音様を廻りまし、こゝで晩まで日暮しに、酒にする
 じやと贅言ひて、物真似聞きにそれ其處へ、戻つて見ればむつかしい、駕籠も皆
 知らんした衆、やつはり笠を被て居さんせ、それはさうじやが此頃は梨も礫も打
 たんせぬ、氣遣ひなれど内方の首尾を知らねば便宜もならず、丹波屋まではお百
 度程尋ぬれど、彼處へも音信も無いと有、ハア誰やらがヲ、それよ、座頭の大市
 が友達衆に聞けば、在所へ行かんしたとは言へ共つんと誠にならず、ほんに又あ
 んまりな妾はどうならふ共、聞きたうも無いかいの、此方様それでも濟もぞいの
 妾は病ひになるはいの、嘘ならこれ此痞を見さんせ」と、手を取つて懐の内根み
 たる口説き泣き、ほんの、女夫に變らじな、男も泣いて「ヲ、道理く去ながら、
 言ふて苦にさせ何せふぞいの、此中己が憂き苦勞、盆と正月其上に、十夜お祓煉
 掃を一度にする共斯うは有まい、心の内はむしやくしやとやみらみつちやの皮袋、

○つんと さんど。さつぱり。この副詞は下に

打消の語を伴ふ。近松作「生玉心中」に「おうと言

うたが何の事ぞ、つんと此方に覺えがない。

○痞つかへ 癩つかへなごで胸の塞がるやうに苦しいこと。

○十夜 淨土宗で陰曆十月六日から同十五日まで

別時念佛を修すること。「無量壽經」に「於此修善

十夜、勝於他方諸佛國土爲善千載」と。

○お祝 大阪天満大神の御祝祭(六月二十五日)を

いふ。

○煤掃 歳末に行ふ大掃除。「日次紀事」十二月の

條に「此月節吉日、諸社社并地下之良賤各掃家内之

煤塵」。

○やみらみつちやの皮袋 ぬちやくちや。

「やみらしは暗らの義。「みつちや」は、痘瘰癧をみつ

ちや面といふ如くぬちやくちやの義。「の皮袋」は添

へ加はつた調で、八文字屋本などの「何のへちまの

皮袋」などいふの類。尤も「へちまの皮袋」の皮袋は

何の用もなさぬより添はつたのであらうが、惣想上

「みつちや」にも添加されたものである。そして袋は

銀を貯れる縁から「銀事」につづけた。

○かね 上方では江戸とは違つた、黄金は殆んど

使用しないので銀によつたのであるから、「かね」とい

銀事かねごとやら何じなんやら譯わけは京へも上つて來る、能ようもくく徳兵衛とくべいゑが命いのちは續つづきの狂言きやうげん

に、したらば哀あはれにあらふぞ」と溜息ためいきほつと繼つぐばかり、「ハテ輕口かるくちの段だんかいの、

それ程ほどに無い事ことをさへ妻わには何故なぜに言いはんせぬ、隠かくさんしたは譯わけがある何故なぜ打明うちあ

けて下くだんせぬ」と、膝ひざに凭もたれてさめくと涙なみだは、延のびを浸ひたしけり、ハアテ泣なきやん

な怨うらみやるな、隠かくすではなけれ共言どもいふても埒らちの明あかぬ事こと、さりながら大方先濟おほかたますみよ

つたが、一部始終いちぶしじうを聞きけたも、己それが旦那だんなは主しゆながら現在げんざいの伯父甥おぢぢいなれば懇ねんにも預あづ

かる、又身共またみどもも奉公ほうこうに是程これほども油斷ゆだんせず、商あきなひ物ものも文字もじひらなな違ちがへた事ことのあらば

こそ、此比裕このぢろあはせをせふと思おもひ堺筋さかいひぢぢで加賀かが一匹いっぴき、旦那だんなの名代なだで買かひが、是これが一期いちに

○狂言 歌舞伎狂言。

○段 場合といふ程の意に、狂言の語に應じてそれに縁ある

語の「段」を用ひた。

○それ程に無い事：言はんせぬ あなだ私わたしは深

い問柄もんがらではありませぬか。然るにそれ程に隠かくさねばならぬ事こと

もない事ことまでも隠して、何故なぜ言いうて下くだされませぬぞ。

○延 延紙のびがみの略。縦七寸横九寸ばかりの小杉原紙をいふ。粹

客遊女の輩きやくゆう女のたぐひが疊紙かさみとして懐中してゐる紙。

○一部始終 事柄の始めから終りまで。

○たも 給はれ。下へたされ。

○伯父甥 伯父おぢと甥ぢいとの間柄。

○もじひらなな 「びたひらなな」さもあるも同義。一錢半錢

の義。「もじ」は文字であつて錢をいふ。「びた」は銀錢である。

「ひら」は片又は枚の義、以て一枚の錢の意。「なな」は半であつ

て半錢の意。

○堺筋 大阪日本橋筋の南北に通じてゐる大路をいひ、泉州

堺への街道に當る。

○加賀 加賀絹の略。羽二重の類。「増補俚言集覽」に「加

賀は古へより好き絹を出す、今も加賀羽二重は名物なり。

○旦那の名代で買ひ懸かる 主人の名義で懸買する。

○内儀 町家などで主婦を呼ぶ稱。内方。

○二貫目 金二兩を銀六十匁替し、相場を二十圓とすれば、銀二貫目は六百六十六圓餘に當る。然も銀のよく利いた時の事であるから、銀二貫目あれば立派に開店できたのである。

○談合 「だんかふ」であつて、「だんがふ」ではない。はなしあひ。

○取あへもせぬ 取合つて話もしない。「取あへ」は取敢でなくて「取合ひ」の訛。

○うつそり うつかり者まねけ者。自分をさす。

○跡の月 前月。
○もやくり出し 心たつき出し。「もやくる」は「もやく」ともいひ、紛擾の義。

○蜷川の天満屋 大阪蜷川の南岸の遊廓天満屋。「蜷川は堂島川の北にあつたが、今は埋められて無い。

○腐り合ひ 男女深く契り合つて離れぬ意。「くさり」は鈍の義。

○四月七日 四月八日は佛生會で、その前日即ち七日は町人の勸定日であり、そしてお初・徳兵衛情死の日となる。

○まくり出し 放逐し。「まくり」は「追ひまくり」なぞいふ「まくり」に同じ。

○大ざか 大阪を「おざか」というたので、其の例は他にも多い。

○我 我意。意地。

○我 我意。意地。

たつた一度、此銀もすはといへば著替賣りても損かけぬ、此正直を見て取て、内儀の姪に二貫目附て女夫にし、商ひさせふといふ談合去年からの事なれど、其方と云ふ人持ちて何の心が移らふぞ、取あへもせぬ其内に在所の母は繼母なるが、我に隠して親方と談合きはめ二貫目の、銀を握つて歸られしを此うつそりが夢にも知らず、跡の月からもやくり出し押しして祝言させふと有、そこで己もむつとして、やあら聞えぬ旦那殿、私合點致さぬを老母を誑し叩き附け、あんまりな爲され様お内儀様も聞えませぬ、今迄様に様を附崇まへた娘御に、銀を附て申受け一生女房の機嫌取り此徳兵衛が立ものか、否と云ふからは死んだ親仁が生かへり申とあつても、否で御座ると詞を過す返答に、親方も立腹せられ、己がそれも知つてゐる、蜷川の天満屋の初めとやらと腐り合ひ、嗚が姪を嫌ふよな、よい此上はもう娘はやらぬ、やらぬからは銀を立、四月七日迄にきつと立商ひの勸定せよ、まくり出して大ざかの地は踏ませぬと怒らるゝ、某も男の我ヲ、ソレ畏まつたと在所へ走る、又此母と云ふ人が此世が彼の世へ反つても、握つた銀を放さばこそ、京の五條の醤油問屋常々銀の取遣りすれば、是を頼みに上つて見ても折しも悪う

○曝貝 「それがひしきもいふ。潮水に洗ひ曝さらされた貝殻。

○しじみ川 蜷川に貝の名の堀と沈みまをいひかけた。

○わが身 汝が身。お初をさす。

○盗み 盗賊。

○家焼 放火犯。

○例 情死の例。

○高 最後の程度。

○死出の山・三途の川 共に冥途にあつて、死者の通過する山と川。

○いさむ 「神をいさめの神樂」などいふ、「いさめ」と同じく、怒める義。

○とても 助詞「て」に「も」の添はつた副詞。どうしても。この副詞は多くの場合に下に打消の語を伴へども、また打消の語を伴はぬ場合もある。ここにあらはその打消の語を伴はぬものである。

○跡の月 前月(既出)

○時貸 一時貸。當座の貸金。

○便宜 たより(既出)

銀もなし、引返して在所へ行き一在所の詫言にて、母より銀を請取つたり、追付
け返し勘定仕舞ひさらりと埒が明くは明く、されども大坂に置かれまい、時には
どうして逢はれぬぞ假令骨を碎かれて身は曝貝の蜷川底の水屑とならばなれ、
わが身に離れどうせふ」と咽び、入てぞ泣き居たるお初も、共に咳く涙、力を
つけて押し止め、扱々いかい御苦勞皆妾故と存ずれば、嬉し悲しう忝し、去なが
ら心慥に思召せ、大坂を堰かれさんしても盗み家焼の身ではなし、どうしてなり
共置く分は妾が心に有ことも、逢ふに逢はれぬ其時は此世ばかりの約束か、さう
した例の無いではなし、死ぬるを高の死出の山、三途の川は堰く人も、堰かる、
人も、有まい」と氣強ういさむ詞の中、涙に咽せて言ひさせり、お初重ねて「七
日といふても明日の事、とても渡す銀なれば早う戻して親方様の、機嫌をも取ら
んせ」と言へば、「ア、さう思ふて氣が急ぐが、其方も知つた彼の油屋の九平次
が、跡の月の晦日たつた一日要事あり、三日の朝は返さふと一命懸けて頼むによ
り、七日迄は要らぬ銀、兄弟同士の友達の爲と思ひて、時貸に貸したるが三日四
日に便宜せず、昨日は留守で逢ひもせず今朝尋ふと思ひしが、明日限に商ひの勘

○男磨く 男らしい態度を下ゆめやうに伊達を好む。男伊達を發揮しようとする。

○如才 如在。ごんざい。謙略。

○初瀬も遠し難波寺：夕暮来て見れば 諸曲「三平寺」の文句。但し「難波の音」とある。九平次がこの諸曲を誦ひながら来る。「難波寺」は大坂四天王寺をいふ。「春の夕暮来て見れば」に、徳兵衛が来て見ればをきかせて、「先なはコレ九平次」とつづけた。

○ふでき 不敵を「ふでき」とも「ふてき」ともよんである。横著といふ程の意。ぶら／＼しく大膽なつた。

○町の衆 町内治安維持の機關たる町會所の人。

○上汐町 大阪市天王寺區内。

○伊勢講 同志の組合を作り、時々會合して酒食をなし、各人の掛金を擲出して他日伊勢参りの費用にあてる。

○利腕 右腕。

○かつら 、「から／＼」「かんら／＼」ともいひ、髻を出して笑ふさま。

○借つた 借りた。(關西地方では、「借りた」を借つたといひ、「買つた」を買つたといふ)。

○聊爾 そつと。かるはすみ。

○身 我が身。おれ。

○一日で身代立たぬ 一日でよいから貸してくれよ。貸してくれなければ破産する。

定も仕舞はんと得意廻りて打過ぎたり、晚には往つて埒明けふ、彼奴も男磨く奴、己が難儀も知つてゐる、如才は有まい氣遣ひしやるなヤアお初、「初瀬も遠し難波寺名所多き鐘の聲、盡きぬや法の聲ならん、山寺の春の夕暮来て見れば」「先なはコレ九平次、ア、不敵千萬な、身共方へは不屈して遊山どころでは有まいぞサア、今日埒明けふ」と手を取て、引止むれば九平次興奮醒め顔になつて、「何の事を徳兵衛、此連れ衆は町の衆、上汐町へ伊勢講にて只今歸るが酒も少飲んでゐる、利腕取てどうする事ぞ、兎相をするな」と笠を取れば「イヤ此徳兵衛は兎相はせぬ、跡の月の二十八日銀子二貫目時貸に、此三日切に貸したる銀それを返せといふ事」と、言はせも果てず九平次かつら／＼と笑ひ、「氣が違ふたか徳兵衛、汝と數年語れども一錢借つた覺もなし、聊爾な事をいひかけ後悔するな」と振放せば、連も笠をはらりと脱ぐ徳兵衛はつと色を變へ、「言ふな／＼九平次、身が此度の大難儀どうもならぬ銀なれ共、晦日たつた一日で身代立たぬと歎いた故、日頃語るはこころと思ひ男づくで貸したぞよ、手形もいらぬと言ふたれば念の爲じや判をせふと、身共に證文書かせおぬしが捺した判が有、さう言ふな九平次」と血眼になつ

と、身共に證文書かせおぬしが捺した判が有、さう言ふな九平次」と血眼になつ

○身代しんたい 其の身に屬する財産。しんしやう。身代を身體しんたいとも書いてあるが、身代の方が古くから用ひられてゐる。

○手形 謄文。借金手形は金引替に行はれる。

○鼻紙入 鼻紙袋びしづいともいふ。懐に挟み持つ兩道りやうどう「はにせこ」のやうなもので、革或は絹を以て片襷を縫ひ、その内に紙、小遣錢、懷中藥、印判、耳かきなどの、ちよつとした攜帶必需品を入れたもの。

○町衆 町役人の方々。町役人(町會所の人々)であるから、印判の見知りもあらうこの意。

○あらがふ 「荒あらいあらし」をばたらかした語。抗爭する。

○横手を打つ 物に威じ或は思ひ當つた時、兩手を横に掌をたたき合はすをいふ。

○鼻紙袋 鼻紙人びしづいともいふ、その條を見よ。

○變へたいやい 變へたぞよ。

○八日 二十八日の略。

○謀判 にせ判。

○がい 正しくは「がひ」である。「かひ」は價あひかへで即ち價値の義。「懸申裝かへまへ」とは、懸に實際してゐる價値の意。

○けんによも無げ 「懸念けんねんけんねんも無げ」の轉訛。思ひ懸けも無げ。意外な様子。「けんによ」は「けんね」けんにようともいふ。「證草しやうそう」に「無懸念むけんねんけんねもなし」思ひ懸けなきなり。

○白々し 知つてゐながら知らぬ振をする。

○のめく 平然へいぜんおめく。近松作「重井筒」

會根崎心中

て責め掛くる、「ム、ウ何じや判とはどれ見たい」、「ヲ、見せいで置かふか」と、懷中の鼻紙入より取出し、「お町衆なら見知りもあらふ、コリヤ是でもあらがふか」と、開いて見すれば九平次横手を打ち、「なる程判は己が判、エ、徳兵衛土に食附き死ぬるとてもこんな事はせぬものじや、此九平次は跡の月の二十五日、鼻紙袋を落して印判共に失ふた、方々に張紙して尋ねれども知れぬ故、此月からコレ、此御町衆へも斷り印判を變へたいやい、二十五日に落した判を八チ日に捺されふか、扱は其方が拾ふて手形を書て判を据へ、己を強請つて銀取らふとは謀判より大罪人おほざいじんこんな事を爲ふよりも盗みをせい徳兵衛、エ、首を斬らせる奴なれど懇甲斐けんがいに免して置く、銀になるならして見よ」と手形を顔へ打附け、はつたと睨む顔つきはけんによも、無げに白々し、徳兵衛くはつと胸急むねいそいて大聲上げ、「扱工んだり〜、一杯食ふたが無念やな、ハテ何とせふ此銀をのめく」と只己れに取られふか、斯う工んだ事なればでんどへ出ても己が負け、腕先で取て見せふコレヤ、平野屋ひらのやの徳兵衛じや男じやが合點か、己れがやうに友達を騙つて倒す男じやないに「何面目なんめんにのめく、人に面つらしをまがられん」。

○でんと 「でんころ」(出所)の訛略。公儀。法廷。

○しやらな 生意氣な。

○撲合ひ振合ひ叩き合ふ 同類語を重ねて高潮に達する。所謂漸層法(Chimera)。

○棒疎め 棒をもつて取囲み、人を疎めて動かせぬやうにすること。近松作「傾城酒吞童子」に親兄弟棒づくめにして、追ひ出せ叩き出せし。

○蓮池 生玉社の門前にある池。

○三重 黎明(しやうみやう)から出た語で、三絃の調子の高い一種の強き方。人の聲音は三絃の三重の音調が出されない爲、三絃に合はせて唄はれぬによつて、文句も略すことがある。

○おのれ 「おぢれ」といひ、惡み罵る時に發する一種の威動詞で、代名詞から轉じたもの。

○恥かしし 「恥かし」を、恥かししといふので、「頼もし」を、頼もししといへると同じ類である。そして「恥かし」にふりよも力があつてよい。之を文法の親といふは踏である。

○役に立ち 用立て。貸與し。

○我が手が手で書かせ 彼が我に書けというて我らの手で書かせ。

○逆ねだれ あべこべに強請すること。

○男も立たず 男の面目も潰れる。

○笑止 いたはしいこと。この語も「勝事(しよ)う」であつて、すぐれる事の義から轉じて、異様な事、當惑、心を痛める事、いたはしい事の意に轉じたのであらう。

○うつせ具 肉の脱落した貝殻。ここの文は、鯛貝が流れて洗はれて肉なき貝殻となるに、流れの

サア来い」と、掴み附く「ヤア洒落な丁稚上りめ、投げてくれん」と胸座取り、

撲合ひ振合ひ叩き合ふ、お初は跣足で飛んで下り「あれ皆様頼みます、妾が知つた

お人じやが駕籠の衆は居やらぬか、あれ徳様じや」と身を蹴り詮方なくも哀れな

り、客は元より田舎者「怪我があつてはならぬぞ」と無體に駕籠に押入るゝ、

や先待つて下んせなふ悲しや」と泣く聲ばかり「急げ」と一散に駕籠を早め

て歸りけり、徳兵衛はたゞ一人九平次は五人連れ、あたりの茶屋より棒疎め蓮池

まで追出し、誰が踏むやら叩くやら更に分ちはなかりけり、髪も解かれ帯も解

け、彼方此方へ伏轉び「やれ九平次め畜生め、をのれ生けて置かふか」と、よろ

ぼひ尋ね廻れ共逃げて行方も見えばこそ、其儘其處にどうど坐り大聲上げて涙を

流し、いづれもの手前も面目なし恥かし、全く此徳兵衛が言ひ懸けたるで更

になし、日頃兄弟同然に語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きし故、明る七日此

銀がなければ我らも死なねばならぬ、命代りの銀なれ共互の事に役に立ち、手

形を我が手で書かせ、印判据へて其判を前方に落せしと、町内へ披露して却つ

て今の逆ねだれ、口惜しや無念やな、此如く踏み叩かれ男も立たず身も立たず、

身(遊女)に馴染んで本心を失うた者となるをきかせた。そして「うつけ貝うつなき」同じ頭音の語につづけた。所謂頭韻法、これを色の關路につづけて、色に迷うて心が翻くなり放心となる意にいうた。

○燈火 蜷川遊廓、蜷川の南岸の燈火。
○四季の螢よ雨夜の星か 四季を通じて蜷川遊廓の燈火が、蜷川邊に螢くを螢に喩へ、關路を照すを雨夜の星に喩へた。

○花 花のやうな美妓。解語の花。
○梅田橋 蜷川に架す。この橋の南岸は堂島新増、蜷川遊廓である。

○旅の鄙人地の思ひ人 田舎の旅人、大阪居住の馴染深い人。これ等の人々が蜷川遊廓に入り來るのである。
○譯の道 戀の道。

○新色里 堂島新増、蜷川遊廓は、本曲の上演された元祿十六年より數年前に遊女町となつたれば新色里といふ。此時曾根崎新地は未だ開けてゐない。
○無慚 慚を知らぬ義より轉じて、あはれむ意。いたはしむこと。

○よね 遊女。米(よね)を善薩といひ、遊女も善薩と異稱するより、遊女を「よね」ともいふ(異説もある)。

○譯の悪い 不都合な。
○たんと 淨土。物の多いさま。この譯盡し、足「じりぬ」との約である。

○ほん「本當」の略。眞實。

二、最前に擱み附、食附いてなり共死なんものを」と大地を叩き齒齧みをなし、

拳を握り歎きは、道理とも笑止共思ひ、遣られて哀れなり、「ハア斯う言ふても無益の事、此徳兵衛が正直の心の底の涼しさは、三日を過ぎず大坂中へ申譯はして見せふ」と、後に知らるゝ詞の端「いづれも御苦勞かけました、御免あれ」と

一禮述べ、破れし編笠拾ひ被て顔も傾く日影さへ、曇る涙に搔暮れく、すこすこ歸る有様は目も當て、られぬ

戀風の身に蜷川、流れては其うつせ貝現なき、色の關路を照せとて、夜毎に點す燈火は、四季の螢よ雨夜の星か、夏も花見る梅田橋、旅の鄙人地の思ひ人心々

の譯の道知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はし、無慚やな天満屋の、お初は内へ歸りても、今日の事のみ氣に懸り、酒も飲まれず氣も濟まずしく、泣いて、居る所へ、隣のよねや傍輩のちよつと來ては「なふ初様、何も聞かんせぬか、徳様は何やら譯の悪い事有て、たんと撲たれさんしたと、聞たがほんか」といふも有、「イヤ妾が客様の話じやが、踏まれて死なんしたげな」といふも有、

「騙りを言ふて縛られて」の「贖判して括られて」と、ろくな事は一つも言は

○ろく「まろく」(圓)の義。まろく。公平満足。あたりまへ。

○問ふにつらさ 忘れてもあるべきものを、問はれるによつて思ひ出す辛さ。「續古今集」卷十四、戀四の部、西院皇后の歌に「忘れてもあるべきものを中々に問ふにつらさを思ひ出でつる」。世権曾我にも問ふにつらさをのまさり草。

○死んでのける 死んでしまふ。「のける」は終る意。「丹波與作待夜のごむろぶし」上之巻に「餅が咽に詰つて遂に死んでのけました」。

○編笠 ぞめき客が大門口で編笠を求め、これを被つて遊女町を歩くは當時の風俗である。「冥途の飛脚」に「青編笠の紅葉して、炭火はのめく夕まで」。「心中天の細網」に「人目を忍ぶ夜の編笠なごごある」。

○お上 御上の間の義。主婦の居間をいふ。「大經師青唇」に「お前はお上へ結構な布團敷いて」。

○やくたい 「やくたいもない」といふ。益も無いにかれこれ思ひなすこと。以てうるさく厄介なこと、つまらないこといふ。蓋し「やくたい」は益體であらざる異説もある。

○いから 「いかい」態の副詞形。きつう。甚たしう。

○氣が盡きた 氣力がなくなつた。氣分が減入めいじつた。

○切なき せまりて苦しい。悶え苦しい。権調菜に「せつなき切なきの義、物語類にせちにも見えたり、いは添字なり、じゆつなき意は通じて、此なきは實字なり」とあれど、「なき」は甚だしい意を示す接尾語である。

○ぐわらり ずつかり。

す問ふに辛さの見舞なり、嗚呼いやもう言ふて下んすな、聞けば聞く程胸痛み委から先へ死にさうな、いつぞ死んでのけたい」と泣くより外の事ぞなき、涙片手に、表を見れば夜の編笠徳兵衛、思ひわびたる忍び姿ちらと見るより飛立つばかり、走り出んと思へ共おうへには亭主夫婦、上り口に料理人、庭では下女がやぐたいの目が繁ければさもならず、ア、いかう氣が盡きた、門見て來ふ」とそつと出「なふ是はどうぞいの、此方様の評判いろくに聞た故、其氣遣ひさく、氣違ひのやうになつて居たはいのふ」と、笠の内に顔さし入、聲を立すの隠し泣き哀れ、切なき涙なり、男も涙にくれながら、聞きやる通りの工みなれば言ふ程己が非に落ちる、其内四方八方の首尾はぐはらりと違ふて來る、最早今宵は過されずとんと覺悟を極めた」と囁けば内よりも「世間に悪い取沙汰ある、初様内へ這入らんせ」と聲々に呼び入る、「ヲウ、あれじや何も話されぬ、妾がする様にならんせ」と、打掛の裾に隠し入這ふく中戸の、沓脱より忍ばせて、縁の下屋にそつと入れ上り口に腰打掛け、煙草引寄せ吸附けてそしらぬ、顔して居たりけり、かゝる所へ九平次は悪口仲間二三、座頭まじくらどつと來り、ヤアよね様

○打掛 帯をした上に打掛けて着る小袖。

○中戸 店裏と内庭との境にある戸。遊女などが馴染男と密會する場所は中戸あたりが多かつた。

○香脱 香脱石のある土間。

○まじくら 変り合ひ。まじり。「倭調架に」まじるは難また交をよめり云々、俗語に何まじくらともいへり。

○のさばり上る 横柄に上る。「倭調架に」のさばりの意。意氣揚々の意也、のさばるともいふあり。

○ありべかかり あり體「てい」の通り。形「かた」の通り。いつもの所作通り。

○擧句 連歌の最移の句をいひ、轉じて物の結末をいふしまひ。

○死なすがひなぬ 死なんとする價値「かへ」なぬ。死なんばかりのひびいぬ。「かひ」は「かへ」(價)即ち價値の體。

○一分 面目。

○うせ 「うせる」の中止形。「うせる」は「わせる」の轉。「さる」來る。「うせ」は來りの意。近松作「大職冠」に「また其上に殺ぬぶりにうせ、たか」。

○まつかいさま 「まつかへさま(眞反様)の轉。正反對。

○野江 今、大阪の東で、京街道の地。往時利擧幕基地があつた。

○飛田 今、大阪の南で、阿部野幕地の北。往時利擧幕基地があつた。「野江か飛田もの」とは、徳兵衛

達淋しさうに御座る、何と客になつてやらふかい、何と亭主久しいの」と、のさ

ぱり上れば「それ煙草盆お杯」と、ありべか、りに立騒ぐ、「イヤ酒は措きや飲ん

で來た、扱話す事が有、これの初が「一客平野屋の徳兵衛めが、身が落した印判拾

ひ、二貫目の贗手形で騙らふとしたれども、理窟に詰つて擧句には、死なすがひ

な目に遭ふて一分は廢つた、向後爰らへ來る共油斷しやるな、皆に斯う語るのも

徳兵衛めがうせ眞反様に言ふとても、必ず眞にしやるなや、寄せる事も入らぬも

の、どうで野江か飛田もの」と誠しやかに言ひ散らす、縁の下には齒をくひしば

り身を顛はして腹を立るを、初は是を知らせじと足の先にて押鎮め、押へ静めし

神妙さ亭主は久しい客の事、善し悪しの返答なく、「さらば何ぞお吸物」と紛ら

してぞ立にける、初は涙にくれながら「さのみ利根に言はぬもの、徳様の御事幾

年馴染み心根を明かし明かせし中なるが、それは「いとしばげに微塵譯は悪う

が惡事をたくらむによつて、いつかは其の罪惡露見し、野江か飛田へ引かれて刑場の露と消えるべき者であるとの意。

○以前喧嘩した時は「九平次め畜生め、おのれ在けて置かうか」

と尋ね廻りながら、此所で九平次に逢ひ、その盗人呼ばはりの暴言を聞きながら、徳兵衛齒をくひしほりて休へるは如何なる意氣地なしぞ。

○知らせじと 徳兵衛の居る事を亭主に知らせまいと。

○神妙さ けなげさ。お初が徳兵衛の感情の激發を抑へたのをほめた。

○久しい客 徳兵衛は久しい間の馴染み客。

○利根 利發な根性の體。オの發したること。利口。口上手。

○いとしばげ 「いとしばし」の轉倒語。憚(いたは)しは。

○ひし「ひし々(拉)の義。碎けること。破滅。この文は、友達の頼みにならうとした男氣が、却つて自分の破滅を招いたもの意。

○しな折。時。場合。「行きしなに」「歸りしなに」などいふ「しな」と同じ語。「萬葉集」卷十四に「阿抱思太毛あははしたも」とある「思太」と同義語である。

○足で問へば 足で徳兵衛をつついて心を尋ねれば。

○きよつとして 「きよつとして」といふが普通。脚にこたへてびつくりして。

○忝なかるわいの 反語をいうて、忝くないを稱言したるもの。

○どう拘摸 「どうは」「どう因果」「どう畜生」など「どう」と同じで、「拘摸」と熱して其の意義を強める接頭語。

○阿房口 たはけた言葉。ほか々ち。「あほう」は阿房利と云ふ獄卒から起つた語であらう。

○しめり泣き 眼が涙に濕り泣きの體。思ふに「しめ泣き」のことであらう。堪へ難い悲しみに聲をもえ立てず、引締めてしめり泣きに泣くこと。

○相場が悪い 折合がつかぬ。妥協ができないを相場が悪いといふ。さすが商家の大都市大阪人の言葉である。

○おじやいの 正しくは「おぢやいの」である。おぢやいの。

○大盡 傾城質の上客をいふ。「塵ひさうな」とは嫌ひらしいの意。

なし、頼もし立てが身のひしで騙されさんしたもののなれ共、證據なければ理も立たず、此上は徳様も死なねばならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞きたい」と獨り言になぞらへて、足で問へば打領き、足首取つて咽笛撫で、自害するとぞ知らせける、「ヲ、其筈、いつまで生きても同じ事、死で恥を雪がいでは」といへば九平次きよつとして、「お初は何を言はるゝぞ、何の徳兵衛が死ぬるものぞ、若し又死んだら其跡は、己が懇してやらふ、其方も己に惚れてじやげな」と言へば、「こりや忝なかるわいの、妾と念比さあんすと此方も殺すが合點か、徳様に離れて片時も生きて居よふか、そこな九平次のどう拘摸め、阿房口をたゝいて人が聞ても不審が立、どうで徳様一所に死ぬる妾も一所に死ぬるぞやいの」と、足にて突けば縁の下には涙を流し、足を取て推戴き、膝に抱つき焦れ泣き女も色に包みかね、互に物は言はね共、肝とくゝにこたへつゝしめり、泣きにぞ泣きわたる、人知らぬこそ哀れなれ九平次も氣味悪く、相場が悪いおじやいの、こゝなよね衆は異なる事で、己等がやうに銀使ふ大盡は嫌ひさうな、淺屋へ寄つて一杯してぐはらぐはら一分を撒き散し、そして往んたら寝よからふア、懐が重たうて歩きにくい

○淺屋 観川遊覧の遊女屋の屋號。

○一分 裕福らしく蒸籠するのであるから、これは元來量分判並重さ一匁二分をいふ。

○内衆 内に居る奉公人などをさす。

○店 店務をいひ、上休れば戸締りとなる。

○八つ 午前二時。

○白無垢 全部白色の衣服をいひ、死装束。

○下屋 縁の下屋。

○釣行燈 梁などに吊す行燈で、六角又は八角の蓋(かさ)がある。そして其蓋(かさ)の下に火を點す装置をしたもので、終夜點火し風くによつて之を有明行燈ともいふ。

○箱梯子 梯子の側面に抽斗又は押入などの附いたもの。

○有明 有明行燈の略。釣行燈をいふ。「釣行燈」を見よ。

○火打箱 火口・火打石・火打金を入れた箱。

○玉葛 蕨草の總稱。「這ひまっは。」、「縁を」は玉葛の縁語。

○闇の現 「玉葛の玉より、鳥羽玉の玉に縁を求めて、古今集(卷十三、戀三の部の歌)うは玉の闇の現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり」をよまへた。

と惡口だらけ言ひ散し喚いてこそは歸りけれ、亭主夫婦「今宵ははや灯も仕舞へ、泊りの衆は寢せませひ初も二階へあがつて寢や、早う寢や」といひければ、「そんなら且那様内儀様、もうお目に懸りますまいさらばでござんす、内衆もさらばさらば」と餘所ながら、暇乞して闇に入是一生の別れとは、後にこそ知れ氣も附かぬ愚かの心不便さよ、それ釜の下に念を入着を鼠に引かするな」と、店を上げつ門鎖しつ、寢るより早く高軒如何なる夢も短夜の八つになるのは、程もなし、初は白無垢死出立戀路の闇黒小袖、上に打掛け差足し二階の口より差覗けば、男は下屋に顔出し招き領き指さして、心に物を言はずれば梯子の下に下女寢たり、釣行燈の火は明かし如何はせんと案せしが、棕櫚箆に扇を附け箱梯子の二つ目より、煽き消せ共消えかぬる、身も手も伸ばしはたと消せば、梯子よりどうど落ち行燈消えて暗がりに、下女は「うん」と寢返りし、二人は胸を顛はして尋ね廻る危さよ、亭主奥にて目を覺し、「今のは何じや、女子共有明の火も消えた、起きて點せ」と起されて下女は眠るに目をすりく、丸裸にて起き出「火打箱が見えぬ」と、探り歩くを觸らじと彼方此方へ這ひまつはる、玉葛、苦しき闇の現なや漸う二人手

○車戸の音訝しく、車の附いた戸を引開ける音のするのを、人が聞いて訝しがり耳を立てるのを氣遣つて。

○ちやうど、火打金で火打石をちやつち打つ音のまゝ、「この文、「ちやうど」といひ、「かち〜」といひ、疑ふ念と斷つ續きの音をよく寫してある。

○眞木、楡形などの總稱。袖を巻くにいひかく。

○虎の尾を踏む、心に危懼を抱くをいふ。「香經周書若菜篇に、心之憂危、若踏虎尾、踏于春氷。」

○石の火、電光の如く疾きこと。「淮南子に、人生天地間、如擊石見火、電光過隙。」

○名残、名残の語を重ねて修飾した。

○徒しが原、無常の原。萩原。

○一足づつに消えて行く、「霧」に照じて、「消え」といひ、歩々死地に近づくをいふ。「摩耶經の偈に、譬如摩耶殿羅刹羊就屋所、歩々近死地人命亦如是。」

○夢の夢、佛説より見れば、現世はほかない夢の世なるに、死に行くはかなさ、さながら夢の内に夢を見る心地する。「莊子齊物論に「方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉。」

○七つの時、午前四時で、後夜五更に當る。

○寂滅爲樂、「涅槃經四句偈の一。生滅の苦相を現する事なき佛の國を眞の樂と爲すとの意。梵鐘の音四句偈の響ありといひ、諸曲「三井寺」にも見えてゐる。以て死ぬを樂しみとする意をいひかけた。

を取合、門口迄そつと出懸金ははづせしが、車戸の音訝しく明けかねし折から、下女は火打をはた〜と、打音に紛らかしちやうど打てばそつと明け、かち〜打てばそろ〜明け、合はせ〜と身を縮め袖と〜を眞木の戸や、虎の尾を踏む心地して二人續いてつ〜と出、顔を見合せ「ア、嬉し」と死に、行く身を喜びし、哀れさ辛さ淺ましさ、後に火打の石の火の命の、末こそ短けれ

會根崎心中 徳兵衛 道行

此世の名残、夜も名残、死に、行く身を譬ふれば徒しが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の、鐘の響の聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは、草木も、空も名残と見上ぐれば、雲心なき水の音北斗は冴えて影映る星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の橋と契りていつ迄も、我と其方は女夫星、必ず添うと縋り寄り、二人が中なる涙、川の水嵩もまさるべし、向ふの二階は、何屋とも、覺束情け最中にて、まだ寝ぬ火影聲高く、今年の心中よしあしの言の葉草や、繁

○雲心なき水の音 雲は何の苦もなく、逝く水音も虚心にして、遂に盡きず、あはれ人生のほかなきを思はせる。

○北斗は冴えて影映る 北斗星は空に冴えて、其の影水に映る。「北斗」は、天の北極から約三十度の距離にある七つの星の群である。

○星の妹背 牽牛織女の女夫星。

○天の川 牽牛星と織女星との間に川の如く見える星の群。

○梅田の橋 蛭川に架す。蛭川遊廓から梅田橋を渡つて曾根崎の森に行くのである。

○鶴の橋 鶴は鳥の名。七月七日の夜、鶴が群をなし天空を覆めて橋をなし、以て織女を牽牛の處に渡すといふ。この故事によつて、鶴の橋を男女契りの橋渡しの意にいふ。

○川 蛭川をさす。

○向ふの二階 梅田橋を渡り振り返つて見た對岸蛭川遊廓(即ち堂島新地)の青樓。

○心中 情死。

○くれはどりあやなや 心もかきくれを呉織「くれはどり」にいひかけ、漢織「あやはどり」のあやから「文(あや)なや」にいひかけてつづけたもので吳織・漢織の織女に關係はない。「文なや」は、何のおもむきもないわいの意。

○どうで女房泣きければ 「心中江戸三界」の歌の文句に加筆した文。

○今日とて 今日こそ愉快な日であるとして。

るらん、聞くに心も吳織漢なや昨日今日迄も、餘所に言ひしが明日よりは我も噂の敷に入、世に謠はれん謠はる謠へ謠ふを聞けば、「どうで女房にや持ちやさんすまい、いらぬ者じやと思へ共、げに思へ共歎け共身も世も思ふ儘ならず、いつを今日とて今日が日まで、心の伸びし夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、どうした事の縁じややら、忘るゝ際は無いはいな、それに振棄て行かふとは、遣りやませぬぞ手にかけて、殺して置いて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、「歌も多きにあの歌を、時こそあれ今宵しも、歌ふは誰そや聞くは我、過ぎにし人も我も、一つ思ひ」と縋り附き聲も惜します泣きわたり、いつはさもあれ此夜半は、せめて暫しは長からで心も夏の夜のならひ、命を追はゆる鶏の聲明けなば憂しや天神の、森で死なんと手を引きて梅田堤の※小夜鳥明日は我身を、餌食ぞや、「誠に※この文意は今日こそ愉快な日であるとの心の併げた日としてはなく、いつも物思ひにくれて以て今日今夜に至つたといふのである。

○追はゆる 「おはへる」の訛。「おはへる」は「おふ」(追を延べた語で、「ゆふ」(結を「ゆはへる」といふの類)。
○天神 「二」の文は、「暮しやに」牛天神をいひかけてつづけた。天神の森は即ち曾根崎天神の森である。
○梅田堤 蛭川北岸の堤。
○小夜鳥 夜鳴き鳥。「さ」は接頭語。「和漢三才圖會」卷四十三、「慈鳥(からす)の條に「至黃昏宿于叢林、離夜中一月既出則鳴」。

◎厄の年 陰陽家の説で、厄年に遭ふによつて忌まはぬ年齡、十九歳、二十五歳は共に厄年である。

◎百八 珠数は百八顆の珠を聯ねて造つたものを正規とする。蓋し百八煩惱を滅盡する爲に撰んだ數である。

◎盡きる道 行き結る道に、命の盡きる道はいひかく。

◎曾根崎の森 大阪梅田驛の南方に今も天神社があつて俗にお初天神といふ。雜沓を極めた地となつてゐるので、森などあつた昔の有様を憶ふ由もない。

◎人魂 俗傳に、人の隨從直前に其の人の靈魂光を放つて虚空に飛去るといふ。「和漢三才圖會」に、火の玉に尾を引いた人魂が、大空を飛び行く畫が載せてある。

◎死出の山 冥途にあつて、死者の越える山。詳しくは「十五經」に出てゐる。

◎結びとめ繋ぎとめん 人魂を見た時に呪「まじなみ歌」魂は見づまは誰とも知らねども結びとめつしたがへのつましの語句に據つた。

◎不便 たよりない義より轉じて、いたはしいこと。

◎結び松…相生 松と棕櫚が其の根を一度に結んだ相生の一本で、曾根崎の森にあつた有名なもので、其の國は心中大鑑に出てゐる。

今年こととしは此方こなた様も二十五歳ふたじゅうごさいの厄やくどしの年とし、妾わしも十九じゅうくの厄年やくどしとて、思おもひ合あふたる厄やくどし崇たかり縁えんの深ふかさのしるしかや、神かみや佛ほとけにかけ置きし現世げんぜの願ねがひを今いまこゝで、未み來らいへ回まわり後ごの世よも猶なほしも一つ蓮はすぞや」と、爪つめ繰くる珠じゆ數ずの百八ひやくはちに涙なみだの玉たまの、數かず添そひて盡つきせぬ、哀あはれ盡つきる道みち、心こゝろも空そらも、影かげ暗くらく風かぜ沈しん々んたる曾根崎そねざきの森もりにぞ、辿たどり著つきにける、彼處かこにか此處こゝにかと拂はらへど草くさに散ちる露つゆの、我われより先まづにまづ消きえて、定さだめなき世よは稻妻いなづまかそれか有あらぬか「ア、怖こは、今いまは何なにといふ物ものやらん」、「ヲ、あれこそは人魂ひとたまよ、今宵死こよひしするは我われのみとこそ思おもひしに、先立さきだつ人も有ありよな、誰たれにもせよ死し出での山やまの伴ともひぞや、南無阿彌陀佛なむあみだぶつ、」の聲こゑの中なか、「あはれ悲かなしや又またこそ魂たまの世よを去さりしは南無阿彌陀佛なむあみだぶつ」といひければ、女をんなは愚おろかに涙なみだぐみ、「今宵は人の死しぬる夜よかや淺あさましさよ」と涙なみだぐむ、男おとこ涙なみだをはら〜と流ながし、「二つ連れ飛とぶ人魂ひとたまを餘よ所ところの上うへと思おもふかや、正ただしう御身みみと我魂わがたまよ、」何なになふ二人ふたりの魂たまとや、はや我々われわれは死ししたる身みか、「ヲ、常つねならば結むすび止とめ繋つぎ止とめんと歎なげかまし、今は最期さいごを急いそぐ身みの魂たまの在所ありがたを一つに住すまん、道みちを迷まよふな違たがふな」と、抱いだき寄よせ肌はだを寄よせかつばと伏ふして、泣なき居ゐたる、二人ふたりの心こゝろぞ不ふ便べんなる、涙なみだの絲いとの結むすび松棕櫚まつしゅろの一本ひとときの相生あひまひを、

○連理 一爾相對し脈理を連接して生じること。よつて夫婦の契を連理の契といふ。白居易の「長恨歌」に「在地願爲連理枝」。

○露の憂き身 朝露の日影まつ間の如きはかかない憂き身。

○染小袖 お初は白無垢の上に黒小袖を着たことが前に見えてゐる。

○玉箒 物を拂ひ除けるものの特、箒櫛は箒に作るものなればかくいひ、「塵を拂ふ」にいひつづけた。

○浮世の塵を拂ふ 俗塵を解脱して安樂淨土を希ふをいふ。

○割れ〜 別れ〜。

○浮名 心中の評判。

○頼もしし 「頼もしさいふべきを」頼もししといへる例はいと多い。

○今は 今際。臨終。死「しに」ぎは。

○死ぬまいか 死なうではないか。「死なうよなあ」と問掛けるのである。

○淺葱染 抱帯の淺葱染なるをいふ。「淺ましや淺葱染」は、同じ頓音語によつた所謂頭韻法。「淺ましや」は、あきれはてた身の上よと悲歎する意。

○かかれとてや 抱帯 かやうに抱へよといふけなのであらう抱帯。

○抱帯 婦人のしごきの腰帯。

連理の契りになぞらへ露の憂き身の置き所、「サア此處に極めん」と、上著の帯を徳兵衛も初も涙の染小袖、脱いで懸けたる棕櫚の葉の其玉箒今ぞげに浮世の塵を、拂

ふらん初が袖より剃刀出し、「若しも道にて追手のかゝり割れ〜になるとても、浮名は棄てじと心懸け剃刀用意致せしが、望みの通り一所で死ぬるこの嬉しさ」

と言ひければ、「ヲ、神妙頼もしし、さほどに心落著くからは最期も案ずる事はなし、さりながら今は時の苦患にて、死姿見苦しと言はれんも口惜し、此二本

の連理の木に體をきつと結び附け、潔う死ぬまいか世に類なき死様の、手本と

ならん」「いかに」と淺ましや淺葱染、かゝれとてやは抱帯兩方へ引張りて、

剃刀取つてさら〜と帯は裂けても主様と妾が間はよも裂けじ」と、どうど座

を組み二三重重ゆるがぬ様に確と締め、よう締つたか、「ヲ、締めました」と、

女は夫の姿を見男は女の體を見て、「こは情けなき身の果ぞや」と「わつ」と泣入る、

ばかりなり、「ア、歎かじ」と徳兵衛、顔振上げて手を合はせ、「我幼少にて眞の父

母に離れ、伯父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩をも送らず此儘に、亡き

跡までも免や角と、御難儀かけん物體なや、罪を赦して下されかし冥途にましま

○は「ごもごも」であるべきところ。

○初秋の初はつ 同じ頭香を重ねた所謂頭韻法。初秋の頃であつた。そして初がの意。

◎心中 情死。

○是から 當處から。此の處から。

○なれ 「なり」とあるべきところ。

○切先 刃のはさまをいひ、「切先三寸」といふ詞もあつて、切れあぢの最も利く「切先」。

○斷末魔 生から死に移る間絶の瞬間をいふ。

「顯宗論」に「佛の害人心者臨終受斷末魔苦」。

○四苦八苦 「四苦は生老病死。之に愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦を加へて「八苦」といふ。

す父母には、追附け御目に懸るべし迎へ給へ」と泣きければ、お初も同じく手を合はせ、「此方様は羨しや冥途の親御に逢はんと有、我等が父様母様は健全で此世の人なれば、何時逢ふ事の有べきを便りは此春聞たれば、逢ふたは去年の初秋の初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば如何ばかりかは歎きをかけん、親達へも兄弟へも是から此世の暇乞ひ、せめて心が通じなば夢にも見えてくれよかし、懐しの母様や名残惜しの父様や」と、噓り上げ、聲も、惜まず泣きければ、夫も「わつ」と叫び入り、流涕焦る、心意氣理りせめて哀れなれ、「何時迄言ふても詮もなし、早々殺して」と最期を急げば「心得たり」と、脇差するりと抜放し、「サア只今を南無阿彌陀」と、言へどもさすが此年月いとし可愛と締めて寝し、肌はだに刃が當てられふかと、眼も暗み手も顫ひ弱る心を引直し、取直しても猶顫ひ突くとはすれど切先は彼方へ外れ此方へそれ、二三度閃く劔の刃、「あつ」とばかりに咽笛のどぶえに、ぐつと通るが「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と、袂通し袂通す腕先も、弱るを見れば両手を伸べ、斷末魔の四苦八苦、哀れといふも餘り有、我とても後れふか息は一度に引取らんと、剃刀取つて咽に突立、柄も折れよ刃も

◎知死期 俗説に人の死ぬ時刻は自から定ま
てゐるといふ、その時期。陰陽家では、人の生年月
日の干支によつて其の死期を豫知するといふ。概し
て潮汐の退ひしく時刻に死ぬといはれてゐる。

砕けと抉り、くりく目もくるめき、苦しむ息も曉の知死期に連れて絶え果て
たり、誰が告ぐるとは曾根崎の森の下風、音に聞え、取傳へ貴賤群集の回向の種、
未來成佛疑ひなき戀の、手本となりにけり

傾けい
城せい
反はん
魂こん
香かう

解題

寶永五年四月に初めて大阪の竹本座に上演されたものであらう。作者は近松門左衛門(時に五十六歳)である。

「外題年鑑」に、「傾城返(原本)魂香 同(寶永)年七月十五日」とあれども、本曲下之巻に、「年は子の年」とある。其の子の年は寶永五年(戊子)であらう。また同中之巻に、「花の三月、はや過ぎて娘の年も二十植、いつの間にかは長持に、桐の葉茂る嫁入月」とあるから、其の上演は四月であらう。寶永五年は狩野四郎次郎元信の百五十年忌になるので、それを當込んだものであらう。

本曲は三巻に分れてゐる。宇治加智掾正本には本曲の下之巻の文が無く、字句も少々變つてゐる。

出處

本曲は狩野元信及び其の妻、土佐將監光信、大津繪書きの又平、名古屋山三の敵討話などを材料として、戯曲に仕組んだものである。

主要人物の略傳

狩野元信は狩野氏第二世で、文明八年八月九日に生れた。初め四郎次郎と稱し、後に大炊助と改む。幼にして畫を父の正信に學び、周文を慕ひ、また小栗宗丹を師とす。十歳の時足利義政に仕へて近侍となる。長じて土佐將監光信の女婿となり、光信の幼兒光茂を後見し、五十歳の時土佐について繪所預となつて、越前守に任ぜらる。後に剃髮して永仙または玉川と號し、法眼に敍せらる。其の畫風は細密滋潤で、山水花木人物鳥獸いづれも清秀を極め、彩墨共に其の美を盡した。實に狩野家の泰斗であつて、世に古法眼と稱す。永祿二年十月六日に歿した。年八十四。京都市上京區新町頭妙覺寺(宗)に葬る。

狩野雅樂助之信は元信の弟。山水人物花鳥を畫くに巧みで、其の筆意元信に似る。天正三年歿す。年六十三。京都市上京區新町頭妙覺寺に葬る。

狩野元信の妻は土佐將監光信の女である。(この女の亡魂が元信と手を携へて熊野參詣する趣向は、)
(反魂香の故事に據つた。そして本曲の題名とした)

狩野采女は後に守信といふ。幼より畫を能くし、長じて其の描く所、山水人物草花鳥獸蟲魚悉く巧妙を極む。寛永十三年徳川家光の命を奉じて東照宮縁起を畫き、剃髮して法眼に敍せられ、探幽齋と號す。寛文二年太上天皇の聖容を謹寫して、筆峯大居士の印を賜はり、法印に敍せられ、食邑を加賜せらる。延寶二年十月七日歿す。年七十三。東京市大森區池上本門寺(日蓮宗)に葬る。

長谷川雲谷は長谷川等伯の門人で、雲谷派の畫家。寛永三年歿す。

土佐光信は繪所預となり、右近衛將監を経て刑部大輔に進み、從四位下に敍せらる。其の畫風は専ら氣韻を主として形似を求めず、彩墨共に細筆を用ひ、纖麗雅致巧妙を極めた。世に光長・光起と共に土佐三筆と稱せられ、狩野元信と共に名聲が高い。大永五年五月二十日歿す。年九十二。

又平は寛永の末頃大津追分邊に住して戲畫を描き、往來の旅人に賣つてゐたといふ。鬼の念佛・藤娘・瓢箪鯰・座頭等の圖がある。其の中で奴の槍持の圖には、「八十八歳又平久吉」と書いたものがあるといふ。この者は岩佐又兵衛とは何の關係もない別人である。

名古屋山三に就いては、日本繪菱川師宣圖の銘ある「名古屋山三郎繪卷」(東洋文庫所藏)の繪詞に載つてゐる。其の文意は、名古屋山三郎が晩春の頃朋友の浪人不破伴左衛門と同道して、北野の梅津掃部方に立寄り、三人連立つて遊女町に行き、揚屋の上林で酒宴遊興を催した。山三郎の相方は桂木であつたが、山三郎は急用が出来て歸つた。伴左衛門は居残つて桂木を口説けども、桂木は山三郎に執心があつて靡かぬ。後に山三郎はこれを知つて伴左衛門と喧嘩し、遂に島原に行く道で斬殺した。伴左衛門の親不破三郎左衛門正春は之を聞いて、山三郎を追跡したが見失つてしまつた。後に山三郎は西國で立身出世し、桂木と夫婦となつたと見えてゐる。

影 響

淨瑠璃では、本曲を改作したものに、「今様傾城反魂香」(享保十七年五)、
 「遊君衣紋鑑」(元禄十二年十二月豊竹座上演)、
 「名筆傾城鑑」(吉田冠子等作、寶曆)などがある。又本曲上之卷、高島館の條は、「祇園祭禮信長」(長は後に記)
 (年十二月豊竹座上演) 第四段の金關寺の段の雪姫の趣向に取合はせてある。其の外宮古路豊後掾の「三熊野かけるふ姿」、
 富本節の「反魂香名残錦畫」など、他流の淨瑠璃にも取られてゐる。

又脚本にも書替へられて歌舞伎芝居に屢々上演され、山東京傳作の讀本「昔話稻妻表紙」(文化三)にも作り込まれてゐる。

上之卷 (氣比の浦。高島館。土佐將監庵室。又平住家)

登場人物の主な者

- 狩野四郎次郎元信(繪師)
- 不破入道道犬(六角左京大夫)(頼賢の執權)
- 宮内卿(中老の局)
- 六角家の腰元大勢
- 修理の介正澄(後に土佐將監光信の門弟)
- 浮世又平(重起)(土佐光信の弟子。大津繪書)
- 道犬・雲谷等の追手大勢
- 雅樂の介之信(狩野元信の弟子)
- 不破伴左衛門宗末(道犬の子。悪人)
- 銀杏の前(頼賢妾腹の娘)
- 道犬の部下大勢
- 遠山(敦賀遊廓の太夫。土佐將監光信の娘)
- 長谷部雲谷(六角左京大夫頼賢召抱への繪師)
- 藤袴(銀杏の前の御髪上げ。五十餘歳のおかめ)
- 矢橋・粟津の百姓等大勢
- 山(土佐將監光信の娘)
- 光信の室
- 又平の妻

櫻 櫛

後柏原天皇の文龜年間彌生の頃、近江國の大名六角左京大夫頼賢は、足利將軍の命を受けて天下の名松の繪を集めた。狩野四郎次郎元信は、とつくの昔に枯れて跡形なき奥州武隈の名松を描き、これを奉つて譽れを得ようと思つた。それで天満天神に祈願を籠めて靈夢を蒙り、神の御告げを便りに、一僕雅樂の介を伴つて越前國氣比の浦に行つた。

四郎次郎は、敦賀町の名妓遠山の道中姿を見て慕ひ寄り、「私は狩野四郎次郎元信と申す拙い繪師であります。太夫様はお知合ひの方々も多い事でありませうから」とて、武隈の名松を描かうとする仔細を語り、「何かよい便りもあらばお世話にあづかり度う存じます」と頼んだ。遠山ははつと驚いて元信の顔を眺め、「扱は元信様とは貴方の事か。妾は土佐將監光信の女であります。父が勅勘を蒙つて浪人となつた爲に、この田舎の遊里に身を沈めました、お恥しう存じます」とて打萎れたが、「御所望の武隈の松の圖は土佐家の祕傳でありますけれども、天神様の夢の御告に、狩野といふ繪師がこの地に下れば、武隈の松の繪の傳授をせよ。父が出世の種にならうとありました」とて快く諾つた。そして雅樂の介を招き寄せて、其の立姿を松に擬へ、笠をあてがつて枝葉の蓋となし、種々の身振をさせて祕傳を授けた。元信は之を悉く寫し取つて、厚く禮を述べた。遠山「天神様の靈夢に任せ傳授したので、恩に著せようとは存じませぬ。ただ末かけて情を思召すなら、必ず外に内儀様を持つて下んすな。奴様にもお頼み申して置きます」とて、元信と婚約を契つた。

其の後、四郎次郎は武隈の松の繪を六角頼賢に奉つて御褒美にあづかり、同家の執權名古屋山三の推擧によつて、召抱へられる事となつた。

山三の相役不破入道犬及び其の嫡子伴左衛門や、古參の繪師長谷部雲谷は、山三や四郎次郎が殿に登用されるを猜んだ。そして殿が山三を連れて上洛中、留守を預れる道犬は、雲谷が乞ふ儘に四郎次郎を罪に陥れようと謀る。

折から四郎次郎は、姫君銀杏の前の御誂の掛物を調べて櫻の間に伺候した。そして宮内卿の局に案内されて奥に通じ、梅に

淡雪・雉・山鳥を畫いた軸の紐を解いて掛ける。銀杏の前は、お姫様の御髪上げ藤袴と伴つて其の席に出で、四郎次郎を慕つて口説き、遂に妹背の仲となる。この時道犬父子・雲谷入り來り、「四郎次郎の畫いたこの掛物の繪には、御家調伏の心がある」と認ひ、隠し置いた捕手の者等と共に四郎次郎を捕へて柱に縛した。雅樂の介は奥の騒ぎを聞いて駈付け、敵と戦ひつつ城下をさして切出る。四郎次郎は憤激し、我が血を襖に吹き掛けて虎を畫けば名匠の繪に魂入り、其の虎は抜け出て道犬を投げ飛ばす。四郎次郎はひらりと虎の背に乗つて、敵を追ひ散らしつつ危難を逃れた。

矢橋・粟津の百姓等が虎の跡を追うて來り、「山科の藪陰へ逃げ込んだ」というて騒ぐ。光信の門弟修理の介正澄は其の騒ぎを聞いて立出で、「虎が日本に出た例はない。さぞ夜盜・押入の手引であらう。此處は土佐將監光信といふ繪師の住家、油斷はせぬ」とて、百姓といさかふ。光信夫婦は障子を開いて、藪の中に憩へる虎を見、光信「あれは誠の虎でない。察するに狩野四郎次郎の畫いた虎であらう。その證據には足跡があるまい」と歎賞する。正澄は之を聞いて、「いかにも繪の道を悟りました」と、悦んで師匠を拜した。斯くて光信から土佐光澄の名乗を許され、筆に墨を染めて虎に塗れば、虎の姿忽ち消え失せた。

土佐の門弟浮世又平重起は口吃り、追分邊に店借して大津繪を畫き、貧しう暮してゐる。彼は妻と共に師匠光信を夜なく見舞ふ事を怠らず、今宵も瀬田鰻と大津酒とを携へて師匠の宅を訪うた。其の時光信の室から、修理の介が土佐光澄の名乗を許されたと聞き、自分は修理の介の兄弟子でありながら、土佐の名乗を許されぬを悲しみ、光信に哀願して拒絶されたので、身を掻絶るやうにして嘆きの涙に暮れる。

折から痛手を負へる雅樂の介が光信の宅に駈付け、元信が難に遭つた仔細を傳へ、且つ元信に心を寄せた姫君銀杏の前は、敵に捕はれて下醍醐に隠まはれてゐる由を語つて助勢を乞うた。又平は之を聞いて直に加勢に赴かうとする。光信は之を叱つて修理の介に加勢を命じた。

是に於て又平の希望は全く絶えて苦悶し、妻に覺悟を勧められて死を決する。せめても最期の繪筆に名を後の世に残さばやと

思ひ、手水鉢を我が石塔と定めて其の石面に筆を揮へば、念力徹して墨痕が石の裏に透る。光信は之を見て驚き、直ちに土佐又平光起の名乗を許して、姫君の救援を命じた。又平夫婦は、これは夢かとばかり悦び勇んで立出る。

又平は夜明け方家を出で、姫君の逃げて来れるに邂逅して奇遇を喜び、追手の者どもを叩きのめし斬りまくり、姫君を我が伏屋に隠まふ。やがて大津邊の群衆が不破道犬の命を奉じ、姫君を奪はうとして又平の伏屋に押寄せた。この時大津繪の人物悉く生動して寄手を惱ます。伴左衛門は大いに怒つて斬りかかつたが、又平の描いた鬼や猛禽に攻め立てられ、防ぎかねて退く。其の間に又平は、姫君を守護して日の岡峠を越え都をさして上つた。

本曲は繪師に關するものであるから、名匠の繪畫に魂の入ることを所々に縷説して、神秘氣分を髣髴させてゐる。そして場面の變化波瀾に富み、人物も背景も能く適合して不自然の嫌なく、次から次へと展開して行く。就中本曲の主人公たる遠山は、名匠の家に生れ美貌で快活で伶俐な女でありながら、悲しい運命をたどる。又元信のゆかしい性格や、それ等の一端を見せて、巢林子の人生觀を織込んだ時代物の名文である。

○白きを後「論語八角篇に「繪事後素」とあるに據つた。繪畫はまづ彩色を施し、後に白粉を其の間に分布し、以て彩色を引立つやうにする。これを「花の雪こにつづけ、染(しろ)も雪(しろ)の縁によつた。本曲は繪師に關する浮瑠璃なるを以て、冒頭から繪に關する故事を用ひた。この文は、白雲の如き花景色は、野山に春の風景を描けるものとしてみられるであらうとの意。

○聞きに北野の：鳴きし 聞きに來たに北野をいひかけ、「鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」

傾城反魂香

次節 白きを後と花の雪、く、野山や春を畫くらん、聞(き)に北野の時鳥初音を鳴きし

まづふ句に據つた。この句は傳説に、「鳴くかきて聞きにきた野の時鳥」としたところ、鳴くかきてでは疑の詞であるとして、時鳥が鳴かぬので、鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」としたら、忽ち

鳴きたるはよ。この文は、前の句の見る(こ)から、聞く(こ)ひつづけて北野をいひ、後文に北野天滿天神(京都市上京區北野にあつて官幣中社)の告をいひ出す伏線である。

○跳馬の障子 清涼殿(天皇常におはし給ふ御殿)にある馬形の障子をいふ。「古今著聞集」卷十一に、「昔かの馬形の障子を金岡が書きたりける、夜々はなれて萩の戸の萩を食ひければ、勅旋ありて其馬鬣きたる體を書きなされたりける。」

○萩の戸 清涼殿夜の御殿の北にある間(ま)の名。庭には萩など色々秋草を栽えられたことが「茶庵抄」に見えたる。

○金岡 有名な畫師。巨勢家の祖。清和陽成光孝宇多・醍醐の五朝に歴仕し、大納言に昇る。

○すさみ 愈と進むこと。進展。

○狩野四郎次郎元信 略傳の條を見よ。彼が越前に行った事に書いたのは、越前守の権によつた。(原本「四郎次郎は所々「四郎」もなつてゐるが、「四郎次郎」に従ふ。)

○丹青 繪畫。

○文龜 役相原天皇の年號。

○氣比の浦 氣比は「けひ」といひ、越前國敦賀の海岸をいふ。氣比神宮(官幣大社)、氣比松原などある名勝の地。「まび」の傍訓は誤稱。

○丁稚 後文に、「四郎次郎一僕を招き、ヤイ雅樂の介とある。其の雅樂の介をさす。

○白山 白山(はくさん)は加賀・飛騨・越前の三國境上に跨る北陸の雄峯。

○錦山 還山とも書き、越前國南條郡にある。「國花萬葉記」越前國名所之部に、「此山は西東へ連し、海道は南の麓なり。」(この文は、縁にかへるに錦山をいひかけた。

其昔、清涼殿に立られし跳馬の障子の繪、夜毎に出て萩の戸の萩を食ひしも金岡が、筆のすさみの跡絶へず傳はる家や畫工の譽れ、狩野四郎次郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへよき男ぶり、親の繪筆の彩色に生れ、つきなる美男也、比は文龜の彌生の空天滿天神の告有て、越前、國氣比の浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋煙管筒丁稚が腰の白山も、去年の縁に歸山、山の頂き、青と、雪に映るふ月代の、湯尾峠の孫杓子、盛りこぼしたる花重重ねくし旅籠屋が、情も厚き爛鍋の敦賀の濱にぞ著給ふ、四郎次郎一僕を招き、ヤイ雅樂の介、外の弟子にも隠し此所に下りしこと餘の儀にあらず、近江、國の大名六角左京、大友頼賢殿と申は、佐々木源氏の旗頭高嶋の館とて、系圖所領並びなき大將成が將軍家の御意を受、本朝名木の松の繪本を集めらる、然るに奥州武隈の松と云名木は、古へ能因法師さへ跡なくなりしと讀たれば、名のみ残つて知る人なし我是を書きあらはし、譽れを得させ給はれと天滿天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前、國氣比の濱邊に行べしと、あらたに靈夢を蒙れ共、それは陸奥爰は越路、何を知るべに尋ぬべき、あはれ里人の來れかし物問はん」とぞ呼ばはる、

○雪に映るふ月代（さかき） 歸山の頂きの雪々としてゐるのが、白山の雪に映らうて恰も月代の如くの意、そして髪を剃るには湯で洗むから、月代の湯を湯尾時にいひかけた。

○湯尾峠（ゆゑのたけ） 越前國南條郡湯尾村で、今庄と湯尾との間にある。山腹に峠茶屋四軒あつて、孫杵子といふ禊守りの符を賣れる事が「越前國名蹟考」南條郡の條に見えてゐる。西鶴作「男色天竺」卷一、雲中の時鳥の條に「越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に大きな杵子をしてゐる、孫じやくして禊守經に杵子を出す」「奥細道當孤抄に、「湯尾峠は僅なる山にて頗に孫杵子の茶屋あり、禊守の神の杵子を出す、往昔此茶屋の主禊守神と約して、其子孫猶々は我がさの愚なしといひ傳ふる故なり。」「國花萬葉記」卷十二、越前國の條に「湯尾峠と云に茶屋あり、是を東の茶屋の孫猶子「まじちやくし」とて、禊守の守りを南ふ家也。」「この文は、杵子の縁より「盛り」はし「まじちやくし」つづいた。

○花重（はなかさね） 美男（元信）が衣服を重ね着したことをいふ。美男を花に喩へた例は、近松作「五十年忌歌恋佛」お夏笠物狂の條にも、「花の清十郎に纏を押しよせ」とある。

○旅籠屋（たてや） 旅籠は旅行の時に食物を吞れて行く籠の義。轉じて旅人宿をいふ。

○敦賀（とんが） 福井縣敦賀港、この地方は古く簡飯「けひ」に稱し、真日本の良港である。

○旗頭（はたがしら） 一地方の大小名の長。

○高嶋（たかじま） 近江國高島郡高嶋。

傾城反魂香

「所の者の御用とは都人にて有げに候、御尋有たきとは何事にてばし御座候」御覽の如く都の者、天神の教によつて松を尋る子細有、此所にこそ名高き松の候らめ教へて給はり候へとよ、是は思ひもよらぬ事を承る物かな、此北國にてお尋有ふならば、越前布・越前綿、もして實盛の生國なれば、お供の奴の髭に塗る油墨などのお尋も有べきに、名高い松とはさすが優しき都人、先當國の名木は、西行が汐越の松、麻生の松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山のを山松。

○武隈の松（たけがき） 陸前國名取郡岩沼町にあつたといふ。

○能因法師（のえい） 跡なくなりし。「後拾遺集」卷十八雜四、能因法師の歌に、「みちの國に再び下りて後のたび、武隈の松も待らざりければよみ侍りける」と詞書があつて、「武隈の松はこの座跡もなし、千年を経てや我は來つらむ」。

○とよ（見索引）

○越前布・越前綿（えちぜん） 「國花萬葉記」卷十二、越前國中名物出所之部に、半頭布ウシタビヌノ、嶋布「シマヌ」、制絨布サキオリヌノ、眩綿「ヒヂヌノ」などが擧げてある。

○實盛（じつせい） 謡曲「實盛」にも、「實盛生國は越前の者にて候ひしが云々」と見え、また齋藤別當實盛が白髪を墨に染めて猿辰の戯に討死した事が見えてゐる。其の故事によつて斯く洒落た。

○西行が汐越の松（さいぎやう） 西行法師の歌に「僕もすがら嵐に波をはこほせて月をたれたる汐こしの松」越前國名蹟考、卷十二下に汐越松川浦、坂井郡濱坂の海岸より西南荒海の岸にあり。

○麻生の松若（あさの） 麻生は淺生とも書く。越前國足羽郡麻生津村をいひ、松若の屋敷跡がある。松若は盜賊の名である。「勝歴記」に「淺水あさふつ里に松若いひし盜賊の住所なり」といふ跡あり。謡曲「熊坂」に、「さて北國には越前の、淺生の松若、三國の九郎、加賀の國には熊坂の、此長絶を始めとして」。

○物見の松（ものみ） 敵の形勢を遠望偵察する爲に懸登した松。

○金崎（かねさき） 敦賀港金崎である。延元元年新田義貞が恒良親王尊良親王を奉じて金崎城に據り、北陸を鎮撫したが、延元二年三月城陥つた。今は城址に金崎宮（驛の北約二軒半にあつて官幣中社）が建つてゐる。

○酒には濱松 當時酒宴の座でよく勝つた「三
國」が、濱松の音はざざんざ、酒になりすまいた
しやんくしの唄に據つて斯くいうた。

○ぬつほり松 辨じて問(ま)じぬじた松。黒辨じ
松。

○翠子 墨兒。髪黒くして翠色を帯びるよりいふ。
岩松、長松などは、健固に成長するやうにと祝つて、
多く墨兒に付ける名であるによつて斯くいうた。

○赤松打割つた様 赤松を割れば、堅くて重
い材質が現はれる。その様につちりしてゐる様を
いふ。

○髷松 髷の松兵衛を髷の形した松にいひかけた
洒落。

○天神の御告 天満天神の御告を、遊女の位の
天神(太夫の次位)の意にとり、遊女天神の御告であ
つては、多分松の位の遊女の事であらうとの意。

○松 最高位の遊女を太夫といひ、これを松とも
いふ。次位の遊女を天神又は梅といふ。(見索引)

○松の門立 太夫が門に立つて客を待つこと。
これは大阪の遊廓などでは徳世になつた。「浪花
青樓志」に「門立」天和貞享の比まで有りて元禄末迄
たり。

○懸作り 海岸に臨んで釣り構へる家屋。

○間夫こそ潮の満干なれ 情夫に逢ふには、
さしひきがあること、恰も潮の満干あるが如し。

○誰をかも知る人にせん此の里の松

庭のを庭松、門には門松・酒には濱松、肥えたは肥松・振ちたは振松・割松・續
松・ぬつほり松、我等が息子に岩松・長松と申翠子も有、庄屋の名は松兵衛、
若い時には相撲取、赤松打割つた様に御座有しが、今老松になられて力も元より
下がり松、腰も屈んで髷松々々と所の人は呼び候、ヤア誠に天神の御告と有に思
ひ當つた、當所敦賀の町に名高き松の御座候、是ぞ京にも類なしと心を懸けぬ人
もなき、色よき松の候が、もし左様の松にては御座なく候か、「實や往來も慕ふ
とは疑ひもなく我らが尋る名木よ、急いで見せて給はれかし」、「いつも夕暮毎に
は此所へ顯はれ出給ひ候、ヤア早あれへ御出候、我らはお暇給はり候べし、
御逗留の間御用の事は承り候べし」、「頼み申候はん」、「心得申て候」、高き名の松
の門立立馴れて人待顔の暮ならん、町は敦賀の、懸作り、間夫こそ潮の満干なれ
誰をかも知る人にせん、此里の、松と成しも、親の爲、賣られ買はれて北國の土
氣の賤の里なれど妓の育ちは上田の、水損なしの太夫職、名は遠山と呼ばれしも、
人に登れの戀の坂おろしあゆみの道中は、花の立木の其ま、にぬめり出たる如く
なり、雅樂の介「是申見事な者がそれ其所へ、それ」と言へば四郎次郎「ヤ

誰をまわ心知りの人として交をしよう、我は知合ひのない此の片田舎の太夫。「古今集」雜部、藤原親風の歌に「誰をかも知る人にせむ、高砂の松も昔の友ならなくに。

○土氣 土奥く田舎びたるをいふ。

○よね 遊女をいふ。(見索引)。これに米をいひかけた。

○水損 すゑん 灌漑のうまく行かぬ爲の損害。これに情事の爲に精力を消耗する事をいひかけた。

○おろし歩み 足を真直に踏みおろすやうに、寛闊な足ざりて徐に歩むこと。

○ぬめり出で ぬらぐらゝ嬌態にて出で。

○不覺 覺悟のたしかならぬ義。失策。

○杉 松に對して杉といふ。杉は多く下婢又は遣手の名なれは斯くいう。近松作の「鑑の權三重稚子」曾我五人兄弟、「長町女殿切」心中天の綱場、なごの中に見える杉は、いづれも下婢又は遣手の名である。

○僅かの繪書 微たる畫圖。

○お附合ひも數多なり 遊女は數多の客に接し、交際廣きをいふ。

○土佐の將監光信 略傳の條を見よ。

○此の身に沈む 遊女に沈淪する。

○この所縁に情味のこもつた連懐である。

ア何と、松が見へたか顯れたか、寫し留めん」とよつと立女郎にはたと行當り、

「是は扱松かと思ふてはまつた、本の松を尋て見ん、丁稚來い」と行違ふ袖を控

へて「是申、此遠國の我々と、京の廓の松様達と比べさんすが不覺の至り、しか

し無粹な御方には松と見られて嬉しうなし、杉と言はれて腹立す桑の木共榎の木

共、此方様に似合ふたあほふの木共見さんせ」と、むだ言なしの言捨は田舎妓と

て笑はれず、ヲ、御機嫌損ねし御尤、げに／＼松とは太夫様、我らは惡ふ心得て

不調法な御挨拶、眞平々々お詫言、是を御縁にお知人に成ましたし、下拙事は狩

野四郎次郎元信と申、僅かの繪書、去御方より武隈の松の圖を仕れとの仰、即天

滿天神の夢想に任せ、此所にて名有松と尋しを、太夫様との取違へ是は斯ふも有

ふ事、御了簡序でにお附合ひも數多也、願ひの叶ふ便もあらば、御世話頼み奉る」

と思ひ、入てぞ語らる、女郎はつと顔を詠め、「扱は狩野四郎次郎元信様とは御

身の上か、恥を包むも時による何を隠さんわし事は、土佐の將監光信が娘成が、

父は一年勅勘受け今浪人の憂き渡世、此身に沈むは申さず其推して泣て下さんせ、

扱武隈の松の圖は土佐の家の祕傳の繪本、漏す事は叶はね共、昨夜不思議や天神

○まざく ありくこ。

○サア遊ばせ サア祿傳をお書きあそばせ。この所元信の詞。

○枝葉の蓋 茂れる小枝に葉が蓋生して、蓋の如き形になれることをいふ。

○學び 真似し。

○ない 應諾にいふ奴の返答の語。はい。この文、奴であるから「手振る頭を掉る」というた。

○松根に倚つて 千年の翠 奴が松根の形の腰つきをなし、遠山が笠をもつて常磐の緑の枝葉の形をなす意であつて、「和漢朗詠集春の部、橘在列幕散の子日芽の句に、「倚松根而摩腰 千年之翠滿手」とあるに據つた。

○一本松を二木 言の葉 「後拾遺集雜四の部、橘季通の歌に「武隈の松はふた木を那人、いかがと問ははみきと答へむ」。「みき」は三木と見まをいひかけた。

○やつこの 唯詞ヤアこのを奴にいひかけた。

○千貫枝 千貫に直「あたひ」する程な姿勢よき松枝をいふ。蓋し併勢に千貫松といふ名木があるので、無難いた語であらう。

○筆捨枝 紀伊國藤代「ふざしるしに筆捨松といふ名木があるによつて、松枝の姿勢佳きを斯くいうた。

○久方の 天「あまじ」かかる枕詞。(見索引)

○肩車枝 肩車の形した枝。肩車とは、小兒を肩に乗せ首に跨らせて擔ぐこと。車は乗せるよりい

様の夢の告、狩野と云繪師下るべし、武隈の松を傳授せよ父が出世の種ならんと、見たはまざく正夢」と、語りも敢へぬに四郎次郎、感心感涙肝に染み、天を禮し地を拜し、懷中の繪筆繪絹を廣げ「サア遊ばせ御傳授頼む」と悦びける、いかにも傳へ申さんが、親の許しもなき中に筆取事はいかゞ也、ア、何とせん實に思ひ付たり、あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ、笠を枝葉の蓋となし爰にて學び見せ申さん、それにて寫し留め給へ是其所な奴様、爰へござんせ雇いましよ、「ないくくく」手振る頭を掉る年經る松の、松根に倚つて腰つきも、千年の翠寫せしは作意なりけり、先歌人の見立には、「一本松を二木共三木とつらねし言の葉の、それは老木の松が枝なれど寫す若木の、やつこのくくく」、此膝の節松の節、前へ地摺りの下枝にぬつと出せし片足は、慮外千萬千貫枝、筆捨枝や久方の天つ、乙女の肩車枝や腰掛、枝の三蓋松、月に障らぬ枝々の、さざれ小枝の松陰を、サア沖漕ぐ舟の帆の、仄見へて、さす腕には壽福の枝治むる手には不老の枝、垂れて雪見の控の枝、是々これく、すつと延びたる流しの枝、松は非情の、物だにも、傳へし心の、色は猶さながら青々條々として、松の生き木の生きくと若

ふ。この文は、天つ乙女を肩車にした如き美しい形の枝をいふ。

○腰掛枝 前文にも「義貞の腰掛松」と書いてある。

○三蓋松 三蓋笠の形をした松。

○さす腕かひな 不老の枝 手を伸べるを「さす」といひ、手を引くを「さむる」といふ。共に舞の手の名。「壽福」も「不老」と舞の語を以て枝を形容したのである。諸曲「高砂」に「さすかひなには惡魔を拂ひ、をさむる手には壽福をいたさき」。

◇このあたりは何といふ優美な光景であらう。

○控ひかへの枝 請うけしの枝と通し枝との展中より出す枝をいひ、立花たちばなりつくわしの術語。

○流ながしの枝 花瓶の口から二寸ほゞ上、後角より一文字に出した枝をいひ、立花の術語。

○傳つたへし心 松は萬木にすぐれて十八公のよそほひ、千秋の縁をなして古今の色を見ずと傳へた心。

○請取り 引受け。(見案引)

○内儀 他人の妻を呼ぶ稱。(見案引)

○天神様より太夫様 前に「神(天神)の告」とあるより、遊女の位天神・太夫にいひかけて洒落た。

○連理 二樹相對し脈理を連接して生ずること。以て夫婦の契を連理の契といふ。自居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」。

○松 雅樂の介が松の身振に頼まれたれば、自分のこゝをいふた。

○扇臺 蓮葉山の形を模した飾物、洲濱の臺の上に松竹梅を作り、これに鶴・雉・龜などを取合は

やぎ、立たてる其風情、狩野かののは一點違ちがひなく書かつらねたる筆勢せう、何れを寫うつし繪何れを立たち枝えだ紛まがひつべうぞ見へにける、元信「家の幸甚かうじんたり早速歸り本懐ほんわい遂いとげ、此報恩はらうに

は御身の上父御の事も請取申、萬のお禮は本國より」と立歸るを「是申、神の

告に任せしからは恩には懸けず末かけて、情を思召すならば、必外かならずに内儀うちぎ様持もちて

ばし下くだんすな、奴殺やつこ積つみますす」「何がなにが扱あく、天神様より太夫様追付おつお二人連理

の松、中に立たちたる此松は島臺持しまだいもちての取結び、千年萬年萬々年、とち附つひつ附松脂つきまつし

の離はなれぬ中ちゆう」、とぞ壽しゆうきし、

されば江州高嶋の屋形左京大夫賴賢卿、參觀の上洛有、執權不破、入道道犬、

同嫡子不破、伴左衛門宗末、國を預る留守居也、御家の繪えかき長谷部の雲谷うんこ慌あはた、

敷、入道親子が前に手を束つかね、近ちか比過言ひかひかに候へ共、某事ことは雪舟せつしゆうの的傳てきでんとして代々

の御扶持人、此高嶋のお屋形にて、繪筆を取とて誰人か拙あま者が上かみにつき申さん、然る

に此度狩野かののとやらん申二才にさい、武隈たけがの松まつを書かきして過分せんの恩賞おんしょうを下くだされ、故參こさんを踏ふみ

せたりで、婚禮などの儀式の宴席に用ひたもの。

○雪舟 備中國赤瀆の人。僧となつて禪を相國寺の洪徳禪師、建長寺の玉隆永興に學び、畫を知尊、周文に學んだ。應仁元年明國に遊學し、四明山に入って天童禪寺第一座となる。専ら鳥鳥を畫いた。文明元年歸朝し、山口に住して水墨畫を描いた。筆勢雄

健で妙を極む。永正三年二月年八十七で歿した。

○的傳 正統の相傳。直傳。「類聚大御用集」言辭門に「的傳、又云直傳」。

○二才 昔二才なさいふ二才で、未熟の意。弱筆。

○はびこり 跳躑し。

○奥方 奥向。

○支へける 故障を入れた。

○小姓立ち 小姓(見察引)から立身したものを。

○前髪の酒林 前髪を取つて結うた髪のみふふささとして、恰も酒林(杉葉を集め丸めて軒に吊し)酒屋の標としたもの(の如き)。「この文の「醉はせしは、酒林の縁語であつて、迷はせし」の意。

○甲に被る 威勢ある者を頼みさし、其の威をかりて威張る。笠に被る。

○脇腹 妾腹。

○御臺所 貴人の内室の敬稱。蓋し御臺所略。内室は寢所で食物の世話する意より稱した語。

○田上郡 近江國栗太郡上田上村・下田上村大石村。

○朱印 武家時代に武將が其の配下に下す政務上の文書に朱印を捺せるものをいふ。其の朱印狀によつて所有の保證された土地を御朱印地といふ。

○有徳 富有得分の意といふ。富家。

○主附く 持主となる。領有する。

○奥目付 江戸時代に、奥勤めの人々を監視する役。

○彼奴 狩野四郎次郎をさす。

○方人 味方。
○餘り程はあらせまい 餘り長くは無事にさせて置くまい。

附御前にはびこり剩、今日は奥方へ召れ姫君様より、お料理を下さるゝと承る、殿様の御留守誰が許して推參、御家老の仰一國に違背申者はなし、きつとお仕置然るべし」とぞ支えける、道犬領き「つゝと寄れ雲谷、惣じて此四郎次郎めは、相役名古屋山三が取持にて召出された、山三は元來お小姓立、前髪の酒林で殿を醉はせし男傾城、口嘴の黃な小雀が家老並に列り、威を振ふ其山三めを甲に被て、のさばり廻る四郎次郎我々親子が睨め共、こと共思はぬ奇怪さ其方とても同然たり、又乙の姫君銀杏の前は、御愛子なれ共脇腹故御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を附られ、京都有徳の町人か由緒有御家中へも、下されんとの御内意故某嫁に申請、此伴左衛門に縁邊し七百町を主附かんと、當はめて置た物姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言有と、奥目付より聞たれ共御意とあれば詮方なし、御在京の其間は山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし少しにても過りを、随分見出せ聞出せ慮外をせば打殺せ、御留守の間國中は某がさばき也、此不破といふ鰐が見入れて餘り程はあらせまい試して見たい新刀はないか、一の胸か二の胸か、望んで置け」と言いければ雲谷甚笑壺に入、「政道正しき御家老様、

○一の胸 二の胸 一の胸は胴體の上部で、兩腋より少し下部。二の胸は一の胸の下部。試斬「ためしぎり」の時、まづ人體を土壇の上に据えて、(一)肩の邊(覆付フクレといふ)、(二)毛無ケム(腋毛のある上部)、(三)腋毛の生ひて居る邊、(四)一の胸、(五)二の胸、(六)肋骨八枚目、(七)兩車フタクルマ(腰部をいふ)を順次に斬落して、以て刀の利鈍を試すのである。

○笑壺ウツに入り 餘念なく笑ひ興じ。

○櫻の間 數多ある座敷を各よ分けて、櫻の間とか何の間とかいふ。

○ヤア 癡者シヤクよ側には雲谷 ヤア腰派めよも氣附く。其の腰派の側には雲谷がある。

○手を取らず 一杯食はず。

○通路の鈴 音信の鈴。『曾我會禮山』第三に「久しく通路もせず」。

○ふりはへ 振延の義。わざ／＼。殊更トシ。二の文は、鈴の縁語(振)によつた。

○物頭モノカシ 『武家名目抄』職名部に「物頭といへるは一人の職名にあらず、旗籠の奉行・弓鉦炮の頭などを控えていへる名號にて、足輕同心をあづかる職なり、されは足輕頭とも同心頭とも稱す、又足輕大將といへるもこの事なり」。

○家老 執權不破入道運天をさす。この所は運天の詞。

○まつかせ よしました。心得た。(見栗引)

お屋形の心柱ココと追従ツグたらしく見苦ミしし、かくとは知らず四郎次郎櫻シラの間に伺候シし、姫君銀杏ヒメの前様より御掛物カケモノを仰付カられ、持參仕候御取次カ頼み奉る」と、言へ共入道伴左衛門カじろりと見たるばかりにて、返答カもせず睨付カるヤア癡者シヤクよ、側には雲谷クモいか様我に手を取カらする工タみ有、立歸タるも不覺カなり幸々、奥へ通路カの鈴の綱カ、ふりはへ引カげば鈴の音「おふ」と答カふる女の聲、宮内卿カとて中老の局立出「ヤア狩野殿か、姫君様の御待かね、お直の御用も有との御事ヤア、此方へ」と有カければ、畏カて四郎次郎入らんとすれば、伴左衛門聲をかけ「待て、お家の掟カを知らずんば何故物頭カには何はぬ、知つて背カくか不屈カ千萬、上より御許しなき時に刃物カを帶カし、奥方へ參る事禁制との御條目、あれ大小もいで引カずり出せ當番」と呼カばれば、宮内卿「いや是は私ならず、姫君様より殿様へ御伺ひ、則京より名古屋山三殿の御指圖にて、奥へ召カる、四郎次郎何の御咎め御座らふ」と、言へ共更カに聞入カず、御留守を預る家老の耳へ、承らぬ御意なれば殿の御意でも叶はぬ事、それ伴左衛門もいで取れ、「まつかせ」と立上カがる、四郎次郎も身構へして縫カらば切らんず眼ざし、左右なくも寄り付カかず「サア、渡せ」と詞

○丸腰 腰の丸い儘である。刀などの武器を帯びぬことをいふ。

○用人 有用人の義より出た名。もとは才藝あつて役に立つ人を指す稱呼であつたのが、後には家老職の次に位する重職になつた。もとも才選の職なるが故に、世家譜第の筋目早い者も登庸されたといふ。この文は、四郎次郎は御用人の職なれば、用談されて差支ないとの意。

○男の分 男の部類に入る者。

○穩便に事ともせず おたやかに振舞ひて、進入親子の無禮を意に介せず。

○此由披露致さんに 掛物御持参の事を姫君様にお知らせ申しませうによつて。

○局は奥にあいゝと 室内御の局は奥に入る。奥では腰元があいゝと返答して。「あいゝ」と愛相は頭韻法。

○落雁 菓子の名。類聚名物考飲食二に、「今らくがんと云菓子有、もと近江八景の平野の落雁より出でし名なり、白き碎米に黒胡麻を村々ごかけたり、そのさま雁に似たればなり、形は昔は洲濱のさまなりしが、今は種々の形出来たり、かかる物といへどもその初は故出有しが、後はとり失へる事多く、その名同じくして物異に變るもの也」。

○男子 狩野四郎次郎をさす。

○脇詰 振袖の脇を縫ひ詰めたこと。娘は振袖を着、年増女、有夫の女は結袖を着る。

で嚇すばかり也、時に奥よりお腰元つかゝと出、是々いづれもお姫様より御意が有、四郎次郎殿には直に御用の事あれ共、丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度とあれば、是非に叶す姫君様此所へ御出との仰也、四郎次郎は御用人、其外の男の分雲谷は云に及ばず、御家老殿を始め御前へは叶はぬ、皆お廣間へ立ませい、との權柄さ、道犬親子無念ながらつゝと立て、「サア雲谷・姫君の御前へは、男たる者罷出す男でもない奴原に、侍の辭儀無用の沙汰」と、四郎次郎に刀の鐙、打當て、袴の裾、踏みたゝくつて睨み附お次の間にぞ出にける、御留守といひ女中の邊猶穩便に事共せず、「御好の掛物梅に淡雪・雉・山鳥、仕つて候」と紐を解いて掛ければ、「此由披露致さんにサア先ゆるりとお茶進じや」と、局は奥に「あいゝ」と愛相らしき聲々の、男の側へ寄る事は常に梨地の煙草盆、落雁・かすてら・羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の饅頭肌をなつかしき、物に臆せぬ男子なれ共女中の色に目移りして、氣を取られたる折節十八九成脇詰の、後結びも格別に、銚子・杯前に置きしとやかに手をついて、「私はお姫様のお髪上藤袴と申者、しみじみお咄致しませいとこの御事ぞや、御存の通お手かけ腹のお姫様、御臺様への俥

○高家（かみか） 武家の名族。（見索引）

○口の酸（す）い程 同じことを幾度も繰返していへば、口が酸くなるそれ程。

○ひよんな 「凶な」の義。いやな。（見索引）

○一分 面目。（見索引）

○慾心に紛（ま）るること 七百町を得ようとする慾心に迷ふこと。

○改易 徳川時代に武士の受ける刑であつて、族籍を除き家祿を召上げられるもので、切腹よりは軽く、鬻房よりは重い。

○にべもなう 「にべ」は焼門にべの煙ふえじから製する膠（にか）にべをいひ、粘着力が頗る強い。「にべも無い」とは、きつぱりとして心残り無き意。

○ごど 後度。「後度を笑く」は、後を笑返して問ふをいふ。「合類大節用集」巻九、言辭門に「後度（ごど）」又云後送。

りにて大名高家のお望なく、心次第縁次第と田上郡七百町（七百町）御朱印（おし）握つて殿好みつれないは其方様、いつぞやよりは色々とお乳の人お局、口の酸い程（す）めてもどうでもお受ないとの事、おいとしや姫君は餘りの事に戀焦れ、私をお寢間へ召し「ヤイ藤袴、せめての事に其方なりと四郎次郎と名を付て、心ゆかしに抱いて寢よ其方も己を抱締めて、姫可愛ひと言ふてくれ」ともがきごとがおいとしさ、とんと下紐打解けて、寢る程抱く程締める程二人の心せくばかり、どちらぞ男になりたいと言ふても叶はゞこそ、なふ大名の手業にも有べき道具の足らぬのは、ひよんな物」とておむつかる、自らに否應の返事聞切（きききり）参れとお使、私も一分立様にお返事なされ」と述べにける、元信額を疊に付「冥加に餘る仕合ながら、度々お返事申ごとく諸傍輩の猜みと申、慾心に紛る、事世間の嘲り、よし御機嫌に違ひ改易仰付らるゝとて、御恨み候まじ御受とては成難し、よき様に御取なし頼入」とぞ言切たる、「ハ、アにべもなふ埒（らち）あいた、如何にとしても上つ方へ左様な慮外申されまじ、少し物に品付けて、始より約束の女房有と申なば、お胸（むね）の晴るゝ事も有去ながら、其女房は何者と後度をつかる、念の爲、今こゝで私と

○とつと　すつと。

○四海波　藤曲「高砂」の四海波の段をさす。即ち「四海波しづかにて國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の松こそめでたかりけれ、伊にや仰せても事もおろかや斯かる世に、住める民にてゆたかなる、君の恵みぞありがたき」といふ。この語は婚禮などの祝宴の席で誦はれるものである。

○三國一　日本天竺支那にも比すべきものなき意。當時は「三國」の何になりすまい、しやんしやん〜」といふやうな唄を祝宴の席で多く誦つたものである。西鶴の「萬の文反古」巻四に「祝言させて、「三國」を歌うて仕舞ひ申候」。

○切嗚　年季を切つて奉公する下婢。年増なるは切老婆きりばは〜ともいふ。「田村將軍初觀音」(古淨瑠璃に)中の間の仲居・お茶の間きりばはや、お家久しき料理人。

○三平二満　鬚、鼻、頰の三つが平で、兩頬が腫らるる義。おたふく。おかめ。橋守部撰「俗語考」おたふくの條に「古き狂詩に三満與三平と作りたるも、兩頬高く鼻高く額と平かなるを云也」。

○しやちら強い　鯨張(しやち)はじり硬い。近松作「日本武尊昔妻經」に「さぞ眞黒なしやちら、はい肌へ、おおむくつけやうるさま」。

○どやくや　混雜して賑がしい様にいふ。がやがや。おほくほく。

○調伏　新婦によつて佛力を頼み、法力によつて惡敷を降服せしめること。

夫婦固めの杯して、とつと前から藤袴と契約有と申さば、いかな主でも大名でも此道ばかりは先が先、此談合はどふござんしよ、「ヲ、ウ幸望む所、サア杯仕ふ、
「いや〜いや〜、我とても假にはいや、佛神かけての女夫ぞや」、「誓文々々繪筆を取らぬ法もあれ、斯ふじや〜」と抱き附「近比嬉しい忝し、是祝言の杯」
と一つ受て元信に、妻の杯頂く作法儀式は固ふと四海波、腰元中が謠いつれ奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、「姫君の御祝言三國一」とぞ祝ひける、四郎次郎合點ゆかす逃んとするを抱き止め、「藤袴とは假名ぞや自らこそは銀杏の前、誓文立の杯いやはならぬ」との給へば、「いや我らの名ざしは藤袴外に妻は是なし」と猶意地張れば腰元衆、「そんなら本の藤袴早ふ〜」と呼び出す、お茶の間の切鼻五十餘りの厚化粧、三平二満の口紅しなだれかゝる會釋顔、「是が何の藤袴しやちら強い皮袴」と、どつと笑ひのどやくや紛れ盡させぬ妹背と成給ふ、かゝる所へ不破、仲左衛門宗末雲谷を伴ひ、遠慮もなく座上にすつかと直り、「是四郎次郎、汝いか成野心にかお屋形を調伏し、亡ばさんとの存念有、きつと詮議を遂ぐべき旨父道犬が下知、申分ッ仕るか直に繩を懸けふか」と、早繩手繰つて見せかけけり、

○下知 令下知の意といふ。まじげ。命令。

○和主 吾主の義。貴方。

○ほろろ ほろろつなごとも云うて、雉の羽うつ音である。この文は、「ほろろ」の「ほろ」は「雪は降る」の「ふる」を類ければ、「ほろふる」に「さなる」よつて斯くいふた。

○捕手 十手や鐵棒をつかひ、人を痛めず捕へる者。

○十手 昔捕手の用ひた具。中程に鉤の附いた鐵製の短い棒であつて、犯罪者を捕縛するに之をもつて撃つ。(見索引)。「十手八方」は、十手を携へて八方を取巻く意。

○鐵鞭 捕手の持つ細い鐵棒。「おち」は「むち」の轉。歌十種「櫻山臥」支考の句に「藤鞭をわすれて遊ぶ寺子共」とあつて、「藤鞭」に「ぶぢぶぢ」と傍訓してある。「和漢三才圖會」卷二十一、兵器の條に「鐵鞭即鐵杖之細者、京師雜色所携者也」。

○高小手 小手に納めし。後手にして、高手(腕)腕をいふ。小手(腕)より先へ腕に繩を掛けて縛り上げ。

○黒書院 武家の貴人の屋敷の客間の一で、黒漆塗り作りの座敷。(黒書院に對して、白木作りの座敷を白書院といふ。(見索引))

○枕鑑 枕許に置く護身の鑑。
○引包み圍ひ 四郎次郎を包圍し。
○明けずの門 非當日。

傾城 反魂香

四郎次郎ちつ共騒がず、「せめて形の有事には申譯も有べし、御屋形調伏とは此方の言譯より先御答めの證據、承らん」とぞ答へける、雲谷下座より「こりやく證據は某よ、惣じて繪書の祕密にて繪を書いて調伏すること、人は知らじと思へ共此雲谷が見附た、此掛繪は和主が筆、梅に山鳥・雪に雉、抑當家は高嶋の御屋形と號す、山扁に鳥と書いては嶋と讀む文字也、梅の梢に山鳥の高々と止まりしは、これ高嶋にあらずや、雉にはろゝの聲有て雪は降るとの心有、讀下せば高嶋亡ぶる調伏、狩野とは狩の野と書けり、姫君と心を合せ屋形を亡ばし、一國を己れが狩場の野原にせんずる表相、重罪脱れず細かゝれ」と、取附所を引外し胸板はたと蹴倒す間に、飛かゝる伴左衛門が眞向刀の柄にてはつしと打、直に抜かんとする所を隠し置たる捕手の者、十手八方鐵鞭を撲ち立、捻伏せて、高小手手に縛め黒書院の床柱に、思ふさまに縛り附「姫君の御朱印を、奪ひ取れ」と群るを女中手々に枕鑑、長刀にて引包み圍ひ防げば餘さじと奥をさして追詰めける、腰掛に控へし雅樂の介かくと聞より堪られず、駈け廻つても奥方の勝手は知らず中口の、明ずの門碎けてのけと扉を叩き、狩野、四郎次郎元信が弟子、雅樂の介之

○怖い事もあるまい 敵は我が怖い事もあるまい。

○鳥居立 雨脚を踏み開いて立つこと。

○電目雷威 雷光の如く光る目、雷の如き強い威力。

○千里 後文にも「虎は千里の足早く」とあつて、虎の雄語。

○吹來る風噪ぎ 近松作「剛性爺合戦」千里が竹の條にも、「虎囀けは風起る猛獸の所爲と覺えたり」とある。「毛吹草」に「虎囀けは風さわぐ」。

○そばえたり 押「なれ顔」した。「枕草紙」に「そばえたり」といふはなぞに引取られて泣くもをかしとあつて、「春櫻抄」に「そばえはざればこりたる心なり」と見えてゐる。

○股立 袴の左右の腰の側面にある締むための所。

信と云草履取、主といひ師匠なり死ぬる道なら共に死なん、高が繪書の丁稚づれ怖い事も有まい、相手の首取分の事開けよ明よ」と貫の木も、折る、ばかりに踏み叩き鳥居立にぞ跨つたる、元信内より「雅樂の介か満足した、身に誤りなき上に慮外をして姫君の、御身の過ち氣遣し歸れ」と呼ばはれば、「ア、慮外と云も事による、明ずは踏んで踏み破る」と喚き散らせば雲谷・不破、「雅樂の介を打殺せ」と引返して門の貫の木、はずす所を付け入に雲谷が小額すつはと切下げたり、「あ痛た」と躍り上がり二人拔連れ打かくる、あなたへ追詰めこなたに支へ城下をさして 切出る四郎次郎じだんだ踏んで、「エ、佞臣共むざむざとは死ぬまい、親より傳へし一心の繪筆はこゝぞ」と觀念し、右の肩に齒を立てふつ、と喰ひ破り、口に我身の血を含み、襖戸に吹かけ、口にて虎をぞ書きたりける、電目雷威の眼の光り怒毛・怒斑・怒爪、千里も駈けん勢ひ也、道犬は姫君の行方尋ね廻りしが、先繪書奴から仕舞はんと太刀を抜かんとせし所に、俄に吹來る風噪ぎ繪に書く虎は形を現じ、牙を鳴らして吼えかゝる道犬も強力者、粗止めんと挑み合ふ、虎は猛つて爪を磨ぎあたりを蹴立て、揉合ひしが元より不思議の、猛獸

- 豐干禪師が四睡の虎 豐干禪師は傳燈錄に「宋僧傳に載つてゐる高僧で、支那天台國清寺に住んだ。四睡とは豐干禪師と、其の弟子の寒山、拾得と、虎と皆睡れること。下巻集數量門に「四睡寒山・拾得・豐干・虎、四個相俵打睡、其趣可レ愛、後人寫以爲四睡圖、三人即文殊・普賢・彌陀故聖也。」
- 李將軍は虎を組む 李將軍は李廣利をいひ、漢時代の人、射に巧みである。李廣利が石を虎と思つて射た、其の矢が石に立つたといふ故事を、虎を相手に組打ちをしたものと誤り傳へたのであらう。「史記李將軍傳に「廣出獵、見羣中石、以爲虎而射之、中石沒镞、視之石也、因復更射之、終不能復入石矣。」
- 獸君 虎をいふ。「格物論」に「虎山獸之君也、狀如猫而大如牛、黃質黑章云々」。
- 斜ならず ひじかたならず。
- 三井寺 園城寺をいふ。大津市の西北約一軒半、天台宗寺門派總本山である。(見索引)
- 藤尾 京阪電鐵京津線追分驛の附近。大津市内。
- 山科 京都市東山區山科。
- 胡散 奇怪。(見索引)
- 矢橋 琵琶湖のほとり、大津市の東對岸にある。
- 栗津 石山驛附近所(せ)の町(ぢ)の南一帯の地を栗津原といふ。音松連り、其の晴嵐は近江八景の一つである。
- 信樂山 近江國甲賀郡にある。
- 押入 強盜。

傾城反魂香

道犬が襟髻、引咥へ打擦げくるりく、くるくくくくると持つて廻り、一振振つて投げ、れば、塀を打越し敷石に面を摺つてぞ打附ける、虎は勇んで元信の縛めを噛み切、背を差向けてそばへたり元信頓て心附、袴の股立絞り上ひらりとこそは乗つたりけれ、虎は千里の足早く風に嘯く身も軽く、追來る敵を追散らし駈散らし、堀も築地も躍り越へ飛越へ、跳越へ駈けり行豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎を組む繪に書く虎を動かすは、古今一人乗つたも一人、天下一人一筆の譽れは、世にぞ残りける、

實に獸君の、一靈山野にはびこり草木を踏折り、田畠を荒すこと斜ならず、近郷の百姓聲々に、「三井寺の後から藤の尾迄は見届た、此山科の藪陰へ逃込んだに極つた、皮に疵を附ずに叩き殺せ撲殺せ」と取ぐわめき評定す、庵の内より棒ついで小提灯さげたる男、「ヤア何者じや人の軒、打ての殺せのとは胡散なり」とぞ咎めける、「いや是は矢橋・栗津の百姓共、此比信樂山から虎が出て荒れる故、隣郷が言合せ此藪へ追込んだ、捜させて下され」と口々に呼ばはれば、侍あざ笑ひ「やい、虎と云獸が日本に出た例なし、途方もない事夜盜押入の手引か、此庵

○勅勸 勅命の御勸告。天皇の御勸告。

○横手を打つて (見索引)

○がんひ 顔輝。字は秋月といふ。輝は唐書「三」である。易林本「節用集」に「顔輝ががんひ」元朝人「畫」に「顔輝」。

○書かんず人 書かうとする人。

○七足去つて師匠を拜し 「童子歌」に「弟子去七尺、師影不可踏」。

○印可 印信認可の義。師が其の弟子に對して、悟り徹底を證して與へる現狀。

○ずん 「ずん(體)を認つて」「ずんどもずんども」をいふ。これを順まれば寸さ書くは當字である。近松作「持統天皇歌集法」に「あの男のおなかの勝のずんに印判接す」云々がよいわいの。近松作「源五兵衛・おまん隨筆歌」に「大袂は同國書集ずん切替に銀の笠」。

○舌を巻き 驚いて物が言へぬ。「漢書」揚雄傳に「禮官博士卷其舌而不談」。

○お山 遊女。(見索引)

を誰とか思ふ、土佐の將監光信と云繪師、子細有て先年勅勸を蒙り此所に逼塞し、將監年は寄たれ共某は門弟修理の介正澄と云者、油断はせぬ」と棒振廻し諍ふ聲、將監夫婦障子を明「聞えた」、天地の間に生ずる物有まい共極め難し、諸共捜せ」と鐘・熊手提げくくく、聲松明振つて狩立る、一叢竹の下蔭に「そりやこそ物よ」と火を上げば、荒れに荒れたる猛虎の形、人に恐る、氣色なく背を擽めてぞ休み居る、將監横手を打て、「あら不思議や顔輝の筆の、竹に虎の筆勢に少しも紛ふ所なし、是は誠の虎にあらず、名筆の繪に魂入つて顯はれ出しに極つたり、然も新筆今は程に書かんず人は、狩野祐勢が嫡子四郎次郎元信ならでは覺えなし、いづれにもせよ證據には足跡有まい」、物はためしと百姓共若草分て尋れ共、虎の足形あらざれば書き手も書き手目利も目利、前代未聞の名人やと、心なき土民等も拜むばかりに信をなす、修理の介七足去つて師匠を拜し「ニア、有難や此虎を見て、繪の道の悟を開き候其しるし、我筆先にてあの虎を消し失ひ申べし、名字名乗を授け御許を受度候」と、懇望あれば將監悦び、「ア、今日より土佐の光澄と名付べし」と、印可の筆を與ふれば修理は戴き墨を染め、虎の順にさし

- 火打箱 紙子などの袖の附根の腋下の所に縫ひ附ける火打線の形した布切れを火打といふ。其の火打に火打箱をひひかけた。そして其の縁語「朝夕の煙」といひつづけた。
- 追分 京阪電鐵京津線追分驛のあたり。ここの文は、一塵に焚くべきものを、朝飯・夕飯と二塵に追繰り分けて焚くを、追分にひひかけた。なほ後文、大津箱の註を見よ。
- 童贖し 子供たまし。
- 命も錢も繋ぎ 命も繋ぎ、錢も繋ぎ。當時の錢(文藝)には孔があつて、其の孔に細網を通して繋ぐから、斯くいうた。
- なまなか目禮ばかり なまじひに物を言へば吃つて何の事やらわからぬ故、目禮するばかり。
- 通事 通譯。
- 嫁菜 菊科の多年生草本。葉は互生し、長橢圓形にして、縁邊に粗鋸齒を具ふ、初秋の頃淡紫色の花を開く、嫩葉はゆでて食用となる。
- 小竹筒 小竹筒(さいへい)の約か。竹筒を細工したもので、酒などを容れる器。
- 關寺 大津市上關寺町安養寺の觀音堂安置の阿彌陀如来坐像は、もと關寺の本尊と傳へ、國寶である。土地高く眺望よし。(見榮傳)
- 高觀音 大津市長等公園の傍にある尾藏寺をいふ。本尊十一面觀音立像は國寶である。土地高く眺望よし。
- 道者時分 京参りや伊勢参りの参詣者の多い時分。

當四五間間を置ながら、筆引方に従つて頭・前脚・後脚・胴より尾先に至る迄、次第に消へて失けるは神變術共云ひつべし、百姓共舌を巻き「孫子迄の咄の種、なふあの上手な繪書殿に、よいお山を十人程書いて貰ひ、金儲けがしたい」と言へば一人が聞いて、「ヲ、〳〵冬年お目にかゝつたら、借錢乞の帳面をこゝから消して貰はふ物、お暇申」と打笑ひ在所〳〵へ歸りけり、こゝに土佐の末弟浮世又平重起と云繪師あり、生れ附て口吃り言舌明らかならざる上、家貧しくて身代は、薄き紙子の火打箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、大津のはづれに店借りして妻は繪の具夫は繪かく、筆の軸さへ細元手上り下りの旅人の、童贖しの土産物三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが日陰の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦連れ夜な〳〵見舞ふぞ殊勝なる、夫はなまなか目禮ばかり女房さばから通事して、
 「まだ是はお寝りませぬ、誠にめつきりと暖かに日も永ふなりまして、世間は花見の遊山のとざは〳〵ざは〳〵致します、此方は山陰御浪人の、お徒然を慰めの爲嫁菜のひたしに豆腐の煮しめ、小竹筒でも致しまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませうと、女夫申て居ますれ共心で思ふたばつかり、道者時

○急げば廻る瀬田鯉 古歌に「もののふの矢橋の船は早くとも、急げば廻れ瀬田の長橋」とある句から、瀬田鯉につづけた。鯉は瀬田の名物である。「好色淫忍放談(寛永八年刊)卷之三」に「ゆによからう瀬田、鯉、弊の薬之花車が引く」。

○膳所 膳所町は大津市の東南に連り、今は大津市に入る。天智天皇が大津宮に在りました時の御厨の地であつたといふ。

○練貫水 原田藏六撰「淡海録」(元禄元年自序)水井池の條に「大津練貫」三井の麓に涌泉有、海水井水より目にかけて輕き冷水也、酒をかもし茶を煎ずるには此水を用ゆ、庭訓に云、大津ノ練貫と出ず、池邊に福寺有、大練寺と云。

○ゆめ／＼しうござりませれども 當無く夢のやうな言ひ事でござりませれども。

○おはもじ お恥づかしの文字詞。(見索引)

○北の方 貴人の妻の敬稱。蓋し舞殿造りで、奥方は北の對屋に住んだから斯くいふ。

○時節 好機會。

○藤の花かた 藤のお山繪 大津繪の藤娘をいふ。索引によつて「藤の花のお山を 見よ。」

○鯉 大津繪の鯉 鯉をいふ。



鯉 藤

分で店は忙がし、洗濯物はつかへる仕事にははかいかず、日がな一日立すくみ何をするやらのらくらと、急げば廻る瀬田鯉只今膳所から貰ひまして、練貫水の天津酒夢々しうござりませれ共、此春からお仕合が直つて、鰻の穴から出る様に御世にお出なされませ、ほんにつべこべ／＼と私が言ふ事ばつかし、こちらの人の吃とわたり饒舌と、入合せたらよい比な、女夫が一組出来ませふア、おはもじや」と笑ひける、北の方聞給ひ、ヲ、ようこそ祝ふてたもつた、今宵は奇妙な事有て修理は名字を許され、土佐の光澄と名乗ぞよ、其方もあやかり給へ」とあれば又平時節と女房を、先へ押出し背を突き我身も手をつき頭を下げ、訴訟有げに見へければ女房心得進み出、誠に道すがら百姓衆の咄を聞、身は貧なり不具也弟弟子に土佐を名乗らせ、兄弟子はうか／＼といつ迄浮世又平で、藤の花かたげたお山繪や、鯉押へた瓢箪のぶら／＼生きても甲斐なしと、身を揉んでの無念がり、尤其哀共連添ふ我らの心の内、申も涙がこぼれます、奥様迄は申せしが正直の願ひは此時節、今生の思ひ出死しての後の石塔にも、俗名土佐の又平と御一言のお許しは、師匠のお慈悲」とばかりにて涙に、啜び入れれば、又平も手を合せ、將監を三拜

○小栗 繪師小栗宗丹をかくいうたのであらう。宗丹は狩野元信の師匠である。

○一人の娘 遠山をさす。

○大津繪 往昔、近江國大津や追分あたりで賣つてゐた繪をいひ、追分繪ともいふ。蓋し寛永正保の頃、大谷に近き池の川といふ所で繪佛を描き賣いでゐたのが其の始めであらう。現存せる大津繪で天和以前の物と推定されるものは、阿彌陀佛或は三尊佛なるを以て見れば、大谷の繁昌によつて生じた繪佛が即ち後來の大津繪であらう。大津繪は其の當時の風俗遊女等をも描き、描法粗放にして簡朴である。眞享頃より彌もてはやされたが、享保頃から漸く衰へた。東花坊支考撰「本朝文鑑」に「浮世又兵衛は大津繪の元祖」とある。近松は浮世又兵衛を土佐の將監光信の末弟浮世又平重起と改作して脚色したのである。

し疊スエテに喰くひ附つき泣な居ゐたり、將監しやうかん元もとより氣短きだんく、「ヤア又しては〜」叶かなはぬ事を吃くめが、こりや此將監は、禁中の繪所小栗おぐりと筆の争あそびにて、勅勘ちやくかんの身みと成なたるぞ、今でも小栗おぐりに従したがへば富貴ふうきの身みと榮さかふれ共とも、一人の娘に君傾城けいせいの勤つとめをさせ、子を賣うつて食くふ程の貧苦ひんくを凌しのぐは何故ぞ、土佐の名字を惜おしむにあらずや、修理しゆりは只今大功たいこう有り、己まれに何の功こうが有ある、琴茶書畫きんぢあしゆゑは晴はれの藝げい、貴人高位の御座ござ近く參まゐるは繪書えいしよ、物も得え言いはぬ吃くめが推參おしま千萬、似合にがひふた様に大津繪書おつしゑいて世を渡わたれ、茶ぢでも吞のんで立返たがれ」と愛相あいさう、なくも叱しかられて、女房にようばうは力を落おとし、「こなたを吃くに産うみ附つけた、親御おやごを恨うらみさつしやれ」と頼たのみ泣なく〜又平も、我咽笛わがどぶえを搔かむしり口くちに手てを入いれ、舌したを抓とつて泣なきけるは理ことばり、見みへて不便ふびん也、時ときに藪やぶの内うちよりも「將監殿光信殿」と呼よばはつて、痛手いたた負おふたる若者わかしよ縁先えんさきによるよろばひ立たち、狩野しよのの弟子うぢ雅樂うたの介御けいご見み忘れ候こうか、「げにも〜」雅樂うたの介先けいさき此方こなたへ」と座敷ざしきに入れ、「承うけたまれば四郎次郎殿雲谷うんこ、不破ふが惡逆あくぎやくにて、難なんに遭あひ給たまふ段々だんぜん具ぐさに聞氣遣ききぢし」と有ありければ、「さん候某も供仕つかうじ、雲谷うんこと戦たたかひ斯様しかさまに深手ふかてを負おひ候、頼たのみ切きたる名古屋山三殿なごやまさんは在京、元信もとのぶ危あやうく候こうしが漸おそ脱だつれ、落失おちせたと承うけたまる、こゝに難儀なんぎの候こうは、姫君銀杏ひめぎんぎやうの前元信まへもとを憐あはれ

○下の醍醐 京都市伏見區下醍醐。醍醐山國有林方面をさす。

○辛氣を沸し 氣を揉んで憤慨し。

○膝とも談合 相談しても益なしと思ふ者にも、相談すれば何か益ある意の諺。

○ゑん正・すけ定 永昌・介定の説であらう。

永昌は山城國の刀鍛工で、介定は永昌の弟子。「古今和歌」萬葉全書に「永昌一介定永昌が弟子」とある。よつて介定作の刀をかく言つたのであらう。

○命の相場が一分五厘浮世又平「浮世は一分五厘」といふ諺を應用して、其の名にいひつづけた。一分五厘は價値の乏しきを意味す。近松作源氏繪巻節「下之巻」に「寸先は闇の夜、浮世は一分五厘づつ」。

○身がら一心・つりがへ 身も心も一つあるばかり、身命は掃溜の井の如く用ないもの、名譽は須彌山（高さ八萬由旬、大海中にあつて金輪の底の上に據り、最頂に帝釋天が居るといふ）の重きに比すこの意。

○舊功爲し 舊くから功績を立て。

み、七百町の御朱印を持って落ち給ひしを、敵奪ふて下の醍醐に隠れし由、二度姫君屋形へ移し御朱印奪ひ返さでは、長く繪師の瑕瑾なり某手負の身は叶す、御加勢頼み申さん爲、忍び参り候」と、語りもあへぬに將監「皆聞迄に及ず、狩野と土佐は一家同然力に成て参らせん、され共彼奴等と太刀打はいッかな〜叶ふまじ、姫君にも怪我あらんどふぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意と言はせ、騙つて取返す分別がござらふ、何れも言ふてお見やれ」と、額に小黧頬杖つき各小首を傾くる、又平何ぞ言ひたげに、妻の袖引背中突き指ざしすれ共合點せず、辛氣を沸し女房を引除けてつ、と出、師匠の前に諸手をつき唾を吞込んで、「此討手には拙、拙者が参り、姫君もゴウ御朱印も、ウ、〜奪ひ取て歸りましょ、將監きつと見、イヤ面倒な吃め、思案半ばに邪魔入るる、そこ立てうせぬか」と、叱られても怖ぢるにこそ、「イヤ膝共談合と申、口こそ不自由なれ、心も腕も天下に怖い者がない、拙者が分別出し、叶はぬ時はゑん正・すけ定、彼方へ遣るか此方へ取か首がけの搏打、命の相場が一分五厘、浮世又平と名乗ては、親もない子もない身がら一心、命は掃溜の芥、名は須彌山とつりがへ、悴の時から舊功爲し、

○殿ど 殿は様よりも極いから、殿どは言はないで、様を附けて言ふとの意。「俚言集覽」に「殿ど貴人を殿ど云、又人の名の下にいふ時は瀟呼す、殿は様より極し」。

○もてあつかひ もてあまし。本曲・中之巻にも檢使の人々もてあつかひ、よいはくもう黙れ」。

○おとまし 「疎うごまし」の釋。

命にかへて申上るも師匠の名字を繼ぎたい望、ばつかり、拙者めを遣はされて下されませ申ま、申まさりとては御承引ないか、吃どでなくは斯かふは有ままいエ、くくエエ、恨地めしい喉笛のどふえを、播破かまやぶつてのけたい女房共、去とはつれないお師匠じや」とスニテ聲こゑを、あげてぞ、泣居なみたる、將監げんなん猶も聞入いれなく、「不具かたわの癖くせの述じゆつ懷わい涙不吉千萬、相あ手に成なつては果はてしなし是々修理の介、御邊ごへん向むかつて思案しあんを廻めぐらし奪うばひ返かへして來こられよ」。「畏地つた」と言いふより早く刀やぼつこみ立た出る、又平やむんずと抱だ止とめて「マ、まんなん待つてくれ、師匠しこそつれなく共、弟子兄弟の情じや、此又平を遣やつてくれ殿共言はぬスツす、すつく修理すり様」。「こりや又平、某彌や猛まうに思おもふても、師の命いのちは力なしこゝを放はなせ」、「イ、くくいやハ、くく放はなさぬ」、「放はなさねば抜ぬいて突つくぞ」、「ツ、突つききコ、くく殺ころせ、ハ、くく放はなしやせぬぞ」、修理すりの介ももてあつかひ「放はなせ、くく」と捻ね合あふたり、將監げんなん夫婦こゑ聲こゑをかけ「放はなせくく」と止とむれ共、耳みみにも更さらに聞入きこえず女房取附にようとりつき、「あれお師匠様の御意ごいが有あ、おとましの氣違きちがひや」と、もぎ放はなせば女房を、取とつて投げはたと蹴けて睨にらみ附つき、己おのれ迄までが氣違きちがひとは、エ、女房さへ侮あなどるか、不具かたわは何いんての因果いんぐわぞや」と、どうど座くらを組み疊たを打う

○手水鉢を石塔と定め 前文に「死しての後の石塔にも、俗名土佐の又平と御一言」とあるに應じる。

◇この所 成功の裏面の悲哀を書き盡した。

○王羲之 支那晋の人、字(あざな)は逸少、草隸に妙を極む。

○趙子昂 支那元の人、趙孟頫は子昂と號す。書を能くし、畫に巧みである。殊に山水木石花竹人物を描くことが尤も精巧緻密であつた。

○石に入り木に入る 王羲之の書いた墨痕は深く木に入ったといふ事蹟に「王羲之、晋帝時祭北郊、更親版工人削之、筆入木三分。」事類賦に「逸少髣入木之七分」とあつて、註に「晋世北郊祭文、帝命王羲之更寫之、工人削之、羲之筆已入木七分」とある。墨痕が石に入った故事は思ひ當らないが、王羲之の拓本「蘭亭帖」や、趙子昂が至大元年に書いた「赤勝賦」の石刻などは有名であるから、斯くいうた。

○大頭の舞 曲舞幸者の類である。扇拍子で舞つたものを大拍といふは「の舞」といつた。大拍の名は其の象紋に大拍葉相並んだのを用ひたから、後世大拍を訛つて大頭といつたともいひ、一説には、大頭の名は鼓の拍子の名から出たもので、後に大拍と誤つたものなるといふ。「醒醉笑」に、大頭勸進舞のワキに笠屋、ツレに漁瀬といふ者があつた事が見えてゐる。この笠屋が獨立して女舞となり、水干に大口を着て舞を舞つた。近松作「心中刃水の朔日」に「笠屋三膝舞の袖、袴と袴ミを引寄せて云々」や、同作「中天の細輪」に「今は結ぶの神無月、環かれ

て、聲も惜まず歎きける心ぞ、思ひやられたる、將監重て「汝よく合點せよ、繪の道の功によつて土佐の名字を繼いでこそ、手柄共言ふべけれ、武道の功に繪書の名字、讓るべき子細なしならぬ」と言切給へば、女房居直り「サア又平殿覺悟さつしやれ、今生の望は切れたぞや此手水鉢を石塔と定め、こなたの繪像を書留め此場で自害し其跡の、贈號を待ばかり」と硯引寄せ墨磨れば、又平領き筆を染め石面にさし向ひ、是生涯の名残の繪姿は苔に朽つる共、名は石魂に留まれと我が姿を我筆の、念力や徹しけん厚さ尺餘の御影石、裏へ通つて筆の勢、墨も消す兩方より一度に書きたる如く也、將監大きに驚き給ひ、「異國の王羲之・趙子昂が、石に入木にも和畫に於いて例なし、師に勝つたる畫工ぞや浮世又平を引かへ、土佐の又平光起と名乗るべし、此勢ひに乗つて姫君御朱印諸共に、取返せ」と有ければ「はつ」とばかりに又平は、忝し其口吃り禮より外は涙にくれ、躍り上がり飛上がり嬉し泣こそ道理なれ將監夫婦悦び「心剛にて心ざし篤けれ共、敵に向つて問答せん事いかゞあらん」との給へば、女房聞もあへず、「常々大頭の舞を好き、妾諸共連脇にて舞はれしが、節の有事は少しも吃り申されず」と言ふ「や

て遊ばれぬ身まはりて云々」などは、大頭の舞の歌詞であらう。なほ次にある「さる程に鎌倉殿！今墨色を挿伊にけり」の文は、大頭の舞の歌詞に據つたのである。

○連れ脇にて舞はれしが、女房はツレ、ワキを勤め、夫又平はシテを勤めて舞はれたが。

○究竟、究は理の極をいひ、竟は事の極をいふ。至極。好都合。

○土佐坊 土佐坊昌俊をいふ。頼朝の命を奉じて義経を京都六條堀河館に襲ひ、却つて義経の爲に殺された。

○いしくも 殊勝にも。

○山水男 物淋しけな男。近松作「曾我扇八景」に「夏冬なしに落しきうな山水な住家」「色道大鏡」に「山水」勅のさびたる事にいふ、少分なる事にも云ふ、山水を畫きたるは淋しき故斯云る歟。

○樊噲 漢高祖の臣。鴻門の會の時、門衛を撞倒して入り、高祖の危急を救つた勇士。

○張良 漢高祖の師となり、功を立てて留侯に封ぜられた名將。

○楯に突いた 楯にして突立てて護衛した。

○繪本 手本の地目。

○問屋 宿次(やどぢ)の傳馬宿。

○土をかへさぬ 地の下までも掘返して見ぬばかりの意、限なく搜索するをいふ。

○七つ 四時頃。

○中枕 中位な大ききの枕。

傾城反魂香

れそれこそは究竟よ、試に一節めでたふ舞ふて立て、「あつ」と答へて立上が

り古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ふたりけれ、去程に鎌倉殿、義経の討手

を向くべしと、武勇の達者を選ばれし、それは土佐坊、是は又、土佐の又平光起

が、師匠の御恩を報せんと、身にも應せぬ重荷をば、大津の町や、追分の、繪に

塗る胡粉は安けれ共、名は千金の繪師の家、今墨色を、揚げにけり、かくて女房

勇みをつけ、又もや御意の變るべき、早御立」と勧めける、又、いしくも申され

たり、身こそ墨繪の山水男、紙表具の體なり共、朽ちて朽ちせぬ金砂子極彩色に

劣らじ」と勇み進みし勢ひは、ゆゝし頼もし「我ながら、あつばれ繪筆の健氣さ

よ、唐繪の樊噲、張良を楯に突いたと思召せ、お暇申てさらば」とて打立出る勢

ひは、誠に諸人の繪本ぞとヲ、褒めぬ者こそ、なかりけれ

逢坂の關、明ぼの近き火用心の聲高島の屋形には、六角殿の姫君行方見へさせ

給はぬとて、旅人の改め問屋の詮議土をかへさぬばかり也、又平は今朝七つ立ち

門出祝ふ中枕に、例の熱燭三杯ひつかけ打つ立所に、やごとなき上臈の素足の土

に身もくづおれ、伏見の方よりうろくと「是そこな者、京の道を教へてくれ、

○大抵 普通なみ。

○土邊 地面。

○心を仕方の腕まくり 心を手まね身振りに見せて腕まくり。

○殖生 黄土を以て造つた家の義。賤民の家屋。

○八町 大津の町名。「好色旅日記」(貞享四年刊)卷一に「大津にはたごや町八町あり、故にたご八町とも申さざらひ侍る」。

○走井 近江國滋賀郡逢坂山にあつて、追分から逢坂關に至る道路に當る。

○起し返つて にかへる。騒ぎ立てる。近松作「傾城吉岡染」に「近郷の在々までおこしかへつて追掛くる」。

○著籠み 衣の下に籠めて著る鉢帷子(くさりかたびら)などをいふ。

草鞋とやら云ふ物を、穿かせてくれ」と詞つきの大柄さ、又平むつと顔に立はだ

かつて返事もせず、女房走り出大抵のお方でない、威の備つた見所有」とお側に

参り、恐れながらお屋形の姫君様と見参らす、我々は土佐の將監が弟子吃の又平

と申繪書の夫婦、狩野の弟子雅樂の介に頼まれ、お迎に参る折から也必包ませ給

ふな」と、囁けば嬉しげに「ヲ、自らこそ銀杏の前、道犬・雲谷が追手透間なし、

よい様に頼むぞや」との給へば、又平土邊に額をすり附悦びの色男みの色、氣を

急げば猶物言はれず心を仕方の腕まくり、力み・反打・居合の眞似・抜き打・

撫で切・拜み打・組み合・捻首・手に取つて握り拳の武士氣をあらはし、殖生に

隠まへ参らする夫婦が所存を頼もしき、程なく八町・走井の問屋・組頭、組町引

具し起し返つて聲々に「六角殿の姫君朱印を盗出給ひ、御家老より御詮索裏屋小

路も改めよ、別して繪書は屋搜し有人は勿論犬猫も、内を出すな」と裏口門口は

たくと、さしもの又平取籠められ狩場の鹿の如くなり、不破の伴左衛門・長谷

部の雲谷、著籠みの兵百騎ばかり、群立來つて家々に押し入く搜しける、又平

一期の浮沈ぞと、女房諸共姫君を押し圍ひ、隣をがはと蹴破つてぐつと抜けたる

○だんびら物 幅廣い太刀打刀などの稱。(見索引)

○舌を巻く (既出)

○部 商家の前面に嵌め込む横戸で、晝は釣り上げて置き、夜は釣り下して家の締りとする。

○鳥毛の鐘 鳥毛で長鐘の柄を飾つたもの。

○露の命を君にくれべし 「増補松の落葉」(寶永七年刊巻四、古來中興師歌、大津追分繪師に、「のほりくたりに目につく露、露の命を君にくれべし、追分のたるまゝのころ、鬼に衣はそけたもをかし云々」とあるに據つた。

○だいなし 奴僕などの著る紺無地で仕立てた筒袖を紺のだいなしといふ。「後調菜」に「奴僕の事に紺のだいなしといふは無代の義、かばりなき意なるべし。」「だいなし嫌ひなし」は脚韻法。

壁厚き、氷の様成たんびら物さし出す首を片端から、キ、く、く、く、切並べんと壁に添ふてぞ突つ立たり、雲谷聲をかけ「ヤア、是ぞ音に聞、土佐が弟子吃の又平めが住家也、叩き毀つて搜して見よ、承る」と一番手捕つた、捕つた、とどつと寄せしがしどろになつて引返し、なふ怖や凄じや、何かは知らず家内には人大勢充ち満ちて、或は奴の形も有又は若衆・女も有、人間ばかりか猿・猪のし、鷲・熊鷹、爪を磨ぎ立眼を怒らし寄り附かる、事でなし、なふく、いや、と身震ひし舌を巻いてぞ恐れける、何を吐かす狼狽者、人三人共住れぬ荒屋何者か有べきぞ、察する所店に張つたる三文繪を生物と見違へしか、怖いと思ふ心から眼が昏んだ腰抜け共、それ、部をこち放せぬい、と下知すれば、鳶口引つ懸けるいや、く、く、と難なく店を放しけり、内を見れば不思議やな言ひしに違ひも荒奴の、影共分かす、共まだ仄暗き曉の、鳥毛の鐘先揃へしは土佐が魂寫繪の、精靈なり共知らばこそ我もくと駈け向ひ、打て共突け共手に取られぬ、露の命を君にくれべいと、染めしたいなし嫌ひなし相手揮ばす防ぎたり、雲谷が弟子長谷部の等嚴、數にも足らぬ精奴、我に任せ」と捲り

○立髪 「髷姿覽卷」下、容儀の部に、立髪とは髪毛を久しく剃らずに長く延したもので、殊更に生ふし立てるのであると見えたる。立髪男は髪髷をも生(は)やししてゐる。ここの文は奴の大津繪をさした。

○唐錦 文目も分かず 辛(から)に唐錦をいひかく。唐錦は文目美しい。それを餘り辛いので目も明かねば、色目も見えぬ意の文飾。

○奇特頭巾 「髷姿覽卷」上、服飾の部に、奇特頭巾(これは前に覆面を附けたるなり、天和貞享頭巾から女の著たる頭巾にて、今時はきびくと呼べり、又氣ままといへり)。この頭巾は黒い胡風呂歌やうのもので、調法であるから、氣儘にも奇特にも稱したのである。ここの文は藤娘の大津繪をさした。

○しなえ 携(た)へしなへ延びた枝。

○玉禱 「櫻調栄」に「たまたすき」玉手禱也、玉は稱美の詞。

○波や鯨の瓢箪 ここの文は、「男みかかるの縁で波を受け、波に雨燕をまかした。そして波の縁で鯨といひ、瓢箪鯨の大津繪をさした。

○鉢叩 鷹の羽を打ちがへた紋を附けた十徳を着て、茶筌を敲り、瓢を叩いて無常迅速の唱歌を哀れな音調で唄ひ、勸進・物昔ひの類である。其の音は鉢を叩いたのであつたが、後に瓢に代へたものたといふ。詳しくは「近松物語」を見よ。

○座頭 座頭の大津繪は多ければ斯くいうた。

○枕返しの曲枕 数多の箱枕を弄ぶ曲枕。「足跡翁百態」に「昔は箱枕のみおこなはれしかば、手す

か、れば、片肌腕いだる立髪男、大盃をひらり、くくと閃かし、肩間に撒つたる唐辛「ヲ、から、ヲ、から」唐錦、文目も分かず引つ返す、師匠の雲谷壺りかね、「片端より打みしやぎ手竝を見せん」と飛んでかゝる、優しや優者の、女業には奇特頭巾、藤のしなえを押つ取延べ、引纏うてはたと打、しと、打をひらりと外し受けつ、解い麻衣の玉禱、甲斐々々しき若き法師の顯はれ出、勇みかゝれる有様は、波や鯨の瓢箪々々、もつて開いて鉢叩、叩けば滑り打てば滑りぬらり、ぬらりと手にたまらず、あぐみ果て、ぞ支へたる、不破が郎等犬上團八、「そこ退き給へ人々」と、打つて出るや現の闇の座頭一人とぼくくと、とぼつく杖を振り上、振り上旨打に打つてんげり、餘さじ物と續いてかゝる、團八が弟犬上三八、二八ばかりの小人枕返しの曲枕をつ取、くはらりくはらり、打つ波枕數枕枕重ねに打亂れ、散りくゝにこそ引たりけれ、伴左衛門怒りをなし「手にも足らぬ雑人原、しや何事か有べき武士の刀の鹽梅見よ」と、眞一文字に駈けたりけり、あら凄まじやこは如何に姿は沙門・頭は鬼神、鬼の念佛噛み碎く、牙を鳴らし角を振り向ふ者の眞向、撞木を持つて叩鉦くはん、くゝ、くゝ、くゝ、くゝ、耳にこ

さびに其枕をうち重ねうちなしなむしたるが、後には放下師の業となり、是を枕返しといひならばせり。ここの文は、枕返りの大津繪をさした。

○波枕 箱枕の曲藝の一種。

○枕重ね 箱枕の曲藝の一種。

○沙門 梵語のRahmanaの音譯、動息の義、善を勤め罪を息める人、即ち僧侶。

○鬼の念佛 鬼の念佛の大津繪をさした。



○逢坂の木綿附け鳥 木綿附け鳥は鶏をいふ。願願の説に、世間が騒がしい時、君の御祈に、四境の祭の祝をなじ、鶏に木綿四手「ゆふし」でを附けて、陰陽師に凶しき事を祈りつけさせて、四境の關に放されたといふ。逢坂は平安城からは東方の關で、四境の一である。「古今集」戀歌四の部、関院の歌に「逢坂のゆふつけ鳥にあらはこそ、君がゆききをなくも見れ」。

○天骨 技藝などに勝れた天禀の才能。

○廻らぬ舌を言はれぬ事 廻らぬ舌をもつて言はうとするは無用の事。

○蜘蛛手。かくなわ。十文字 八方無盡に刀を振廻し切りまくること。

○かくなわ (見索引)

○逢坂山の時鳥 「金葉集」卷二、夏歌の部に「かまきこに逢坂山のほととぎす、あくればかへる

たへ骨に沁み、進みかねては引き足も隼・荒鷹・鷲・熊鷹、一度にさつと飛來り群る勢を八方へ、追つ立蹴立て啄き立、翼の嵐・夜明の風、鷲の聲々逢坂

の木綿附け鳥に、白々と白み渡れば白紙に、有し形は彩色の、繪に寫りたる筆の

精天骨の、妙共謂つべし、又平勇んで女房の袖を引、物は言ひたし心進んで舌

廻らず只「ウ、〜」とばかり也。エ、爰な人、敵が詰めかけ事急な、廻らぬ舌

を言はれぬ事舞で〜と言ひければ「ヲ、それよ〜」氣が附いた、今目前の

不思議を見よ、我らが手柄で更になし、土佐の名字を繼いだる故、師匠の恩の有

難さよ、敵の中へ駈け入て命限りに追散さん」と、大勢に割つて入り西から東、北

から南、蜘蛛手・結果・十文字・割立て追ん廻し、散々に切立てられ、さしもの

軍兵埒りかね八方へ逃げ散つて残る者こそなかりけれ、さあしてやつた此上は、

コ、〜〜〜爰には片時も叶ふまじ、都の方へ」と姫君をヲ、〜〜〜逢坂

山の時鳥、また初聲の口は吃り心は鐵石・金願に、勝つたすぐれた越へた峠は

日の岡の、石原草原足もしどろにど〜〜〜、吃り廻つての〜〜〜上りける

空になくなり。

○日岡 京都市東山区にある。京都に通ずる坂路で、往昔は小徑に過ぎなかつたが、今は大道となり、京阪電鐵京津線日岡驛もある。

中之卷 (京六條遊女町の大門口。舞鶴屋。右近の馬場。狩野元信の寓居。三熊野かげろふ姿)

登場人物の主な者

お宮 (一文字屋の遣手。土佐將監) 名古屋山三春平 (もと六角左京大夫頼賢の執權。今は浪人) 與右衛門 (六條遊女町大門口の門番)

傳 (舞鶴屋の主人) 葛城 (上林の愛人) 城 (山三の愛人) 狩野四郎次郎元信 (繪師。お宮の愛人)

銀杏の前 (六角左京大夫頼賢) 世繼瀬兵衛 (山三の家来) 元信の弟子権樂の介等

不破入道道犬 (六角左京大夫頼賢の執權。伴左衛門の父。雲谷一味の徒) 長谷部雲谷 (六角左京大夫頼賢召抱の繪師。道犬一味の徒)

番太 傾城屋の人々 管領所の役人 見物人大勢

梗概

遅櫻の咲き亂れた京都六條遊女町の大門口に、伊達な装ひをした侍が斬られてゐる。夜明け頃通りかかつた番太が之を見て、「ヤア何者やら殺されてゐる」と呼ばはる聲に、見物人が押寄せる。検屍の役人が来る。其の死骸は不破伴左衛門であることが知れる。伴左衛門は上林の抱妓葛城に馴染み、伴左衛門父子の爲に陥れられて今は浪々の身の名古屋山三と、戀の張合ひとなつてゐるので、下手人は山三であらうとの取沙汰が高い。

此の處に一文字屋の遣手お宮が、大福帳を携へて通りかかる。傾城屋の者等はお宮を呼止め、「廓中の頼みぢや。役人衆の詮議に對し、葛城の遣手になつて請返答をしてくれ」と頼む。お宮はこれを諾ひ、役人の前に出て少しも臆せず、罪人取調の訊問にあつて、ぬらりくらりと諧謔交りに不得要領な事をしやべり立て、山三を辯護して役人等を煙に巻いた。彼の女こそは、敦賀で狩野元信と戀に落ちてからは、片時も愛人の事を忘れられず、諸方に流寓して身を持崩し、つぶさに世の憂きしほを踏んだ苦勞人であつた。

名古屋山三は、大門口の門番與右衛門を連れて、彼が馴染の舞鶴屋に立寄る。舞鶴屋の亭主傳三は、山三が捕吏に縛られて殺人犯の取調を受けぬやうに早く遁れさせようとする。然るに山三は、「何が怖くて隠れよう。伴左衛門を斬つたのは己だ。己が狩野元信を見込んで主君に推薦した、其の者に彼が難儀をかけたのを傍觀してはゐられぬ。己が殺したと知れた所で、元信の爲に切腹する命惜しうない」と言ひ放ち、自若として動かぬ。

お宮は己が愛人元信の爲と聞いて驚き、何とかして山三を助けようと決心し、傳三と談合して、葛城は山三が請出してゐる事にし、それに横懸慕した伴左衛門を斬棄てたのは、女敵討である執成さうと一決し、これを葛城に謀れば、葛城は喜んで同意した。それにつけてもお宮は、何の便りもない我が愛人はどうしてゐるかと思ひ焦れて人知れぬ涙にくれる。

折から心細けな鼓弓の聲、哀れを催す相の山の歌を唄つて門前に立つたのは、忍び姿の元信であつた。お宮ははつとばかりにも昏れ、人目のなきを窺つて相抱擁し、四年の年月思ひ焦れて苦勞をした事を互に語り合ひ、涙を流して共に無事であつたのを喜んだ。

お宮は、山三が元信と銀杏の前との結婚を取持たうとしてゐる事を知つてゐるので、どうあつても元信を山三に逢はすまいとする。元信はお宮に懇ろに事譯を説き諭して山三に逢ふ。そして山三への恩義の爲に、其の詞に従つて銀杏の前との婚儀を約す。お宮はこれを聞いて心かき亂れた。さりとて嫉妬は女の最も悪い心と考へられてゐた當時の道徳では、其の苦悶をも隠忍せねばならぬ上に、最早愛人に添はうとする豫ての望みも遂に叶はなくなつた。それも愛人の爲と諦めはすれども、我が身は千因の絶壁から落された心地がして、生き長らへる力もなく、しよんほりとして深い憂ひに沈んだ。

銀杏の前は山三の家來世繼瀬兵衛を附添にして、元信の寓居に借りてゐる北野の社人の座敷へ興入をする途中、黄昏頃右近の馬場の櫻の竝木道にかかる。忽然白無垢のお宮が現はれて乗物を遮り、姫を輿から引出し、「其の婚儀を初七日の間私に代らせて下され。その願が叶はねば、西所川原か船岡へすぐに飛ばうと思ふ氣で、死装束をしました」とて、長い年月の間元信を慕つて

夫婦とならうと思ひ詰めた、其の望も今は絶えた悲しさを語る。姫はこれを聞いて同情し、お宮を我が乗物に入れて元信の寓居に送らせる。

婚儀の後五日目に、喪服を著た舞鶴屋の傳三と大門口の與兵衛とが連立つて、お宮初七日墓參の歸りを元信の宅に立寄り、お宮の死を知らせて、五輪塔を建てた事を語る。居合はせた門弟等は之を聞いて驚き、「そんなら奥にゐるお宮は幽靈であるのか」と、覺つて怖氣立つ。傳三「何の僞を申しませう。お宮は嘗て病の床に就いた事もなかつたに、山三様が葛城様を請出された其の晩から煩ひ、藥やら何かと手を盡しても更に效驗なく、臨終になつてお宮の詞に、『私は元信様と夫婦約束をしました。其の望が叶つたら手を携へて熊野へ參詣しませうと願をかけました。この笠の紐も其の時の爲にと思つて手づから紮けました。元信様にこの笠を渡し、熊野に參つて下さるやうに言傳を頼みます』と申し、念佛を唱へて亡くなりました」と語り、お宮の死を惜んで泣く。

奥の間では、元信がお宮の頼みで、抹香の煙にまかれながら襖に熊野山を畫いてゐる。雅樂の介はなほも疑を確かめようと思ひ、「死んだ人の姿は燈火に其の影が映らぬと聞く。己がすぐにお宮に逢つて其の笠を渡し、燈火を立てて試さう」とて、笠と行燈とを乗つてお宮の室に入る。黄昏照らす燈火の、障子に映る元信の影は其の姿に變らねども、お宮の影は五輪塔となつて映る。元信を見ればいたく疲勞してゐる。お宮は笠を貰つて、「あ、嬉しや、ほんに之が欲しかつた」とて、自分が元信を慕つて諸方に鞍替した身の上話を語り、「熊野權現様にお願をかけた事も、今は願が叶つたも同然ゆる、斯うして共に御禮參りの心で拜みませう。ほんにこの笠はどうした便りに來ましたか。又の便りに傳三様へ、どういふ事があつても元信様の歎かれるやうな事を知らせて下んすなど、これを能くいひ届けて下さんせ」と語る。人々は哀れの感に打たれて、各々宗旨々々の題目・眞言・念佛を唱へて回向する。

〔三熊野かけろふ姿〕 夜は深々と更ける。室には香煙立ちこめて、お宮の爲の反魂香と燻る。元信はひたすらに熊野山を畫い

てゐる。眞と見せる幻影のお宮は、元信と共に笠を被り、手を引き合つて晝ける熊野路の名所を巡る。元信は信心肝に染み、目を閉ちて、「南無日本第一靈驗三所權現」と唱へて伏し拜み、目を開けば、先に立つたお宮は逆様に空を踏んでゐる。はつと驚いて不審がれば、お宮は、「變る姿もつつましや。この世でお目に懸かるもこれ限り、懐しや」と泣く聲聞え、其の姿は燈火の油煙に紛れて消え去つた。

元信はお宮を慕つて尋ね廻れば、お宮は再び姿を遺戸のあたりに現はし、自分が越前敦賀では遠山、三國では勝山、伏見では淺香山、奈良木辻では三つ山、京六條では遺手お宮と、所を變へ名を變へて廓勤めをした有様を見せて、「迷妄の闇に苦患を受ける、其の煩惱も即菩提の道に入り、蓮の臺で來世の契りを待ちませう。我が姿の五輪塔の功德も、一見卒塔婆永離三惡道、南無や三熊野の本地の三尊、迎へ給へや導き給へ」と、聲は伏屋に残つて形は消えた。

夜明け頃、不破入道道犬・長谷部雲谷等は、管領所の役人を伴つて名古屋山三を召捕りに來り、殺人強盜の罪に陥れようとした。山三はこれを反駁して、「自分が伴左衛門を斬つたのは女敵討である。彼が所持してゐた五百兩は、人に盜まれぬやうに彼の胸を割いて肺臓の中に押込んで置いた」と述立てて、却つて道犬等の罪惡を詰つた。是に於て道犬等が非に落ち、道犬父子の首を獄門に晒し、雲谷は流罪に處せられる事となつた。

評

この巻は世話に碎けて、變化波瀾を極めた名文である。

お宮が駄洒落の雄辯を振つて、検屍の役人を煙に巻くあたりは、海に千年山に千年の女の如く思はせる。然るに愛人の事に及ぶや、全精神を捧げて慕ひ、屢々述懐を展べ、遂に戀の破滅に至つて泣き死する。其の優しい、痛ましい、いぢらしい、か弱い女心を見せてゐる。近松はお宮の性格の兩面を對照させて、鮮かな印象を與へ、其の詞章は流麗を極めてゐる。殊に「うつとりと煙草のんでも煙管より咽が通らぬ薄煙、人の見ぬ間に思ふ程泣くを所在か、味氣なや」「ア、く申四郎次郎様私や何にも申

ませぬ、御息災で姫君と夫婦になつて下さんせと、わつと叫び伏しければ」「遣手衆お春お夏と勇めども、官が心は空虚の、腰の巾著ふらくと物淋、しげにぞ見へにけり」のあたりの文は、讀者を涙ぐます妙文である。

上之卷に於て、狩野元信が畫いた虎が眞虎に變じた事や、吃又平の追分繪が生動した事などの神秘的氣分を漂はせ、本卷の「竝木の櫻暮れかかりまだ人顔も、白無垢著たる若き女の横合より」の文から、お宮の亡魂が現はれた場面となり、神韻縹渺たる「三熊野かけろふ姿」の妙文に續いて、其の最高頂に達する。讀者はこの近松情調に陶醉するであらう。

我等は實説と較べて、近松が詩才にまかせて斯くも美しく創作し、其の輕妙の筆は、全く天馬空を行くが如くである事がしみじみと感ぜられる。彼が慈愛に富んだ溫良の性質は、其の作品の中に反映して奥ゆかしい。

○里 京都島原遊女町開發以前の六條遊廓をさす。
○未申 西南。

○通ひ足らぬぞ三筋町 「猿は人間に毛が三筋足らぬ」の語を取つて、三筋町にいひつづけた。

○三筋町 六條遊女町。「東海道名所記」に、六條遊女町が島原に移る様を述べて、「三筋町を追ひたて、西の洞院西七條の中道寺まで一つに合はせて、西朱雀の七條に一掃へして押込められ」にある。「雍州府志」に「板城町」に「朱雀西七條北」に「始在六條番町西并西洞院中道寺町」寛永年中移今處朱雀西」。

○衣紋が馬場 六條遊廓の衣紋橋(二の橋)附近。そのあたりに遊廓に出入する大門があつた。

○一番門 夜明けに打つ一番太鼓にて、廓の大門を開くこと。「好色伊勢物語」貞享三年刊に「凡そ島原の一番門といふ事あり、此町七つの鐘のなる

中之卷

里は都の未申なり通ひても、通ひ足らぬぞ三筋町西の洞院・中道寺、衣紋が馬場の一方口まだ大門の遅櫻、忍びて開け一番門の東が白むドン、どんと打たる太鼓の番太、何者やら大門口に斬られて居る」と呼ばはる聲に、亡八屋・揚屋・茶屋・おろせ・廊の年寄立合、見れば年比卅ばかり屈強の侍、二つ重の白無垢白茶字に縫紋紅絹裏に、源氏雲の裾裏み南蠻ごろの大小、對の金錨毛彫は波に山王祭

なり、初めて夜の門を開く。

○番太 番太郎の略。江戸時代自身番に附屬し、雜役に使役され、夜廻りなどを勤め、遊廓内では太鼓を打つて刻限を報じ、町内を警戒した非人の類。

○くつわ屋 遊女屋。「好色伊勢物語」に「女郎の異名を馬といふ、心は人を乗せてすぐると云ふ事なりとぞ、此馬を引廻す者くつわといふ事ぞ」とある。其の他異説が多い。思ふに「くるわ」の「わ」の音がもとに轉訛した片言かたことであらう。くつわは遊女屋の主人をいふ。又遊女屋をいふ。くつわを亡八と書くは、遊里では仁義智忠信孝悌の八徳が亡ぶからであるといふ。

○おろせ 駕籠舁。(見索引)

○年寄 町年寄の略。町内の公用雜事を掌る者をいふ。(索引)によつて「町年寄」を見よ。

○茶宇 茶字續の略。琥珀織に似た舶來の絹布で、多くは袴地とする。茶字の名はその産出地の印度チヤウル(Cair)の地名から起つたといふ。

○源氏雲 源氏物語繪巻物に畫いてある洲濱のやうな雲をいふ。それに金箔を押し、又は刺繍をしたもの。

○南蠻ごころ 南蠻吳服服連なんばんごころふくれん)の略。吳服服連は蘭語(Groffrein)の訛。駝駝の毛織物であったが、後には羊毛又は綿織を交へて織り、平織も綾織もある。南蠻ごころは、往時南洋諸島を経て來航した西洋人、殊に葡萄牙人・西班牙人をいひ、又それ等の諸國をいふ。ごころは、南蠻渡來の吳服服連の文(あや)に似た絞柄をいふ。

傾城 反魂香

七所、御物蒔繪の印籠・天川珊瑚珠はさもなく、大疵五ヶ所肝先に止め有と委

細に書付、管領所へ訴へさせ死骸を圍ふ横梯子、二階から女郎買手遣手の龜は

首伸ばし、松は寢惚れた顔出しまだ起きくの禿共、常彌・生野と手を引舟も走

つて来て、塀に鞍掛木に取附「薫様あれ見さんせ、吉野様の大膽な掃溜め山へ上

ぼつて、海老の皮で足突かんすな」突いたら大事か、斬られて死ぬる人さへ有

とあだ口々の喧しさをあの斬られて居る人は葛城様の大盡、不破、仲様に似たじや

○毛彫 模様を毛の如く細く刻んだ彫物。

○波に山王祭七所 刀劍の金具七所(金かぶしがね)。目貫、折金(帶留)、栗形、縁、裏瓦、弁)に、波に日吉神輿渡御の模様を鏤刻したものをいひ、意匠をこらした刀劍である。日吉祭禮は四月中の中日で、大津の浦に神輿渡御の式がある。坂本の日吉神社を山王社と稱するのは、僧基澄が唐の天台山國清寺に山王祠あるに準據しじゆんきよとして、比叡山に延暦寺を創建し、古くからあつた日吉神と共に山王と名付けたるより起る。刀劍の金具七所は「萬金産業談」卷之二に圖解してある。

○御物蒔繪 貴人の御藏品の蒔繪の類で、足利義政(藝術の甚しく進歩した時代)御藏品風の蒔繪。

○天川珊瑚珠はさもなく、印籠の根附にせる阿媽港から渡來した珊瑚珠は無疵であつて。天川は阿媽港をいひ、支那の澳門である。

○管領所 管領の役所。管領は室町幕府の職名。將軍を輔佐し、鎌倉の執權と同じもの。初めは執事と云つたが後に管領と改

めた。管領とは筋轡の義であつて、もとは職名ではなかつたが、後には定まれる名稱となつた。

○横梯子 昔は梯子を横にして、道を遮断したものである。

○遣手 禿や遊女の髪をなし且つ監視し、又御屋で諸事の取持ちをする女で、赤前垂をなし腰に鎌を吊してゐる。

○禿 遊女に事へて其の見習をする少女で、將來遊女となるもの。

○常彌・生野 共に禿の名。

○引舟 太夫に附隨する應懸女郎(かこひぢやら)をいふ。蓋し太夫を大船に喻へ、大船の引きつれる舟といふ義。引舟は扇屋の名故夕霧が諸方から客に招かれるので、自分が座に出るまでに應懸女郎を扇屋へ遣つて座を持たせたり始まつたものたさいふ。詳しくは「近松語談」を見よ。

○鞍掛 鞍を掛けて置く處。塀際に鞍掛を持出し、それを踏臺として其の上にあがつたのである。

○大盡 傾城賣の上客をいふ。(見索引)

○雑色 ざふしき 雑役驅使を勤める者、雜人。有位の者は相當の服色あれども、無位の者は定まつた色がない、故に位なくして雑役に従ふ者を雑色といふ。

○上林 かたはし 傾城屋の名。

○すずどけなうて 晝に鏡敷であつて、「すずどけなし」の「なし」は、晝だしの意をなす接尾語。
 ○おしよば紫 おしよばむらさき 「おしよを紫」押折紫を「おしよを紫」おしよば紫と説つた語。衣服の背縫の裾より上の所を揃（つま）み紫ゆ、帯に揃みて端折ること。あづまからゆ。

ないか」、「ほんにそふじや伴様に極つた」雑色ハル、「サア伴左衛門が斬られた」と京重わらんべの物見だけ猛く、手負見ておひがてら傾城見けいせいに群集ぐんしゅうは押しも分わられず、すばや檢使けんしと人を拂はらひ管領かんとりょうの雑色ざふしき、供人引具ぐいんひきぐし死骸しかいを解といて疵改あたらめ、阿江州高島の執權不破しやくけんの伴左衛門に極つたり、扱此者の買かふたる傾城は何といふ、意趣有者いそあの覺はなきか口論くわんなどはなかりしか、眞直まことに申せ當分あたふ隠して、後日に知しれなば曲事まがごとなり」とぞ仰ける、とよりまかりいで年寄罷出としよりのまかりいで、※上林かたはしの葛城かつらぎと申太夫を、千二百兩にて請出まねださる、は筈はずの所、名古屋山三年寄罷出としよりのまかりいで、と申浪人衆しんろうにんしゅうと葛城かつらぎと、行末深い約束ゆいやくとて談合だんがふ成かね申せし故、兩方意趣りうはういそを含み居られしが、是ならで覺候きやくはず」と審つまびらかにぞ言いひ分わくる、雑色一々口書くちがきし、「名古屋山三は浪人なれ共元とももとは伴左と傍輩たはぐわい、旁大事たはだいじの詮議せんぎ也先葛城まづかつらぎが遣手やてを呼よべ」、「遣手出ませ」と呼よぶ聲に玉は臆病おくびやう年寄也、「やら恐ろしや私わしが出て何なんと言いはふ、縛はれたらどふせふぞ、なふ悲しや目が眩めまふた氣附きづはないか」と泣居なみたる、雑色ハル是では埒はかりが明あまいどれぞ機轉きてんな遣手衆やてしゅうを、頼たのんで見みん」と言いふ内に、「出ませ〜」と頻しきりの使つかひ、エイ思おもひ附ついた一文字屋いちもんじやの和國わこくに附つて居ゐる、宮みやと云遣手いふやては越前えつぜんの敦賀とんがで、遠山とんざんと呼ばれた全盛ぜんせいの太夫、戀故こひごと今はあの體ていす、どけなふて智惠ちゑ滿々まんまん、閻魔えんまの廳で

○氣味きみ 恐ろしい。怖い。

○ゑづえづ 氣球ききゅう。怖い。蓋かきし舞まつてくく。嘔吐おうと義ぎであらう。「物類稱呼」におそろし、こぼしを西國にてゑづえづといふ。

○てんほの皮かわ 運うんに任せてどうでも成り次第の意いにいふ。自暴じぼうやけし。ええまよ。蓋かきしてんほは舞臺まいだいであらう。運うんは運舞うんまいの運うんで、人の流涙りゅうなみするを、飛轉ひてんする運うんに譬たとへて舞臺まいだいといふ。轉てんじて、あてもなくすること、運うん任せ、自暴じぼうの意いにいふやうになつたのであらう。

○嵩かさをかけて 輪りんに輪りんをかけて。

○ごあんしよごあんしよ ござりませう。

○廻まわせば 振廻まわせは。我が意いに任せて取扱へば。

○辨慶遺手べんけいゐて 遺手ゐてお宮みやが、「口舌くつじつの中なかを」叶なふまじまじと、髭曲ひまがま「船辨慶ふねべんけい」の中なかの文句ぶんこうを言いふによつて、斯かく洒落しやれた。

○口舌くつじつの中なかを「叶なふまじと 髭曲ひまがま「船辨慶ふねべんけい」の中なかの文句ぶんこうを言いふによつて、斯かく洒落しやれた。

○餅もちの袴はかま 遺手ゐての赤前垂あかまへたれをかき洒落しやれた。

◇このあたり、お宮みやが諸講しよこう交まりの不得要領ふとくやうりやうた塵芥ちんがいをなして役人やくにんを煙えんに巻まく。まことに其そのの人の風貌ふうぼうを見るやうである。

○花色はないろ 縹色ひんしやくの薄きもの。遺手ゐては腰巾着こしあてをさけてゐる。

○鍵かぎの穴あなから天あめを聞きけば「針はりの穴あなから天あめ聞きく」といふ處ところに據たつた。遺手ゐては鍵かぎを持つてゐるので斯かくいうた。

も言いひ抜ぬける此宮みやを頼たのまふ、あれ／＼彼所あそこへ大福帳だいふくぢやうかたげて來くるは、宮みやじやない

か」と言いふ所ところへおしよば紫むらさの忙いそがしげに、「皆みなさんはにござります、まあ／＼氣味きみ疎そ

い事ことが出來できまして、御苦勞ごくろうでござんす」と言いひ捨す捨す通とるを「是こゝ々々お宮みや、檢使けんしの衆しゆ葛くわ

城きが遣手やりを召よるれ共ども、玉たまは愚鈍ぐどんで臆病おくびやう也何なにをお問とひなされふやら言いひ教おしへて濟すま

ぬ事こと、廊中くわちゆうの頼たのみじや葛城かつらぎが遣手やりに成なつて出でて、請返答うけこたへをしてたも恩おんに受うけ」と言い

ければ「あの死骸しがいの側そばへ出でる事ことかア、ゑづ、去いながらいやと言いふも子細こさいらし言いひ損ひ

なふたら大事だいじか、口くちに任ませてやつてくれよてんほの皮かわ」とぞ出でにける、雜色ざしやく鐵鞭てつぺん

横よこたへ「己おのれは葛城かつらぎが遣手やりめか、用有もちて召出よすに何なにとして遲おそなはる、横よこ著ちやく者しやく氣隨きずい

者しやく」と嵩かさをかけて叱しからるゝニア、あの様さまはいの頭あたまから叱しからんす、何なんの氣隨きずいでこあ

んしよ十二じふに人の太夫様たふさまを一人ひとりして廻まわせば、辨慶遺手べんけいゐてが忙いそがしき口舌くつじつの中なかを押おし隔へ

て、打物業うちぶつぎにて叶なふまじと日に幾度いくたびの詫言わがことやら、夜よるの身持みもちは揚屋あやの吸物あぶ同然どうぜん、ち

よつちよと座敷ざしきへ出でる度たびに一杯いちぱいづゝも飲酒のむに、ふら／＼睡ねりの行倒いきたれ朝あさから晩迄ばん

緋袴ひはかま、花色はないろ縹子ひんしよの巾着あても、中ちゆうは秋あきの夜よるの長紐ながひな、提さげた鍵かぎの穴あなから天あめを聞きけばほの

ぼの明あき、妓様達きさまたちの身仕舞風呂みまひふうろの手洗水てあらひみづの髪洗かみあらひの、鍋なべよ杓子しやくしよ白しろよ杵うすよ、正月しょうげつし

○二日の拂日 遊廓などでは二日を以て支拂日にきめてゐた。西鶴作「日本水化藏」卷三、高野山借鏡塚の施主の條にも、「九軒（大阪新町遊廓内の町名）の二日拂ひの用にも立ち」とある。

○卯腹辰股背中に腹 諺に「卯腹辰股背中に灸するを忌む意。これに背に腹はかへられぬ」といふ諺をいひかけた。

○皮切城 諺に「皮切の一灸といひ、何事も手初めは苦痛であるが、それを堪へ。」

○立合 互に行き會ふ意、互に格闘する意をいひかけた。

○茶の子 何でもないので意にいふ諺。「櫻雲集」に「俗に、至て容易なる事をオチャノコト云。」

○もがり かり。陽著。曲著。

○奉加 寄進。

○出しながら 出させながらの意。

○のぼさぬ様に 夢中にならぬやうに。

○引舟（既出）

○目の鞘外す 陰（まぶた）を張明けて、目玉をきよ／＼光らして見る。

○大身 高祿の士。江州高島の執權なれば斯くいだ。

○かい かひ（申妻などとも書く）即ち價値の義。身の上の大事に關する價値の意。近松作「博多小女郎波枕」に「長くも添はぬ物ゆゑに、命のかひまでなしたよな。（これは「が」に「誓」ではない。）

まへば節供朔日今日は二日の拂日なり、灸もするたし卯腹辰股背中に腹、商賣には換へられず皮切城へて出る心、其様に言はんすな廓は諸國の立合、常住切つてのはつての是程の喧嘩は、お茶このく茶の子ぞや、ア、仰山な」と笑ひける、雑色怒つて「いやさ己れが身の上は問はず、此伴左衛門千二百兩にて葛城を請出すとな、傾城は賣物直段極る上からは、名古屋山三が妨げ言ふても叶ぬ筈、然るを違亂に及ぶとはうぬらもがりと覺たり、斬り手も知らいで叶ぬ筈眞直に申せ」と詞荒く問ひかくる、少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣物とは申ながら、神佛の奉加と同じ事で、金出しながら拜まするは恐らく世界に傾城ばつかり、買ふてくれるが嬉しいとて親が、りやお主持の、戀路の關の一寸先見へぬ所を側から見て、買手のお身も廢らず女郎ものぼさぬ様に、棍を取が引舟目の鞘外すが遣手の役、大事にかける證據には世間に心中十チあれば、廓に一ツ有か無し、伴左衛門様は御大身お金に不足も有まいが、御主人のお耳に立、お身のかい共成時は御一門の評議にのり、人を剝ぐの欺すのと落つる所は廓の難、この意氣を立るが色里のたしなみ、身請の談合破れたも伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でござ

○人を刺ぐ 行人の衣服財物を刺ぎ取る。
○落つる所 つまる所。結局。

○知らんでやんす 「知らぬのであります」の諷。それまでは存じませぬ。

○もてあつかひ 扱ひかね、もてあまし。(見案引)

○水をくれる 水賣めにして拷問する意。

○悪がう 悪てんがう。わるふざけ。

○先を拂ひて立返る お宮が恐れる氣色なく人を押分けて去るに、役人等が先を拂つて去るを一律兩叙した。

○よみ覺え 數へ覺え。

○一貫町 大門口に接した町名。

○霞簀のよしやよし 水茶屋には、霞簀を立てて茶見世の園ひみした。近松作「生玉心中」下之巻に「茶見世の園ひ、霞簀廣ひてぐるくく」。霞簀のよしやよしは頭語法。

○與右衛門 大門口の門番の名。

○門番には二代の後風平の供して 講曲「船鈴屋」に、「炬燵天皇九代の後風平の知盛幽靈なり」の文句をまかして、名古屋山三春平を平といふた。

んす、道で斬られさんしたはそこ迄は存じませぬ、定めし死にとも有まいし尤
逃ても見さんしよし、そこに如在も有まいが先の相手が強いが、身の取廻しの悪
さか知らんでやんす」と答へける、檢使の人々もてあつかい「よいはくもふ黙
れ、一時に詮議成難し死骸を酒に浸し置、後日の評定たるべしそれく」とて役
人共、桶をしつらひ死骸を收め、酒汲み入て繩搦み「牢屋へやれ」と昇き上たり、
雑色重て「年寄く、商賣なれば傾城には構ひなし、去ながら夜前よりの買手共
事済む迄名所を、一々に書留めよこりや遣手め、重ての詮議には水をくれる用心
せよ」と、嚇して立共怖ぢもせず「エイ措かんせ、金くれる遣手に水くれるとは
悪ごふな」と、笑ひを機會に言ひ白け先を拂ひて立返る、權威を見せて突き鳴ら
す金棒の音三味線に、引替りたる三筋町戀の、市場と なまめかし、
名古屋山三、春平は、通ひ馴れにし六條の、道には石が幾つ有迄、よみ覺えた
る一貫町の茶屋が、霞簀の、よしやよし、里に投げ打命ぞと、大門口の與右衛門
も門番には二代の後風平の供して口軽く舞鶴屋にぞ入にける、亭主傳三を始と
し數多の女郎・遣手迄、是はく様子はお聞なされふが、先四五日もお出なされ

○詮議萬議 詮議の途を干にいひかけて萬議を重ねたので、詮議を強めていふ。

○外様 表向の意で、こゝは公儀(法廷)をさす。

○古い 珍しうなくて嫌ばしい。近松作「心中宵庚申」上巻に「手の中つまむも、昔古、仕掛が川合なり」。

○葛様 葛城様の略。山三の馴染遊女の名。

○和國様 一筆進せて 和國様よ、葛城様に一筆進せて。

○いや文も… 和國の詞。

○然らば爰は… 傳三の詞。

ぬがよい筈、日比意趣有伴左衛門斬り手は名古屋山三じやと何處ともなしの取沙汰、葛城様のお案じ我ら夫婦の氣遣、此お宮が辯舌で今日はすらりと遣りましたが、伴左衛門が死骸を奈良濱にして後日の詮議、殊にお客の名所書記せとの言ひ付、お身に覺えが無ふてから詮議萬議も喧し、お前を外様へ蹲はせて此傳三が立ませぬ、帳面に留めぬ間に先お歸り」と言ければ、「いや傳三そふでない、お手前こそ念比、廊中女郎衆へ苦勞をかけた此山三が、詮索にあふ悲しやと屈んで居る程ならば、里通ひも妓交りも頭からせぬがよし、先和國様から御禮申す、大事の遣手をお貸しなされ忝い、扱宮の働き心ざし詞の禮は言ふ程古い、三千石取た山三が手を突いて頭を下げる、額に千石兩の手に二千石、主人の外一生に、此式作法は宮一人是が禮ぞ」と手をつけば、「ア、物體ない何のお禮が入ませふ、ちよつと葛様に逢はせて往なせましたい物じやが、私が往けば目に立、和國様一筆進せて下さんせ」、「いや文もいかじや私ら直に誘ふて、遊びに出る顔で連れまして來ませふ、サア皆ござんせ」と座敷をこそは立にけれ、「然らば爰は人も來る、二階へお通りなされ」と言へば、「ヤレ何が怖ふて隠れふぞ、伴左衛門を斬つたるは

○外戚腹 お手かけ腹。幸腹。

○狼藉 狼が草を藉して臥した跡の紛亂してゐること。よつて亂暴の意にいふ。「史記」滑稽傳に「杯盤狼藉」。

○不祥 不仕合。不運。因果。

○新造 禊かぶろから客をみる遊女になつた當時の稱。新造になつた時は盛んな内祝をなし、道中委も著ゆつて將來の全盛を見せようとした。

○天柱 轉手である。天柱も古くから書かれてゐる。三柱又は琵琶の頭部にある柱をいふまき。轉手てんじん。

○天柱に顔を筋違ひ身 天柱に顔を向け、身體を斜にする。

○二世 隆に夫婦は二世の縁といふ。

誰とか思ふ、此山三が手にかけ討て棄てたるぞ、葛城が意趣は僅かの事彼めと傍輩たりし時、狩野、四郎次郎を身が取持にて奉公に出せし所に、伴左衛門親子・雲谷と云繪師を引き、御在京のお供の留守無實を言ひかけ刃傷に及び四郎次郎は行方知れず、剩外戚腹の姫君銀杏の前、四郎次郎に心をかけ御祝言有筈を、妨げ入して狼藉し某迄も譏奏し、浪人の身と成たれば重々の遺恨有、殊に四郎次郎は隠れもなき名筆、大内繪所の官にも進む身を、某強めて國に留め難儀をかけて見て居られず、姫君と夫婦になし四郎次郎さへ出世すれば、本望く生けて置かは四郎次郎に如何成仇をか爲すべきと、傾城の意趣を幸に討て捨たる伴左衛門、知れて切腹するばかり四郎次郎故に捨てん命、聊か惜しいと思ふにこそ武家に生れた不祥には、大門口で立腹切り新造衆や禊共、芝居でする様な事して見せふヤア葛城はどふじやの、亭主唄へ」と三味線の天柱に顔を筋違ひ身、絲の音色も目の色も人を斬つたる體はなく、亭主は結局色違へ「先お咄は要らぬ物、内外の者共必あだ口聞まいぞ」と、わな／＼震ひ手酌にてめつたに飲んでぞ居たりける、宮も聞より驚きて扱は我二世迄と、思ひ込だる四郎次郎様にかく迄深き恩を見せ、

○推參 出過（すしぎ）。（自案引）

○押つ取つて 押し及んで。

○暖か 人をぬるく見くびつてゐるを符めていふ。人を斯うたらうと安く見くびつてゐても、人はまやうにはならぬとの意。近松作「笏盤」に「あたたかな、頼むとは何の口で、ちと利口振出さぬかい」。

○粟田口 京都三條通の東端、今も白川橋東から蹴上までをいふで、大津への通路に當る。昔利場のある處はこの道の右方で、面積百三十坪許の長方形の地であつた。

○下からどうも量られぬ 上のなきることば、下からどうも推量られぬ。

○其段 主持と浪人の相違の事。

○身に引かけて 他人の事を我が身に引負うて。

お命をも捨んとはア、頼もしや忝（かたじけなく）や、我こそと名乗つて一禮言はふか、いや、
姫君とやらへ聞へては、御祝言の邪魔と遠ざけらるゝは知れた事、只餘所（よそ）ながら彼のお方の爲に成、お命を助けるこそ我夫への奉公と、思ひ定て「是傳三様、
お侍の覺悟の上を女子の了簡推參な事ながら、彼の様に腹切らせ恩を受けた四郎次郎、何處の浦で聞附てもよもや生きては居られまい、人の所縁は知れぬ物どれからどれへどふ續きて、誰が悲しみとならふやら山三様の御身の難、遁るゝ、
工面は有まいか思案は今でござるぞや」と、餘所を言ふのも夫の事、案じて餘る涙の色胸撫（むねな）で下すも道理なり、
ニヲ、汝が言通り、押つ取て廊の迷惑お仕置には法が有、
腹切たいとおつしやつても能ふあた、かに、見苦しい罪に粟田口下からどうも量られぬ」と言へば、山三はつとして「ア、ウよい所へ氣がついた、三味線所でないはいの、相手は主持此方は浪人荒れ者にしなされ、木兎の止つた様に獄門などに曝（さら）されては、先祖一家の恥辱今さつぱりと腹切ても、其段からは死散迄彌恥（やぢ）は重（おも）う成、エ、主持ぬ身の無念さよ」と齒切りを、してぞ涙ぐむ、宮は聞程我男の、身に迫り來る悲しさの「どふぞ好い分別して、進せて下され頼みます」と身

- とんと すつかり。
- 肌を合はせ 腹を合はせ。
- 手形 請出しの譯文をます。
- とつと ずつと。

○女敵討 義夫を討つこと。

○扇ぎ立つれば 煽動すれば。

○無上に むやみに。この所は山三の詞。

○お腰の物 佩月。この所は亭主の詞。

○ハテお主云々 お宮の詞。

○左文字 吉野朝の頃筑前博多の刀鍛冶左衛門三郎作の刀をいひ、銘に左の字を刻んである。左衛門三郎は正宗の弟子である。左派の者に元應安吉、吉良などの名上がある。

○二千五百貫 錢四貫文に金一兩替として、二千五百貫は金六百二十五兩に當る。

○折紙 刀劍などの鑑定價格を書きつけた折紙。

○鞍鞘 雨やさめ(雨)を鞍鞘にいひかけた。

に引かけて歎く體、亭主暫らく思索し「是々よい仕様有、爰へ寄りや」と小聲に成、是を序でに萬城様を、とんと請出し奥様に定める、時に親方と肌を合せ、手形の日附をとつと跡の月にして、外様へは借宅見立ての其間廊に少し逗留分、すれば御夫婦と云物よ、昨日迄伴左衛門が、口説ひた狀文握つてからは間夫の證據也、女敵討は天下のお許し千人切つても切り徳、此分別はどう有ふ、宮は悦び「ヲ、出来た、めでたい、智慧者め」と扇ぎ立れば、無上にめでたがるまい、當分請出すお金がない、若お腰の物をそれ迄の質物に遣はされれば、私に加判で太夫様を只今門を出して見せませうが、お侍にお腰の物とはなふお宮、どふも申かねるはいの、ハテお主のお身ばかりか不便になさる、四郎次郎迄、命を助かる事なれば御了簡遊ばしませ」と、手を合せるやら歎くやら山三も共に涙を浮め、ヲ、何が扱、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と言はふぞ近比過分千萬、コレ是は重代の左文字、二千五百貫の折紙有、惜ししとは思はね共、七歳の時より今日迄終に脇指一本で、他所に居た事知らぬ身が刀の冥加に盡きたか」と、涙は雨や鞍鞘の脇指ばかりで奥に入後姿を、見送りて「おいとしやく、

○まきぞへ 巻添。寶物を入れるに、その品物
だけでは要求金額に足らぬ爲に、それに追加する品
物。

○八丈 八丈絹。「和漢三才圖會」卷二十七に「八
丈絹」按伊豆濱海有島、名八丈島、土人以山繭
織絹甚稠強、其色經年不凋變、又染之不以染、最
爲希珍、如今以常綿織之、其色黃或赤褐、而多
黑絲（しまじ也）。

○惣嫁 辻君。

○のらぞんざい なまけて不取締り。

○梨も礫も 音沙汰の無きを「梨も礫も打たぬし
（礫を打つて合圖する事も無い勢）」といふ。それに
「うつり」をいひかけた。

◇このあたりの文は、近松情調の妙味がしみんぐミ
感ぜられる。

○所在 身分。かかる運命にある身分の意。

○いかい 殿い。きつい。大きな。たいへんな。

○物日 前文に「今日は二日の拂日なり」とある。

○山嶽 名古屋山三様を略していふ。遊里では遊
客の名をその嶽にいうては、何の障りがあるかも知
れぬを憚つて、略称を用ひる。

○相の山 問（あひの）山節の略で、人生の無常
をうたつた俗曲である。寛文延寶頃、問（あひの）山
（伊勢の外宮と内宮との間で、問魔堂を過ぎて問の

傳三様どふぞ首尾して下さんせ、まきぞへが入ならば私が縋子の帯も有、八丈の
拾もござんす」と、歎けば共に泣聲の「ヲ、奇特に能ふ言やつた、己も男じや氣
遣すな嗚を惣嫁に賣つてなりと、埒を明ぬといふ事は泣ひて出るぞ頼もしき、宮
が憂き身の、憂き思ひ、口で言はねば氣に岡へ目に流る、は百分一、胸に涙の滯
ほり山三様に骨折るも、男の心の悲しみを、思ひ遣手となつたるものらぞんざい
で爲られふか、戀が高じて遠山が此態になつたとは、知らぬか聞ぬか男めが何處
に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと煙草のんでも煙管より咽が通らぬ薄
煙、人の見ぬ間に思ふ程泣くを所在か、味氣なや、内を首尾して葛城は走つて來
るより駈上がり、宮殿爰にかいかひ世話であつたげな、忝いぞや土になつても忘
れはしませぬ、おれが心を察してたも、ほんに物日中に瘦せたはいな、此方
は今は何の苦もなふて樂である、遣手の身は羨ましい山嶽は奥にかの、ちよつと
逢ふて來ふぞや、後に」と言捨て、行を見るにも猶涙、辛いぞ憂わぞと言中
にも男を傍へ引つけては、憂きを凌ぐも力が有此身には苦も有まいとや、明暮れつ
きあふ人目にさへ樂な様に見へる物、遠國隔てた男氣に思ひやりの無い事は、無

山にかかると、相の山節の歌を誦つて、「三味線と座
 (まさじ)の連れ頭きに、童子を踊らせて、道行く旅
 人から饒を貰つたお杉・お玉などいふ婦女がある。
 京阪地方にも相の山を誦ぶ物貰ひがある。三味線の
 代りに鼓弓を用ひたのがある。この文に「夕べ朝
 の鐘の聲：驚く人もなし、野邊より彼方の友とては
 ……冥途の友となる」とあるは、相の山の歌詞である。
 ○寂滅爲樂 眞理に冥合すれば、諸惑の煩擾を
 寂し、生死の業苦を滅して、眞の樂たるの意。「涅槃
 經」にある四句の偈文、即ち「諸行無常、是生滅法、
 生滅滅已、寂滅爲樂」の中の一句である。

○胴脹 まんなか。最中。

○血脈 法門の相承を身體の血脈相連つて絶えな
 いのに喩へた語。密宗では相傳口訣を重視し、其の
 血脈を記すに一定の法があつて、付法八祖以下の師
 資や灌頂の年月日を記す。淨土宗・日蓮宗にも血脈
 を授ける。そして一宗の要義を傳へたものを法脈と
 いひ、受戒の相承を戒脈といふ。俗人結縁者に授け
 るには、法門相承の略系譜を書いて、其の包紙の表
 面に戒脈或は血脈と書き、三寶又は種子印を書いた
 ものみ與へる。血脈を受けた人は大切に保存して、
 死亡の時棺中に納めて葬る。

○したたるい あつさりしない。(見索引)

○遣つて往なそ 饒を與へて早う去なまう。

○二世の縁 夫婦の縁。

○堪へるだけ 堪へられるだけ堪へよう。

○ふくろび ほころび(終)の轍。堪忍袋が綻び
 る意。

理共言はれず去とては、責て有所が聞たい」と聲を、立ねば泣じやくり、氣も沈
 み入時しもあれ心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山我に涙を添へよとや夕べ
 朝の、鐘の聲寂滅、爲樂と響け共、聞て、驚く人もなし、「通りや、只の時さへ
 相の山聞ばあはれて涙が零れる、悲しゆてならぬ胴ぶくらに、あた聞ともない通
 りや、通りや」と言ひて涙を押し拭ふ、野邊より彼方の、友とては血脈、一ツに
 珠數一連是が、冥途の友となる、「ア、したるい手の隙がない、通りや〜」
 と言聲に心に苦のない新造・禿、ばら〜と走り出、此方ら好きじや相の山、聞
 て泣たい所望〜」と立かゝる、エ、意地の悪い子共じや、それ程何が泣たいこ
 と、遣つて往なそ」と巾著の紐を解いて取出す、錢は一錢二世の縁切れても切れ
 ぬ笠の中、泣沈みたる顔見れば戀しゆかしの四郎次郎、互に「ハア、ハア、」と
 ばかりに目昏れ、心はしみぐと、抱附きたふもあたりには禿が目元小賢しく堪
 へるだけと包め共咽びふくろび泣居たり、「ア、往なせましたらよいものか、まち
 つと哀れな心を唄ふて聞せて下さんせ」、「あつ」と涙に磨る篋鼓弓の絃も細き聲、
 「定めなき世に、捨られて身の寂、滅が知らせたく文は、書け共便なし、獨り、

○面影 宮の面影をまかせた。この祖の山の唱歌を聞くお宮の身が、その唱歌の通りにならうと、神ならぬ身の知る由もない。

○鬼界が島 大隅・薩摩の南方にある諸島の構。古來指す所明瞭でない。從寛僧侶が流された鬼界が島は、硫黄島のことである。

○不慮の事ども 思ひがけない事ども出来しゆつたらし。

○蘆屋釜 筑前國蘆屋の里で鑄た茶の湯の釜。土佐光信が都の亂を避けて、蘆屋の里に下り住んだ時、其の里人の鑄造する釜の下繪を盡き、其の模様を入れて焼かしたものである。雪舟や元信の畫いたものもある。

○前垂・鍵は下げまい 遣手は赤前垂をなし、腰に鍵を下してゐる。よつて遣手動はせぬだらうとの意。

寢覺の、友とては夢に、見た夜の面影が是が寢覺の友となる、折しも二階奥座敷
「來いよ〜」と手を叩く、「あい、〜あい」と禿共、立間遅しと走り寄り、「是
斯ふした事も有ふかと憂き命をも捨なんだ、よふ顔見せて下んせ」と、紐れば男
も抱き締め涙の、外に聲もなし、なふ戀しいの床しいのとは大抵戀路の習ひぞや、
それをとんと打越して主親方にも背きし故、奈良・伏見迄賣渡され今此京で遣手
となり、花の都も我身には鬼界が嶋に任心、胼・霜焼に苦しみても手足の苦勞は
成もせふ、心を痛めるばかりじやない力業にも才覺にも、叶はぬ物は逢ひたいと、
思ふて違る瀬がなかつた」と甘へ、口説くぞ不便成、四郎次郎も盡きせぬ涙「ヲ
ヲ道理〜いとをしや、度々文でも云通、其方の陰にて大事の繪を書き譽を取、
契約違へず身請をせふと思ふ間に、不慮の事共命が有と云ばかり、恩を被た名古屋
屋山三我ら故の浪人、行先も〜めでたいと云字は書様も忘れて、今は扇團
の繪・蘆屋釜の下繪に露命を繋ぎ、大津で問へば奈良にと云ふ難波で聞は伏見と
やら、是は采女・雅樂の介二人の弟子の介抱で、丸四年めに顔を見て嬉しい事は
何處へやら、已と云者ないならば疾ふによい仕合、前垂・鍵は下げまいと親御の事

○紫竹に染むる 紫竹とは漢竹をいひ、表皮紫色である。昔、養帝の二妃（嬪皇女英）が養帝の死を悲んで、泣いた涙が落ちて竹を紫色に染めたといふが、我が師の竹も涙の爲に紫色に染まるばかりであるとの感。「續古事談」六に、「この二人（嬪皇女英）舞におくれて咲きける涙をみたる竹なり云々」。

○挨拶 仕儀。なりゆき。この語も「禰語」より出づ。

○姫君 衆香の前。

◇當時の婦人道德では、嫉妬する女は最も醜態な心であると言われてゐた。お宮もそれか能く知りながら抑へきれずして腕「もがしく。其の死物狂ひのさまを見るやうである。

○げしう 正しくは「けしう」で「異けしく」の香煙。異様に。きつくわい（奇怪）にも。

○餅屋のお福 往時餅屋の看板に、馬の面に阿福の面を被せたものを掲げた。蓋し「あらまし」をきかせた謎である。餅屋の看板の阿福のやうな醜面の女どもの感。



○山姥 山に棲息する鬼女。

○世間見た様にもない 宮は嘗て傾城であつた。傾城は較多の人々に接し、能く世間を見てゐる筈なので斯くいふ。

迄思はれて、生きた心はせぬぞ」とて男泣に泣ければ、「ナウそふ打明て下んすが

本々の御眞實、私はいつそ親の事思ふ所へ往かなんだ、私に罰が當らずは當る者

は有まい」と、口説き立れば四郎次郎二人の弟子も共涙、鶯の竹も古への紫竹に

染むるばかりなり、や、有て四郎次郎「先言ふべきは、名古屋山三春平此所にて

不破の伴左衛門を討て、詮議にあふ由洛中の是沙汰、遺恨の原は某故聞捨て置か

れぬ挨拶、廊の説はどふぞ」と言へば「さればいなア、委しい事も聞きました山三

様にする世話は、此方様への奉公と様々心を碎いて何の波風ない様に、十の物が

九ツ追附埒が明答で、あれ奥にじやはいなア」、「是は大慶先通つて對面せふ」、

「イヤ」待たんせそりやならぬ、此方様を尋出し、姫君と夫婦にせねば侍が廢

ると、今も今言ふた人に逢はずと往んで下さんせ」、「エ、愚痴な事ばかり、我故

に一命を果さふと云山三じやないか、逢はずに歸つて人外の名を取れか、げしう

逢はせまいなれば爰で腹を切らふか」と、脇指に手をかくる「ハテ死なんせでは

ないはいの、外に奥様持まいと云誓文立て逢はんせ」、「ヲ、姫君は扱置たとへ餅

屋のお福でも、山姥と祝言するとても、山三が詞を一日立ずに置れふか、エ、世

○どうぞく〜ごうぢやく〜。

○大切さ 愛人を大切に思ふからのこと。

○男の面役 男は面日を重んずる義務があるとの意。

間見た様にもない氣が狭いぞや」と恥しむる、「世間は唐迄知つても氣は武藏野程廣ふても、大事の男を人には添はさぬ、山三様に逢ふて四郎次郎が女房は、此宮でござんすと罷出て理らふし、一ツ、言ひ度ば言や詞の中に脇指を、此腹へ突込むサアとふぞく」と詰められて、泣より外は「何を云も大切さ、そんなら言ふまい息災で居てくだんせ、去ながらどふぞ言拔けらるゝなら、言拔けて見て下んせ」とまだぐどくの忍び泣き「尤々男の面役、斯ふ言ふとて何の如在が有物ぞ、弟子衆此方へ」と涙ながら奥へ行間も惜まれて、是采女様雅樂様、祝言の咄が出たら言ひ消してくださんせ」と、頼む返事の否應は涙に紛らし入にけり、心もとなさ危さに心騒ぎて落ち著す、襖の際に差足し、立ち聞すれば伴左衛門を討止めた物語、ア、嬉しや女房事は出ぬぞふな、まちつと聞ふ、あの囁きは何じや知らぬ、聞たい迄」と耳を寄せ、ア、悲しや連れて歸つて姫君と、女夫にせふと言ひくさる、此方の男が利口そうに、「此方の詞は背きませぬ」と、吐し面は何事じや、エ、聞まい物を腹の立」と、耳を塞いづつ居つ身を揉み歎くぞあはれなる、舞鶴屋の傳三郎・遣手・引舟・下男、いきり切つて大聲上、こりやく〜葛城様の身請さ

○繪旨 繪言の旨の額、勅旨を承けて藏人から出す文書。

○祝言の夜は勝手へ見舞や 後文に、傳三郎と與右衛門とが連立ち、喪服を着て、元信の祝言の日の奠持に、元信の露唇を見舞つて、宮の死を話すその伏線。

○待女郎 婚禮の時に新婦に附き添うて世話をする侍女。

○投首に 宮は愚案投首に。

らりつと埒明た、跡の三月二日に隙をやるとの一札、王様の御繪旨より高直な物握つた、乗物の戸をくはらりと明て今でも大門お出なされ」と、喚く聲に人々悦び走り出、「ア、〳〵お手柄〳〵酒呑童子の首より取にくい事、主持ぬ身はこゝが過分手を引合ふて門を出て、名古屋山三と葛城と後々迄の咄を残さふ、ヤア亭主近附になつて置きや、狩野、四郎次郎元信廻り逢はふばかりに、互の苦勞は知る通身は葛城を請出す、四郎次郎は大名の御姫様を掘出す、祝言の夜は勝手へ見舞や、現宮の禮は今申さぬ前垂・鍵を捨てさせ、武家が公家か町人が望次第に數ならね共、拙者が親分先姫君の祝言には、待女郎に頼もふ」と勇みかけても投首に、目も泣腫して返事もせず恠へかねてつゝと出、言はんとするを四郎次郎柄に手をかけ腹をさすれば手を合せ、泣く〳〵退れど猶堪られず思ひ切て言はんとす、四郎次郎胸押し明既に斯ふよと見せかくる、「ア、〳〵申四郎次郎様私や何にも申ませぬ、御息災で姫君と夫婦になつて下さんせ」と、「わつ」と叫び伏しければ、共にせき來る四郎次郎「ア、好都合點〳〵廊の衆は涙脆くめでたい事にも泣たがる、身請する女郎衆に名殘惜しいは尤ながら、他國へ行ず死はせず追附逢はふ泣きや

○乗物古い 駕籠に乗つて大門を出るのは、以前から誰もする事で珍しくない。

○圍 應徳も書く。天神の次の位。(見索引)

○打つたり舞うたり 鼓を打つたり、又舞ひもしりりの意で、一人で種々な働をするをいふ。

○置土産を遣手衆 置土産を遣るを遣手衆にいいひかく。

○お宮は、今まで愛人元信と暗れて夫婦ならうとする希望に燃えて、幾多の難雜に遭つても、いつも快活であつた。其の佳人が突然失戀の嘆き絶望の叫びを掲げねばならぬ身となり、暗戀の間に凋落する。その痛々しさが、美しい詞章で細かに寫されてゐる。

○二十棟 年節二十に長持二十棟をいひかく。

○長持に桐の葉繁る 長持に桐の葉の紋様をつけた覆ひをいひ、それに桐の葉繁る四月をいひかく。「律曆歲時記草葉」四月の條に「梧桐四月嫩葉小花を開く」。

○嫁入月 四月をさす。諺に「三月は去れ九月は結納を忘る」。

○四郎次郎元信：借り座敷 北野の社人の座敷を借りて、四郎次郎元信の寓居にあてがつた。

○右近の馬場 京都市上京區馬喰町西側で、南北に互れる馬場。

○四邊の風物深遠として凄氣たたよふ。折から失戀絶望して病死したお宮の亡魂が現はれる。誠に餘情のある描寫である。

○反を打ち 刀を抜かろふする時、鞘の反をか

るな」と、餘所に言ふさへ包みかね目はうろ／＼と成にけり、「サアお乗物が參つた早ふお出なされませし、「いや／＼乗物古ひ」と立出れば、一家の太夫・天神・圍「葛城様さらばや、さらばでござんす門迄送れ」跡賑やかし、打つたり舞ふたり「舞鶴屋傳三が萬受込んだ、置土産を遣手衆お春お夏」と勇め共、宮が心は空虚の、腰の巾著ぶら／＼と物淋、しげにぞ見へにけり

花の三月、早過て娘の年も廿棹、いつの間にかは長持に桐の葉繁る嫁入月、銀

杏の前の御祝言名古屋山三の計らひにて、四郎次郎元信を北野の社人に借り座敷、

名古屋が家の子世繼瀬兵衛興添にて、供女中の出立や、地黒地・淺黄・紅・檜皮右近

の馬場にぞ著給ふ、竝木の櫻暮れか、りまた人顔も、白無垢著たる若き女の横合

ひより、嫁入の供先押し割り／＼打も擲くも事共せず、しつかと絶つて引程に乗

物の戸は碎けて放れ、姫君「あつ」と叫び給ふを胸ぐら攔んで引ずり出し、土手に

押し附引つ据へたり瀬兵衛刀の反を打、六尺・徒士衆追つ取廻はし「そこを放せ

放さずば、撲ち殺せ捻ぢ殺せ」と口々に呼ば、れば、姫君制して「ア、黙つて居

や構やるな、嫁入する身に女の際で只の事とは思はぬ、四郎次郎殿の手かけか但

へすをいふ。

○六尺 駕籠昇(ワカまき)。(見索引)

○際 分際(わけ)の略。身分。

○理不盡 理を盡さずして、おしつけること。無理。

○相手向ひ 相手同士が差向ひての話し合ひ。

○何ぞ 何事であるぞ。

○陸路を分けながら 平和に道を分けて言へども、程かに事理(ことわけ)を分けていひながらの意に、「陸路を分けながら」といひて、其の雑語「しごうの山坂や」につづけた。

○七本松 七本松通りをいふ。即ち京都市上京区にあつて、六軒町と上七軒との間にある街道。「雍州府志」古蹟門下(葛野郡)の條に、「一夜松(一尺松)九年三月十二日、嘗神託曰、北野右近馬場、一夜松千本當生、則果如託言、是號二一夜松、今七本松原是也。

○頭のかかり 話しかけようとする發端。

○仰々しい こまごましい。

○見せ 見せつけ。

○西所川原 最勝川原である。もこ洛東の火葬場・葬地。「雍州府志」古蹟門上(愛宕郡)の條に、「最勝川原(在三條西村之外)、良睦火葬之場也、相傳古最勝寺在斯處」。

○船岡 船岡山は京都市上京區紫野北船岡町と樂山町との間にある丘陵(麓(麓)船岡神社がある)で、其の形が船に似てるからの稱。其の南麓又は西北麓は往

時の戯(たは)ふれに、末では妻にせふなど、男の當座間に合(あ)を、一筋な心から其恨(あ)で有

ふの我身に知らぬ事ながら、殿を持つ役なれば聞(き)まいとは言(い)はぬ、道理さへ立(た)事

で負(ま)ける道なら負(ま)けもせふ、又筋もない道言(い)つて見(み)や我にも手も有(あ)り足(あ)りも有(あ)り、銀杏

の前(ま)か理不盡(ふじん)と言(い)はれては大人氣(おとなげ)ない、相手向(あ)ひにして置(お)きやサア何ぞ聞(き)ふ」と、

口(くち)は陸地(りくぢ)を分(わ)けながら、胸(むね)はしどろの山坂(やまざか)や顔(かほ)は躑躅(つづじ)の如(ごと)くなり、女溜息(めなげ)顔(かほ)を上(あ)げ、

ア流石(りうせき)でござんすな、其美(うつく)しい出様(いでよう)には、斯(こ)ふ取(と)ら胸(むね)ぐらを放(は)し様(よう)に困(こ)つた、我

とても中々(ちんぢん)狼藉(らうじやく)する氣(き)は微塵(みじん)もなく、お乗物(のりもの)に縋(すが)つて歎(なげ)きを申(ま)お情(なさけ)を受(う)ふと、七

本松(ほんまつ)から跡先(あとさき)に是迄(こゝ)伺(うかが)ひ参(ま)りしが、頭(かぶ)のか、りがどふもなく思(おも)はず慮(る)外(ほか)致(いた)せしな

り、仰々(おごご)しい白無垢(びくく)著(き)たは討果(はた)しての何(なん)のと云(い)ふ嚇(おど)しでも見(み)せでもない思(おも)ふ願(ねが)ひが

叶(かな)はずは、西所川原(にしよがはら)か船岡(ふねおか)へ直(す)ぐに飛(と)べふと思(おも)ふ氣(き)で、私(わたくし)が爲(ため)の修羅出立(しゆらでたち)高いも卑(ひく)

も女子(こゝ)子(こ)には、大(お)なれ小(こ)なれ此氣(こゝ)はあれど言(い)はぬで持(も)つた世(よ)の中(なか)、色(いろ)に出(い)さぬをた

しなみと心(こゝ)で心(こゝ)を叱(しか)つて見(み)ても、如何(いか)成欲(なるよく)も離(はな)れふが男(おとこ)に欲(ほ)は得(え)離(はな)れぬ、去(さ)ると

は穢(きた)な氣(き)恥(は)かしゆござる」と聲(こゑ)をあげ譯(わけ)をも、言(い)はず泣(な)居(ゐ)たり、瀬兵衛(せべゑ)を始(はじめ)女房

時刑場(ときがら)火葬場(くわいじやうばう)・葬地(そうぢ)であつた。「國花萬葉記」卷(ま)二(下)に、「舟岡(ふねおか) 紫野(むらさきの)大徳寺(だいてくじ)の崎(さか)かはらじなり、世に千本の墓所(むらさきの)云(い)は愛(あい)也(なり)。

○修羅出立 白無垢の死装束。

○愛き瀨 發苦の場合。本曲・上之卷に、「一人の娘お光」に君傾城の勤めをさせ、子を賣つて食ふ程の發苦を渡せしとある。

○流れ 遊女。(見索引)

○起請 事を發起して、神佛の照覽を請願すること。神佛かけて誓ふこと。

○無理とも損とも 無理である意。無理を無理に通はせて、「損とも」を續けた。

○嫁入を下され 嫁入を私に譲つて下され。

○笑止 困ったこと。(見索引)

○いやと云は 否(いや)しむ時は。

○義理疎め 義理の爲に身を疎められること。

「御祝言の時刻違ふ、道行ばかり言はず共、入事ばかり申せ〜」と責めければ、
 「ヲ、御尤々々私は土佐の將監が娘、幼名はお光親の愛き瀨に身を賣り、越前の敦賀で遠山と申せし流れの者、四郎次郎殿とは故有て、起請一筆書かね共釘鏡より離れぬ中、身も持崩し方々を狼狽へ、今は六條三筋町上林が内宮と云、流れの身より淺ましい遣手はしてもをのれやれ、一度は狩野ノ元信が内儀と云はれふ〜と、四年が間の氣の張り弓はつたりと弦切して、泣にも力あらばこそ無理共損共餘り無法な事ながら、長ふは入ぬ一七日今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬々年七日添ふて別れて後は此世の生顔見せまいし、たとへ死でも彼の人々の未來の回向は受ますまい、もふ此跡は申ませぬ」と、涙を流し手を合せ伏し轉ぶこそ哀れなれ、姫君呆れておはせしが「聞ば笑止痛はしや、いやと云は大抵膈慾者と言はれふす、心得たと言ふてから迷惑するは我一人、新枕はどふこうと勢ひかゝつて行嫁入、道から貸して歸るとは咄にも聞ぬこと、此方や義理疎めになつたか」と聲を上て、泣給ふ道理の、上の道理なり、稍有て涙を押へ〜ム、よし〜合點した、其方が其思ひからは男も心にかゝる筈、二人の縁の離れぬ中へ嫁入しておか

○飛梅の神 天滿天神。

○言附けた 言附けて作らせた。

○此分で死んだらば 私が元信様に添ふ事もできず、遺手のままで死んだらば、冥執晴れずして。

○借る時の地藏：閻魔 「借る時の地藏頭、返す時の閻魔頭」の語に據る。そして地藏菩薩に捨てられ、地獄に墮して閻魔の廳に行くをいひかく。
○神も佛も見通し 「神は見通し」の語による。
○御厨子 手道具・香盤などを載せる厨子櫃。
○打亂れ箱 打亂れてゐるに亂れ箱をいひかく。亂れ箱とは、疊んだ衣類を一時入れ置く箱をいふ。
○貝桶 蒔繪のある六角形の桶に、貝合の貝殻を入れたもの。嫁入道具の一。

しうない、蓋も懸子も打明けたこそ女夫なれ、男を貸してやる程に互の心を晴らしてたも、去ながら餘り懸子を明け過し底抜きやつたら此方や聞ぬ」と、涙ながらにの給へば「ア、有難や」と遠山は、姫君に抱き附「貸す御心より借る心御推量遊ばせ」と、泣聲よそに飛梅の神も憐れみ給ふべし「サアとてもなら早いがよし元信はかねてより、傾城好きと聞し故、此小袖を見や廓模様と言附た、是著て往きや」と打掛脱いで「七日と言ふも忌々し、來月一杯貸そや」、「ア、お心ざしは有難けれど終に別る、此身なり、然らば七々四十九日の中は私が妻と思召せ、此分で死んだらば定めし男の餓鬼道へ落ませふ」と、泣々立テは姫君「そふ言ふて皆吸干しやんな何處ぞ少しは残してたも、此方は是から腰元連れて歩ふて戻る、あの乗物で皆供しや」と歸るさを見て遠山は、「姫君様の情程我身の罪は重なる、借る時の地藏菩薩に捨られ返す時の閻魔の廳、どふ言て遁れふ」と、涙をかこふ神垣や神も佛も見通しに、酸いも甘いも梅青む北野の、借屋に
嫁取の嫁の手道具、御厨子・鏡臺・打亂れ箱、葛籠・貝桶・挾箱、長刀持せて遺手の宮が來るとは思ひがけもなし、其心底の屈きしこと姫君の情と云ひ、旁々黙し

○宗徒 宗とあるもの義。「徒」は借字。おもたつたもの。

○すべよくまかなひ 都合好く取計らひ。

○音物 贈物。

○巻物 絹布などの巻物。

○太刀折紙の馬代銀 折紙附の太刀と、紙に包んだ馬代銀馬をはなむけにする其の代金とをかけた、いうた。

○黒餅 眞圓まんまるの紋をいひ、中古武士が矢日の祭事の黒餅に象つたのに始まるといふ。この文は、婚禮に杯を納める時に出す雜煮の餅に、黒餅をいひかゝ。そして黒餅は、麻上下の紋をいうた。

○子持筋 雜物の文(あやし)の名。太き筋と細き筋と並行したもので、嫁入などの時に著て祝ひのものとす。

○各同前 各方と同様。

○五百八十の餅 婦人が嫁して後三日或は五日目に父母の家に至る儀式を里歸りといふ。この時五百八十個の餅を歸寧の土産とするを式法とされた。蓋し五百八十を祝數に用ひる事は、「古事記」上卷末に、「日子穗々手見命者坐す満千穗宮(伊弉册)殿」にあるより出たものであらう。「貞丈雜記」卷一、祝儀之部に「今世上に婚禮の三つめの日、親類共に餅をつかせて五百八十七に丸めて、薬のむしるにてかますさいふ物を作りて、それに彼の餅を入れて硬に持たせやして、途中にて出であひ互に餅を受取り渡して祝ふ事、當世江戸にて事らはやる也、京都將軍時

難ければ門弟雅樂の介、采女・準人・大學など宗徒の弟子共、すべよくまかなひ

春平にも内意を得、表向は「銀杏の前御入有し」と披露すれば、方々の音物樽よ

着よ巻物よ、太刀折紙の馬代銀五拾目懸の蠟燭の、明ぬ暮れぬと賑ひて今日五日

目の麻上下、雜煮の黒餅・子持筋つきくしくぞ見へにける其日も漸、傾く比

名古屋山三春平は「お見舞申す」と案内ある、雅樂の介出向ひ、「先以此度は姫君

御了簡美しく、お宮も念晴れ元信心も落著申こと、皆是貴公の御蔭門弟中も忝く、

悦び存候」といづれも禮をなしにける、是は迷惑元信爲と存れば、各同前の大慶、

扱今日は五日目五百八十の餅を搗いて、里歸りと云事縁邊の式法なれ共、親元は

遠所祝ふて我等が宅へ呼びたいと、葛城も申がちよつと尋て見たい」とあれば、雅

樂の介打笑ひ「イヤ尋ぬるに及ず、頓而別る、日切の女夫寝入る間も惜しいとて、

顔と顔を突き合せ頭も振らぬしたるさ、里歸りは扱置臺所へも出られませぬ、

「それはぎやうな喰ひ附様そふして互に飽かせたら、跡の爲には珍重元信筆は達

者なり、一日一夜に半年の仕事は出来ふ」と笑る、かゝる所に無紋の色に淺黄

の上下、編笠取て入を見れば舞鶴屋の傳三郎、出口の與右衛門打奏れたる風情な

代の故實には左様の事はなし、三つめの日餅をつき祝ふ事はある事也、餅の數定まりたる事なし。

○ぎやう 仰山だ。

○無紋の色に 編笠 無紋の喪服に淺黄上下を著け、編笠を被るは葬禮の裝束である。「色」は喪服の義。

○出口 廊の出口。

○不道化 戯談をいふ場合でない時にいふおどけ。「たうけ」は「おどけ」の轉換した戯語。

○お宮とは言はず佛々 お宮は神のこゝなれば、かく洒落だ。

○やくたいもない 益體もないの義であらう。役にも立たない。詮方も無い。

○蓮臺寺 京都市上京區船岡山の下、千本十二坊の所にある上品蓮臺寺をいひ、眞言宗の寺院。

○專譽 大和國長谷寺中興第一代の高僧、慶長九年五月五日入寂、壽七十五。

○灰寄せ 死者を火葬して、其の骨灰を拾ひ集めること。

○五輪 五輪塔。地・水・火・風・空(以上五輪)を方圓三角半月・圓形の五空風火 水 地 形を以て表はし、其の形相を配して塔を造る。之を五輪塔といふ。



○癩 胸部又は腹部に瘰癧を起して烈しく痛む病氣で、婦人に多い。癩の字は、積聚の積にナを加へて、積を吳音讀したものの。

り、名古屋を始め門弟中興さめて、是傳三あんまりそれは粹過た、聞ぬと云こと有まい葬禮の戻りに、祝言の家へ立寄るは無禮過た不道化、おかしうない歸れ歸れ」と苦々敷叱られ、鼻打かみて目をすり、姫君様の御祝言と遠慮致して見ました、脇から沙汰が有てはお恨の程も如何と、鼻が心を附まして、今日七日目の墓参り序でながらのお知らせ、常々氣立てが結構で、お宮とは言はず佛々と申たに、可惜佛をやくたいもない、骨佛にしてのけたとさめくとぞ泣居たり、人々更に誠とせず「酒に酔ふたか狂氣か、宮は少様子有て姫君に代り、四郎次郎と祝言し、五日前より奥に夫婦竝んでじや、たはけた事吐すまい」、「イヤ私をたはけになさるゝが、七日前に死んだ人が五日前に来る物か、蓮臺寺專譽様の御引導船岡山で灰になし、和國様を始女郎衆から名代に、充共が灰寄せ五輪迄立た物、何の偽り申ませふ」と眞顔に言へば人々も、ぞつと怖氣も立寄りて、して眞實かどふして死なれた事ぞ」と言へば眞實かとはいとしばげに常か瘡持ぶら〜とはしなから、一日と寝られた事もない人が、何日ぞや葛城様身請の晩から頭痛するとして引込んで、それから枕上がらす次第に重つて来る程に、お客衆のひき〜

○柳原の法印様 「徒然草」第四十六段に、「柳原の邊に強盜法印と號する僧ありけり、たびく強盜にあひたる故にこの名をつけにける」とあるに據つた。柳原は今も京都市下京區にある町名。法印は山伏である。

○半井の御典藥 半井は典藥頭の家である。

「雍州府志」に、「醫家和氣氏祖廣世清丸之長子也、... 廣世之時萌自「幼年學醫術」、承平二年秋七月被_レ試授「醫博士號」、又稱「綱博士」、遂任典藥頭、自是後世爲典藥頭、今半井家此語也、半井宅元在鳥丸正親町北今施藥院地、家有「大井」隔、其中間、半用_二製藥之料、半允雜用、依_レ之有半井之號_一」。

○尾張大根 宮重大根、みやしゆたいこんをいふ。「國花萬葉記」尾張國中より出る名物の條に、「大根、同ほし大根」。

○ぐち 接尾語。「ぐるみ」といふに同じ。丸ぐちしは丸ぐるみ、まるごとの意。「皮ぐちしは皮ぐるみの意。「増補俳諧萬葉」に、「ぐち_二大坂詞、菓物なご皮ごも食ふを皮ぐち食ふといふ_一」。

○風呂吹 人參大根なごをゆで、熱い中に味噌を附けて食ふもの。

○鐵炮でも 後で細く「咽を通す」の通すの縁語で、斯ういうたまで。

○無い 命のない。

○熊野 紀州熊野權現。

○ごくに立ちませぬ 役にたちませぬ。

「倭訓栞」くたふの條に、「ごくにたたずといふは不_レ埒_二言句_一の體なるべし、言語道斷といふが如し」。

で柳原の法印様半井の御典藥 幸と和國様へ、對馬の客から參つた朝鮮人參、尾張大根見る様なを刻もせず丸ぐち、人參の風呂吹を一期の見始め、人參でも鐵炮でもいかな咽を通すにこそ、もふ無いに極つて私を呼寄せ、今迄は隠した遠山といふた昔から、四郎次郎様と夫婦の契約し、めでたふ願ひ叶ふたら、女夫連れて熊野參りを致そふと、願ひをかけ此笠の紐も手づから紮けました、是を被て四郎次郎様熊野へ參つて下され、死しても心は連れ立ふ書置もしたいが、口でさへ盡されぬ筆には中々廻らぬ」と、目をほつちりと明いて南無阿彌陀佛、くくと七八遍は聞きました、なふ肝心の時には念佛といふ物も何のごくに立ませぬ、南無阿彌さへすうく陀佛迄やらすに、ころりと取て往きました」と「わつ」と叫べば人々も、「扱は定よ」と手を打て皆々袖をぞ絞らる、名古屋も呆れ居られしが、「疑ひもなく夫に引る、魂魄假りに形を見せけるぞや、さもあれ様子を尋る爲腰元衆、腰元衆」と呼びければ「あい」と答へて奥より出る、何とお宮は機嫌はよいか」と言ひければ「ア、機嫌よふにこくく笑ふてござんする、去ながら心ざし有とて、酒も魚も口へ寄せす、櫛の香の煙絶すな、煙絶ゆれば爰に居ることならぬ」とて、

○取つて往きました 鳥いきを引取つて死んで往きました。

○定 這はぬい。

○楮の香 抹香。抹香は、楮の葉と皮とを乾して細末にしたもの。

○野干 狐の異稱。

○藪敷の餅搗 藪敷軒端に蚊(藪敷とあれども)が群集して、寄りつ放れつわや／＼飛びちがふこと。

○前垂の名残 遊女屋の餅搗には、赤前垂をした選手が、取手を降けて餅を圓めたり延ほしたりするのが常であるので、斯くいうた。近松作夕霧阿波鴨渡土之巻に、「裏方柳神の柳、鏡さる／＼遣手衆の、潮に取粉の面白くて妓(よ)ね衆の笑ひ」。

○夕顔の黄昏 言ふに夕顔をいひかく。そして「源氏物語」夕顔の巻にある夕顔女に、夕方薄暗い顔をかかせた。夕顔女は光源氏と契つたが、薄暗であつた。ここの文も其のはかなき契、つれなき戀、新愁離恨の悲哀を含んでゐる。

○物越 物を隔てて聞える音聲の義。人の聲を見索引。前文に形あれ共影映らずとあるに應じる。

○地水火風 四大といふ。佛法では、世界の萬象はこの四大の和合によつて成るといふ。人間の身體も四大の和合によつて成る。死すれば空に歸す。

○陽炎 「かいろひの」稱。命のはかなきを、陽炎の忽ち消えるが如きに譬へていふ。ここの文は、木の葉に宿る露のはかなきが如く、陽炎の如く捕捉し難いのはかなき姿の意。

傾城反魂香

お寝間の内は抹香で燻ぼります」と言ひければ、「して、四郎次郎はどふしてぞ」

「ア、さればお宮様の頼みで、お寝間の襖に熊野山の繪を遊ばひてござんする」

「切は宮の幽靈疑ふ所もない」とあれば、腰元驚き「ア、怖や、なふ知らひで側に居ました」と、膝の側に這寄りて身を屈むこそ道理なれ、雅樂の介心を決せん

と思ひ、「さもあれ狸・野干の業も有、誠の死したる幻は、形あれ共影映らずと承る、某参り直きに逢ふて笠を渡し、燈火を立て實否をためし申べし、方々は小庭より障子の影を御覽あれ、たとへ怪しい事有共必わつと言まいぞ」、「何が怖い

こと有」と誰も口では夕暮や、小氣味の悪き籬が本軒に藪敷の餅搗も、其前垂の名残かと心細くも佇めり、雅樂の介心なき調子にて、「是は暗いお座敷宮様はそれにか、火を點したらよふござらふ」と言聲す「ア、さればいな、心の迷ふた身

の上關に闇を重ぬる辛さ、晴らしてはしや」と夕顔の黄昏照らす行燈の、障子に映るを能見れば元信は元の人體にて女の影は五輪と宮が物越ばかり人間の地水火

風の風脆き、木の葉に結ぶ陽炎の露の姿ぞあはれ成、四郎次郎は老々と疲れ侘び

たる如くなり、雅樂の介猶訝しく、此昔笠は里の便に参りしが、何に入ことぞ」

○老々 老妻の貌。「きのふはけふの物語」上に、「いかにも顔色衰へらく、くさしたる人たけた法眼へ参り」。

○三國 みくに 越前國坂井郡三國町。昔は北國有名な港で、三國の遊女町は其の名が高かつた。

○熊野三つのお山 本宮、新宮、那智。

○牛王の咎め 牛王の誓紙の裏に起請文を書く毎に熊野の鳥が三羽づつ死ぬ其の咎め。近松作「心中天の網嶋」下之巻に、「牛王の裏に誓詞一枚書く度に、熊野の鳥がお山にて三羽づつ死ぬるを、昔より言ひ傳へし。裏引によつて、熊野牛王の群鳥を見よ。

○苦の下迄 身は死して苦の下に埋れてまで。

○五つの假の夢現 「五つ」は地水火風空の五大をいふ。人の身體は五大の和合によつて成る。以て身體は假(かり)のもの、人生は夢現の如しとの意。西鶴作「日本永代藏」卷一、初午は乗つて来る仕合の條に「銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有り」とある、「五つ」も五大をいひ、以て人の壽命の意にいふ。

○あたら夜や…咲く花 「後撰集」卷三、

春歌下部の歌に、「あたら夜の月と花とを同じくは、心知れらむ人に見せ給や」。「咲く花」は、咲く花の如き姿の意。

○秋紗 あきさ 柔らかな絹類。「俚言箋覽」ふくきの條に、「今柔便の絹類をふくきもの」と云。

○反魂香 亡き人の魂魄を招き反すといふ靈香。謡曲「花鏡」に、「李夫人の面影を、しはらく愛に招くべしとて、九華帳の中にして、反魂香を燒き給ふ、夜ふけ人しづまり、風すさましく秋なるに、それかと思ふ面影の、有るか無きかにかげろへば」。

と言へば「なふ嬉しや〜、ほんに是が欲しかつた私が熊野を信すること、敦賀

では遠山三國での名は勝山、伏見へ賣られて淺香山、山と云字を三度付き、それ

故に木辻では三つ山と附られし、思へば熊野三つのお山の名を汚し、牛王の咎め

も恐ろしくお主と一處にして下さらば、連れ立お禮に詣でませふと笠の紐迄紆け

置し、追附別るゝ身なれ共一日でも斯ふ添ふからは、願は叶ふた同然神佛に虚言

はないと、此襖戸にお山の繪圖を頼みまし、參つた心で拜まんと思ふ所へ此笠は、

どふした便に來たことぞ餘の事は何も言はずか、又の便に傳三殿へたとへ如何成

こと有共、四郎次郎様へ歎きのかゝる事などは、知らせまして下さんすなと、能

ふ言ひ届て下さんせ」と、苦の下迄我夫働はる心ぞ不便なる「サア女夫連れて參

りませふ此方様は勝手へ往て、後夜の鐘の鳴る迄念佛切らして下さんすな、似合

たか知らぬ」と笠打被たる五輪の影、五つの假の夢現餘所の事では泣く〜も、

元の座敷へ人々は宗旨〜の手向け草、題目・眞言念佛の回向に、更くるも 三五

三熊野かげろふ姿

歌下
あら惜しやあたら夜や、夫婦の中に咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男

○白絲の縁 知らずを白絲にいひかけた。そして佛の御手の絲をひかへて彌陀に縁を結ぶのこ、夫婦引接の縁をいひかく。

○四手 注連玉串などに無(し)で掛けるもので、古へ多くは白木綿を用ひた。近松作(常連小栗判官)でてるの施車の段に、初昔の里の我世に、露の白木綿切り掛けて、引けや、この車。

○薬の湯本 熊野湯釜温泉をいひ、本宮の西南約三軒。皮膚病リウマチス・肉腸病痔疾婦人病・呼吸器病などに効くといふ。毒酒を盛られて癩病のやうになつた小栗判官兼氏が、妻照子の宛に伴はれ遊行上人の教によつて、相模國からこの湯峯に入る俗して禱を施したといふ傳説から有名な温泉なる。今も小栗湯といふのがあり、又兼氏の遺跡といふがあり、本宮から湯峯に入る車峠にある車塚は、照手が判官を乗せて曳いて來た車を埋めた所であるといふ。

○四百四病 あらゆる病の數。「智度論」に、「四百四病者、四大爲(身)、常相侵害、二大(中)百一病起、冷習(二百)、水風起故、熱病有(二百)二地火起故。」千金方に「冷熱風氣、計成(四百四病)」。○飛鳥の社 今は阿須賀神社といひ、新宮市上熊野地にある。新宮熊野速玉神社の攝社で、熊野三所大神を祀つてゐる。

○濱の宮 東牟婁郡那智町海岸にある。今はこの所に那智浦海水浴場がある。

○王子々々 は九十九所 「和漢三才圖會」卷七十六、紀伊の條に、「凡熊野王子權現社、自(攝州)東生郡至(熊野)地、有(九十九)所」。王子とは、熊

は更に白絲の、縁は穢き土車、心は物に狂はねど姿を、物に狂はせて、挽けや、挽けや此車ゑいさら、さら、笹の葉に四手の旅路の、後世の友、一引引けば千僧供養、二引引けば萬能の薬の湯本と聞かからに、四百四病は、消えもせん骨になつても癒らぬは、私が其方様を戀病ひ、變る心を案じては神の御名さへぞつとする、

飛鳥の社濱の宮、王子々々は九十九所、百に成ても思ひなき世は和歌の浦、棺にかゝる藤代や、岩代峠・潮見坂、書き寫す繪は残る共我は残りぬ身と聞けばいと

しやさこそ我夫の、涙にくれて筆拾松の、筆は袖に滿つ潮の、新宮の宮居神々と、出島に寄する磯の波、岸打波は普陀落や那智は干手、觀世音、古へ花山の、法皇

の、後の別れを、戀慕ひ、十善の御身を捨て高野・西國・熊野へ三度、後生前生の宿願かけて、發心門に人は神や享くらん御本社、證誠殿の階を下りて下りて、待受け悦び給ふとかや、我は如何成罪業の、其因縁の十二社を廻る輪廻を

離れねば、疑ひ深き音無川流れの、罪を掛けて見る業の秤の重りには、それさへ輕き磐石の、岩田、川にぞ著にける、垂迹和光の方便にや名所、宮立迄、顯は

れ動き見へければ元信信心肝に染み、我書く筆共思はれず目を塞ぎ、南無日本第

野行幸の時、御休所無に時に臨んで熊野本社を移した地である。

○藤代 藤白も昔く。海南市にある。藤白坂から北面海上の眺望は、熊野参路第一の美景である。

○岩代峠 日高郡岩代村にある。

○潮見坂 西牟婁郡三瀬村の東にある坂路。本宮と田邊町との間は長程の山路で潮見峠に来て、始めて海潮が見られるので、この名がある。

○筆捨松 海南市藤白山にある名松の名。「和漢三才圖會」卷七十六、紀伊の條に「藤白山川有_二名木白藤_一故名_レ之、又有_二松_一一株、名_二筆捨_一、松、此處無_二双風_一、故名_レ言語、昔惡工金剛欲_レ寫_レ不能、因捨_レ筆_一」

○滿つ湖の 「芋は袖に滿つ」を「滿つ湖の」にいひつづけ、「玉葉集」卷二十、神祇歌の部、「熊野新宮にてよみ侍りける、中原師光朝臣、天くむる神や願を滿つ湖の、姿に近き千木の片そぎ」の歌句に據つた。

○新宮 新宮市にある熊野速玉神社をいひ、熊野三山の一。官幣大社。

○出島 新宮市海岸に突出せる島の意。

○岸打つ波：那智 順經歌第一番「補陀落や岸打つ波は三熊野の那智のお山に響く瀧の瀧」に據つた。下巻「順經歌」を見よ。

○普陀落 梵語Potalaka、觀音示現の海島。索引によつて「補陀落や」瀧津瀧」を見よ。

○那智は千手觀世音 「那智」は那智山上の音岸渡寺をいひ、天台宗の寺院。西國順經第一番の札所で、本尊は如意輪觀音である。然るに巢林子は之を千手觀世音と誤り、彼の作「女殺油地獄」上巻に

傾城反魂香

一靈驗、三所權現」と伏拜み、頭を上げて目を開けば南無三寶、先に立たる我妻は

○花山の法皇：熊野へ三度 花山法皇は熊野藤原桓子

の亡霊を弔ひ給ひ、諸國を行脚され、高野山、熊野權現にも参詣

され。那智の三所の瀑取上に花山法皇御籠所跡がある。この

文は、西國順經第一番の歌を引用したので、其の順經歌は俗説に

花山法皇の御歌であるとの縁によつて、斯くいひつづけた。「高

野 西國・熊野へ三度」といへば、「伊勢へ七度熊野へ三度」と

いふ詞があるのを取つて、斯くいうた。

○十善 殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋毒・耶

見の十惡を犯さぬを十善といふ。十善の功德を稱めは帝王に生

れかはるといふ説によつて、帝王のこゝを十善といふ。

○發心門 菩提心を發起して佛門に入ること。

○證誠殿 紀州熊野本宮を第一殿を證誠殿、第二殿を西御前、第三殿を若宮と稱す。「靈寶」に「證誠殿法殿、或號證誠殿大菩薩、或號三泉御子、稱地土權現、本地阿彌陀」。三山いづれも上四社中四社下四社、總て十二社ある。

○因縁の十二社 本宮十二社に十二因縁をいひかく。「和漢三才圖會」卷七十六、熊野權現の條に、「三山共有十二所、以祭天神七代地神五代之神故號日本第一宮乎」。十二因縁とは、衆生が三世に互つて六道に輪廻する次第縁起を説くに、無明行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死の十二を擧ぐ、よつて之をいふ。

○輪廻 衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅

人間・天上の六道に輪轉するこゝ車輪の廻るが如きによつていふ。よつて輪廻を妄執の惑にいふ。(見索引)

○音無川 本宮の所を流る。本宮は本宮村にある熊野坐神社

「くまのにますじんじや」をいふ。今の社殿は明密二十二年の造

營で、丘上幽邃の地にあるが、もとは熊野川音無川岩田川の合

流する巴ヶ瀧のはざりにあつた。

○流れの罪 流れの身(遊女)の罪。お宮は遊女であつたので斯くいうた。

○業の秤 地獄の冥官の下にあつて、前世に於ける罪業の輕重を量る秤。

○岩田川 西牟婁郡岩田村を流る。

○垂迹和光 佛・菩薩が衆生を化益する爲に、其の本體即ち本地より、假りにこの變換世界に化現し給ふを垂迹といふ。垂迹は本地の光を和けて塵俗の世界に應回するものなるが故に和光といふ。佛菩薩がこの世に化現して、衆生を濟度し給ふこと。

○宮立 宮の建物の宮居。

○三所權現 熊野の本宮・新宮・那智。

○四十九日：結ばほれ 俗説に、人死して四十九日(中陰)の間は魂離この世に迷ふといふ。

○五體 全身をいふ。(見索引)

○極樂諸天 極樂淨土と天部の諸神。

○妻戸 扉開きの戸。我が妻にいひかく。

○世渡りや阿波の鳴門は越ゆるとも 兼好法師の詠き傳へる歌「世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門は波風もなし」に據つた。

○浮船の「阿波の鳴門」の縁語によつたもので、浮船の如きの意。

○逆茂木 枝ながらの木を引取べて垣まなし、其の本を杖に結附げなごして、敵の侵入を防ぐもの。以て妨害の意にいふ。

○亦前垂 漢字は赤前垂をしてゐるので、斯くいうた。

○三途八難 三途とは、地獄・畜生・餓鬼の三惡道をいふ。之を三惡趣ともいふ。八難とは、三惡道と、盲聾瘖啞・世智辯聰・佛前佛後・北拘盧洲・長壽天とをいふ。以上は苦の故に難である。世智辯聰は、邪見にして惡を増長し正道に違ふ故に難である。佛前佛後は、佛の教導に値はれぬ故に難である。北拘盧洲・長壽天は、樂であるが爲に佛法が難く障りとなる故に難である。以上八難の中で、三途を以て最も難きとする。

○惡趣 趣は往列の義で、善惡の業因によつて往到する處。惡道。

○生死を分かぬ迷ひの雲 生と死とは相對のものであるのに、それをも分からずして妄執に迷

眞逆様に天を踏み、兩手を運んで歩み行、はつと驚き「是なふ淺ましきの姿やな、

誠や人の物語死したる人の熊野詣は、或は逆様後向き生きたる人には變ると聞、

立居に付て宵より心にかゝる事有しが、扱は其方は死んだか」と、こぼし初めた

涙より盡きぬ歎きと成にけり、恥かしや心には陸地を歩むと思へ共、逆様に見

へけるかや四十九日が其中は、娑婆の縁に結ばほれ姿を見せて契りし物を、妹背

の中に怖氣立愛想も盡きばいかゞせん、變る姿のつゝましや相見る事も是限り」

と、泣聲ばかり身を絞る、涙の霧や戀慕の霞、冥々、朦々朧々として、見へつ隠

れつ燈火の油煙に、紛れ失せにけり、元信五體をかつぱと投げ、よし雨露に朽果

てし骸骨なり共抱き止め、肌身に添へん夫婦の友、何に怖氣の有べきぞ現世の逢

瀬叶はずは、刃に死して此世を去り、極樂諸天はおろかの事たとへ地獄の底迄も、

誘へ伴へ連れ立て」と、座敷の隈々屏風押退け、障子を開き「やれ遠山は何處に

ぞ、宮は何處に我妻」戸、明くる遣戸に遣手の形、顯はれ見へしぞ、哀れなる、

「いつならはしの世渡りや阿波の鳴門は越ゆる共、此浮船の憂き流れ何と遣手の

身ぞ辛き、情夫の忍び路關となり文の通ひの逆茂木に、人の思ひは戒めながら、

ふく。宗執に迷うて悟ることの出来ぬを、雲が光明を遮るに喩へて、迷ひの雲といふ。

○五輪五行 五輪は地・水・火・風・空をいひ、五行は木・火・土・金・水をいひ、共に萬物を組成する元素である。五輪五行の苦きは、この後の續きの本文に詳説してある。この文は、宮が敦賀では遠山、三國では勝山、伏見では淺香山、木辻では三つ山、六條二筋町上林の内では宮と、五座所を替へ五座名を替へて流寓し、つづぎに世の辛酸を嘗めたことをきかされたのであつて、これも次の文にこの事が述べたのである。

○あて 上品。

○四大 地・水・火・風。

○川竹 川竹は水邊に生ひてゐるので、流れの身の意にいひ、遊女の身をいふ。諸國遊女に「伊にやもさよりも定めなき世さひながら、うきふししけき川竹の流れの身こそ悲しけれ」。

○撞木町 伏見撞木町。(見索引)

○安養世界 極樂世界をいふ。美妓を善婦といへば、以て善隣の居る安樂の巷、即ち遊里のこまにいふ。

○木辻の町 奈良の遊女町の名。大和名所圖會卷之二に、「南都の傾城町は木辻鴨川さひいて縦横にあり」。

○奈良坂やこの手 櫛「なら」の葉が兒の手に似てゐるので、櫛を奈良にいひかけて、「奈良坂やこの手」といひつづけ。諸曲「百萬」に、「奈良坂や、このてがしはのふた面おもて」。

我身は包む戀衣赤前垂の火焰に焦れ、三途八難の惡趣に墮す苦しみの涙目を昏まし、生死を分かぬ迷ひの雲所々に名を變へて、數々色を飾りし報ひ、體一つが五つに分れ五輪五行の苦を受くる、如何成世にか免れん」と、叫びわな、く袂の影艶色あて成二人の遊女左右に、分れ見へたるぞや、是こそはそのはじめ白粉紅

花に粧ひし、後世の道には遠山があだの情の釣針に、人を敦賀のうき妾松と云はれし松が枝は、四大の元の木に、歸る也、次は三國へ買ひ流されて姉女郎や傍輩に、賣負けまいぞ勝山と名を變へ風を變へけるも、戀に我の張る我慢の山、麓の塵の塵泥の、土に還すを御覽せ」と夕月、出る如くにて、後に高く顯はれしは流れ漂ふ川竹の、伏見に來ての淺香山、さすが所も極樂を願へと告ぐる撞木町、安養世界の夜店には點すべき燈火なく、吹消す風も吹かずして一心の火を元の火に、返す間の影ぞかし前に、立たる花薄はのく見へし幻は、木辻の町の三つ山と、呼ばれし時の、面影か、今は名のみに、奈良坂や此の手彼の手の枕の酒囊嚴と

○美霞 霞がすりの水 一体の道歌、「雨あられ雲や氷と隔つらむ、みくれは同じ谷川の水」(この歌は古活字版「みづかがみにこに載つてゐる)に據つた。そして「美霞」に、奈良の名

物美酒、露酒をきかせ、其の酒の中に鹽が溶けずに混つてゐるから、飛白「かすり」になつてゐる少微井「かすり」にいひかけた。

○微井おすりのみ 奈良橋本町南側東端にある。「大和名所圖會」に、私法大師の瀧らしめ給うた四十八井の一である。見えてゐる。「日本輿地通志」大和志、添上那の條に、「可須理井かすりい在橋本町、可容一瓶、霖雨あめ不滿、尤旱不涸、數汲不竭」。

○三世 過去世、現在世、未來世。

○四苦 生老病死。

○待つ夜の鐘も別れの鳥の聲「新古今集」戀部三、小侍従の歌「待つ宵に更け行く鐘の聲きけは、あかぬ別れの鳥はものかはしに據つた」。

○玉の緒 魂の緒の義であつて、命をいふ。

○終に行く道 死の道は誰も終に行く道であるによつて、死ぬることをいふ。「古今集」哀傷の部、葉平朝臣の歌に、「つひに行く道さばかねて聞きしかぞ、昨日今日とは思はざりしを」。

○玉の臺 玉で飾つたやうな美しい臺。以て佛の座をいうた。露の玉に、玉の臺をいひかけた。

○連理 二樹相對し脈理を連接して生ずること。以て夫婦に喩ふ。白居易の「長恨歌」に、「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」。

○一見卒塔婆いつげんそとば 永離三惡道「卒塔婆」は梵語スツパstupa (Stupa) で、略して塔といひ、方墳、圓塚などを講し、佛骨を安置する處。一たび卒塔婆を見れば、永く地獄、佛鬼、畜生の三惡道を離れる事ができると、卒塔婆の功德を説いた文である。「涅槃經」に、「一見卒塔婆、永離三惡道、何況造立者、決定生安樂」。

○伏屋 地に伏してゐるやうな腰屋。腰屋。

隔つれど解とくれば同じ微井おすりのみの、水を假かり成な戯たはれも終ついには迷まよひの井堰ひせきにからみ、木
は執心しつしんの斧おのに碎くだかれ土つちは逢夜あふよの壁かべと隔へだたり、火かは又また三世さんせいの縁えんを焼やく、四大しやくの四苦しやく
を此身このみ一つに重かさね、重かさねて空くうより出でて空くうに入いる、報むくひも罪つみも色しきも情じやうも迷まよふも悟さとるも
待夜まちよの鐘かねも、別わかれの鳥とりの聲こゑ々々迄いたり、地水火風ぢすいふくふうの五ごつの玉たまの緒いと、只ただ一筋ひとすぢに結むすび合あひ
たる姿すがた成なぞや、なふく惜おしみても猶なほ惜おしまるゝ、名残なごりも縁えんも終ついに行いく、道みちならばいざ
伴ともはん、とは思おもへ共夫おつとの命長ながかれと、祈いのる心こゝろもさまゞに皆みな妄執もうしじゆのあだ夢ゆめと、さ
めく脆もろき涙なみだの露つゆの玉たまの臺たいの床とこの内うち、連理れんりの蓮片れんぺん敷しきて長ながき契かぎりを待まちつぞや待まちた
んしるしはこれ、此こゝ、一見いつげん卒塔婆そとば永離えんり三惡道さんあくだう、南無なむや三熊野さんくまの本地ほんぢの三尊さんそん、迎むかへ給たま
へや道引みちひき給たまへ」と唱となふる聲こゑは伏屋ふせやに残のこつて形かたちは、見みへず消けにけり、元信げんしん抱いだき留とどめ
んと纏むすり附つけば影かげもなく、「うん」と仰向のうけに目めくるめき忽たちち息切いききり絶たへ入いりしを、名古屋なごや・
揚屋かん・門弟かど等ら驚おどろき騒さわぎ、藥くすり様さま々々呼よび助すけけ漸やうぜん、一間いっけんに 休やすめけり、
夜よもほのゝと、明行めいぎやう比管領ひくわんりやうの雜色ざしき、不破ふたの道犬みちいぬ・長谷部ながたにべの雲谷うんこく誘引ゆういんし、伴左ばんざ
衛門ゑもんが酒漬いけの、死骸しがいを昇かせどや〜と亂これ入いり、此所こゝに名古屋山なごややま三春平さんしゆへいや有ある、管領くわんりやう
よりの御下知おんげぢち有ある對面たいめんせん」と呼よば、つたり、名古屋屋なごややち々々々々せず出向でしやうへば、雜色ざしき鐵鞭てつぺん

○雑色 雜役驅使を勤める者。(見索引)

○下知 令下知の意。さしづ。命令。

○曲事 法に違ふこと。よつて死罪の意にいふ。

○説 定言の合字。おほせ。命令。

○亡八 遊女屋の主人。(既出)

○片口 片方のみの言分。

○女敵 人妻と密通する者。姦夫。(見索引)

○手附 手附金の略。物を買ふことを約した證に、先づ其の價の若干分を前渡しする金。

引鳴し、「不破、伴左衛門をお手前が手にかけし事紛なき上、父道犬願ひによつて、吟味を遂げらるゝ所盜賊の罪遁れ難く、曲事に行はるゝ條召捕り來れとの御説、尋常に繩をかゝられよ」とぞ仰ける、名古屋少しも騒がず懷中より、亡八の手形數通の文を取出し、「斯様の愚蒙の返答は申も似合ぬ事ながら、片口の御裁斷如何にしても輕々し、是此手形を御覽せ、葛城事は三月二日に親方が暇を取、拙者が本妻借宅見立の間、揚屋に預け置し所伴左衛門數通の艶書、斯くの通不義者の女敵也、此方より願ひを申、親道犬をも罪科に沈めんと存せし折から、却つて我等を召捕れとは定てそれは各の間違へ、それ成道犬か雲谷が事でがなござらふ、逃も走りもせぬ男、聞直してお出なされよ」と大様にこそ答へけれ、道犬つと、「穢い」こりや山三、悴伴左衛門葛城を請出す手附として、金子五百兩懷中せり、女敵討は聞へたがなせ金子は盗んだ、忽じて盗みと云物も盗む時はうまい事、顯はれた時は辛い苦い物じやげな、サア何と遁るゝ所は有まい」と、證據なき言分ながら名古屋も相手は死人なり、何をしるしの言分と、苦々敷ぞ見へにける、四郎次郎斯くと聞より飛んで出、「いや」兎角の評議は御無用盗人ならば盗人切

取ならば切取、科人は狩野、元信、繩は百筋千筋でもお懸けなされ」と、大小抜いて投げ出さんとする所を、名古屋押へて「暫く、御心底忝い去ながら、それ迄に及ぬ事平に〜」と押し止め、「是道犬、某盗人でない申譯が立ならば、己れ又侍に、盗人と言かけた其科は何とする」、時に雲谷進み出、「イヤ山三、盗人でない言分々立ば、命を助かる其方が仕合よ、道犬は一子を殺され金子を取られ、何の誤り有べき」と、言はせも果てず、「ヤア汝等が存する詮議にあらず、お屋形にては一ツ間へさへ入ざりしを忘れたか雲谷、此詮索濟んで汝も遁さぬ用心せよ」と、睨み附れば道犬、「山三々々脇道へ迂らすまい、五百兩の金子を身に附た伴左衛門、切りは切たが金は知らぬと言とても言はせふか、盗人でないならば言分々せよ」と詰めかくる、「ヲ、サ言分々して見せん其跡は合點か」、「イヤ先言分々から聞かず」と、せりあへば雑色、「是々名古屋、問答迄もなし其爲の我々、人にこそよれ兩方共に弓馬の身柄、盜賊と言かけ分明ならぬ訴訟、且は上を掠むる越度、言分々立ば道犬は存分に計らふべし、又盜賊に極らば下知の如くお手前に、繩をかけ申」と理非明らかに述べらるゝ、名古屋勇んで罷出、「名古屋山三春平は外の事は

○聞かんず 聞かう。

○弓馬 武士をいふ。弓術・馬術は武士の業なれば斯くいふ。

○宗匠ごさんなれ 師匠でござる。「ごさんなれ」は、こそあるなれの音便約。

○時鳥名乗かけし 時鳥は我が名を囁れば、名乗かけしと、名古屋山三が名乗りかけしをいひかく。「後拾遺集」卷三、「夏部の歌に、「ほごぎす名乗してこそ知らるなれ、尋ねぬ人に告げやまし」。

○鳩尾 胸と腹との間のくぼんだ所。みづおち。鳩尾は身體の急所。

○五臓 心、肝、腎、肺、脾。

○肺は金 五臓を五行に配して、肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水とする。

○弓矢取る身 武士。

○世間流布 世間に知れ渡ること。

無調法、傾城の買ひ様と人斬る様は大名、恐らく宗匠ごさんなれそれ、伴左衛門が死骸を是へ出されよ、「心得たり」と役人共封切ほどき酒漬の、死骸は更に色變らず只其時の如くなり、名古屋袴のそば取て近々と寄り、彼を討しは先月廿日、曉月の時鳥名乗かけしは欺さぬ證據、向ふ疵に切伏せ止めを刺さんと乗つか、り、胸押開けば懷中に金子有、此ま、置いては誠の盗人來つて搜し取らんは必定、時には山三が盗みしと後日の難を察せし故、鳩尾先を抉つて、金子は彼奴が體の内肺の臟に押込んだり、五臓の中にも肺は金同氣求めて朽ちも鏝けもよも爲まじ、いで見せん」と手を伸ばし、ぐつと人朱に染みたる緞子の財布、引ずり出して「是見たか、是でも山三が盗人か、弓矢取身の仕方を見よ」と道犬にはつたと投げ附、死骸を踏まへ突立ば雑色を始として、元信其外門人等「出來た出來た、あつばれ、御分別後學なり」と勇みをなす、道犬は言句も出ず雲谷は怯まぬ顔、相手の言譯立からは此方は切られ損、お歸りなされ」と立所を二人の雑色飛か、り、鐵棒振り上打程に面も眉間も打裂かれ、胴骨碎くるばかりなり頓て繩をかけさせ、道犬親子は世間流布の重罪上を犯すと云ひ、只今の始末諸人の見

- 長袖 長袖を着た人の頭、堂上方・僧侶・畫師などにをいふ。ここは靈頭をさす。
- 任せておけ 當人の心に任せて置けを、桶にいひかけた。

- 隈筆 隈取り筆の略。
- 泥引き筆 金銀泥を引く筆。
- 壺の印 元信の落款には壺形の印もあれば斯くいうた。



壺の印

せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし、それ〱死骸の首を討て、承つて下郎共擡首にして髻をからげ、道犬が首に懸けさせ「扱雲谷は當座の慮外、罪の輕重いかがあらん」と有ければ、元信・春平詞をそろへ「元は彼奴めが惡逆、騷動の始なり古主の屋形に訴へ、長袖なれば流罪に行ひ申たし」、「尤々二人共に籠屋へやれ」と引立れ共脛立す、エ、卑怯者歩まずは任せて桶に打入て、生きながらの酒漬し地獄の鬼の中食菜と、戯れ笑ひ歸らるゝ悦ぶ中にも元信は、憂へに沈む那智の瀧亂るゝ色を勇めんと、唄へや唄へ雅樂の介其外の門弟中、憂ひは憂ひ祝儀は祝儀未來の嫁入は一七日、現世の嫁は七百町長く知行に墨筆や、家を彩色く繪の具筆・隈筆、藁筆・泥引き筆その筆先に金銀も、涌きて和泉の壺の印、竝び夏毛の狩野の筆末世の、寶となりにけり

下之卷 (土佐光信) 山莊

登場人物の主なる者

狩野四郎次郎元信(朝廷の繪師)

元信の門弟等

土佐將監光信(朝廷の繪師、お宮の父)

名古屋山三春平(六角左京大夫)(頼賢の執權)

銀杏の前(頼賢妾腹の娘。元信の妻。二十歳)

梗概

狩野元信は繪師の譽高く、朝廷に仕へて從四位下越前守に補せられた。彼は數多の門弟を連れ、山科の山莊に土佐將監光信を訪ねて、光信が勅勘を赦された事を傳へた。

この時、名古屋山三は銀杏の前を遠山に扮装させて連れ來り、光信の娘遠山として、改めて元信と婚する事とした。そして自分も先知に復したことを語り、主君からのお土産であるとて、光信に鄭重な贈物をなし、元信には用上郡七百町を與へた。かくて滿座悦び賑はつた。

下之卷

○繪の道には六つの法あり「穢跡録」卷十八に、「畫有六法、一曰氣韻生動、二曰骨法用筆、三曰應物象形、四曰隨類傳采、五曰經營位置、六曰傳模移寫、自古畫人罕能兼之。

○長康 顧愷之の字である。東晉の興寧頃の畫師で、其の描く所六法兼備はり、生動の勢があつたといふ。

○張僧 張僧繇をいひ、南北朝梁時代の畫家。山水・佛像を描くに妙を得。嘗て四白龍を畫き、これに點睛したら、其の畫龍が忽ち躍を破つて飛び去つたといふ。

○陸探 陸探微をいひ、南朝宋時代呉の人。明帝の侍從となり、畫を以て名を傳した。

○彩墨 彩色と墨繪。

○妙手 すぐれた伎倆。

凡繪の道には六つの法有、長康・張僧・陸探の三人を、異朝の三祖と學來て和國に筆の色を増す、狩野四郎次郎元信天然彩墨の妙手を得て、後柏原。後奈良の院・正親町の帝、三代四代の聖朝に仕へ祝髮の後越前、法眼玉川齋永仙と號し、末世の今に至る迄、古法眼と賞歎するは此元信の筆とかや、既に大永七年新帝、

○祝髮 斷髮。髮を剃り去ること。

○大永七年 後奈良天皇御即位の年。皇紀二八七年。

○大嘗會 天皇御即位の後、始めて行はれる新嘗祭の稱。豫め京都から東に悠紀、西に主基の國郡を定め給ひ、齋田を立てて稻を作らせて御饌とし、又白酒黒酒を醸せしめらる。又大嘗宮を設けられ、東に天神を祀る悠紀殿、西に地神を祀る主基殿を建てられ、各々屏風を立てられて、初夜は悠紀、後夜は主基で祭を行はせらる。

○肩を怒らす 威勢を示すをいふ。

○紋符 昔時從五位下に紋せられたこと。伊し前文に「從四位ノ下越前ノ守に補任せられ」ニあるから、其の位をさしたものであらう。

○勅勘訴訟 天皇の御勅氣を教されるやう哀訴すること。

○繪所 朝廷の繪畫のこゝを掌る所。

○形の如く しまりの通り。

○庇惠 庇護恩恵の義。おかけ。

○時服 其の時候に随つて著るべき衣服の下されもの。

○音物 音信の贈物。進物。

○三人 不破人・道道大、不破伴左衛門宗末、長谷部兼谷。

○先知 漢人以前の知行。

大嘗會、悠紀・主基の御屏風を書、從四位ノ下越前ノ守に補任せられ、數多の門弟上下の供人肩を怒らす山科や、土佐ノ將監光信の山庄に案内せられる將監夫婦、出向ひ「今官祿に秀で給ふを見るに付、娘が事のみ忘れ難なふ候」と詞に先立涙なり、仰の如く某とても、彼の人を先立世に交る所存なけれ共、將監殿を世に立んと、惜しからぬ世も捨かね申せし所に、次第に登庸し大嘗會の御屏風を仕、

紋符に至る朝恩の上、貴公の勅勘訴訟叶ひ「向後一家の結びをなし、相竝んで繪所の門を開くべし」との宣旨を蒙り参りたり、親御達を世に立なば草葉の蔭の娘子の、一つの迷も晴るべきかと形の如くに禁中方、願ひ取なし候」と語り給へば

將監夫婦、「有難や忝や歎きの中の悦びとは、我らが身にて候貴殿の御庇惠にて勅勘を赦さるゝも、一つは娘が光りぞ」と猶々落涙堰きあへず、かゝる所へ名古屋山三春平、樽・肴・黄金・時服さま／＼音物持せて、將監に對面有「雲谷・不破が不

届故、元信我ら兩人永々沈淪致せし所、善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候、其節は姫君の御事に付、御自分さま／＼御懇志の趣、主人御屋形満足致され、先當分お禮申さるゝ、目目錄の通、微少な

が

○二つ櫛 二つの櫛を髪を結うた前に挿すのである。遊女は二つ櫛を挿してゐる。遊女に限らず町家の女でも、髪を飾つて外出する時などには、二つ櫛を挿した者もあつた。井原西鶴撰「五人女巻」三、京の水もらさぬ中忍びてあひ釘の條に「簪節一つ守袋二つ、櫛髪分の抱帯」。

○鴨の羽形の蓮葉袖 鴨の羽のやうに光澤があつて、なまめかしい蓮袖。蓮葉とは、浮漣なこゝろを連の浮葉の風や水にびらつくに喩へた語であらう。寶笑婦を蓮葉女はすはをんなじといふ。

○香車 將菜の駒の名。これを轡ともいふ。よつて選手のことをいふ。「さしづめ」いふも將菜の縁語。ここの文は、宮が選手であつたので斯くいうた。

○違ひやした 違ひました。

○禿立 禿から仕立てた遊女。童女の時から遊女に仕へ、そして後に遊女になつた者は心得がよいとして、遊女を譽めていふ詞である。

○姫君も一度は…面白なさ 姫君も一度は危難身にせまつた其の時に、各によつて救はれ、大事の命を助けられたのであるから、各は姫君の命の親である。さすれば斯様な事をしなくても既に姫君の親同然。それたになまじひに儀式はつて遊女といふては妙でない。

ら」と述べければ、御使がらと申御丁寧成御事」と、互の禮儀淺からず暫らく時こそ移りけれ、や、有て名古屋「ヤア承れば娘子遠山、亡八の手前約束の年明て、今日はへ歸り給ふ由、さぞお悦び推量致した」と、言へ共人々呑込まれず免角の返答なき所に、供の者共聲々に「遠山様早あれ迄見へまする、迎ひにお出なされませありや」振つてござるは」と、言ふても更に心得ず死して程經る遠山が、歸らん様は涙ながら立出見やれば屋形の姫君銀杏の前、髻入すの二つ櫛、鴨の羽形の蓮葉袖吃の又平日傘、さしづめ香車は女房なり、いつ慣はしの、道中も、心つければ振り易い振れ、雪の遠山が御影もよもや、是此處が、己が内か」とつくと入、なふ父様母様今歸つたはいな、久しうで逢ひやした」と、とんと坐りし居住ひは禿立見る如くなり、各は不審晴れず、名古屋はもとより合點なれば、一ツ、いづれもの御不審は尤々、長ふ申せば段々あれ共、畢竟姫君を將監殿の娘にして、死したる人が二度蘇生られたと思召し、元信に娶はせあれ姫君も一度は、大事の命を助けられし各なれば斯ふ無ふてから親同然、なまなか儀式立てしては養子と云ふて面白なさ、又平夫婦と談合して血を分けた遠山に、致したが我らが趣

○取組 親子夫婦の縁の取組。

○金遣うたる 差里に通つて世才にたけ辞ま
つた。

○頂戴させ 元信に頂戴させ。

○給所 家來等に給與した田畑。

○鼠算盤 鼠算の語から思ひ附いた語で、後文
の子の年しの語に應じる。

○積り物 豫算。

○割物 割算。

○延喜の帝 第六十代醍醐天皇。

○陸平永寶 陸平永寶の諱であらう。朝長陸平
永寶の初錡は桓武天皇の延暦十五年十一月で、現存
してゐる。延喜の帝の御時には、延喜七年十一月に
延喜通寶の鑄造があつて、これも現存してゐる。

○駒引錢 馬方が駒を牽いてゐる武鏡であつて、
大小種類いろ／＼ある。寛永の頃から元禄頃に向つ
て鑄造されたものであらう。この錢一文を常に財布
に入れ置いて、金儲の預入るまじなひにした。書方
軒携心甲大鑑巻之に、「養安の金人には駒引錢一
文、携の旅籠代にも足らず」。

○韓幹 唐の玄宗帝時代の畫師、能く人物を寫す、
特に馬を描くに巧みである。易林本「節卦集」に「韓
幹」唐朝人、畫「馬形」。「晉の韓幹」は「唐の韓幹」
の誤であらう。

○候へく候 行きなり次第にして置かぬにいふ。
「用捨箱中之卷に、「昔は行なり次第にしておけとい
ふ事を候へく候にやつておけといふ者多かりしが、
近年は稀になり、適たま／＼いふ者も其縁故は知

向取組は御屋形の、御意でござる」と小短く、譯も聞へる道も立ッ金遣ふたるし
るしなり、將監夫婦も悦び涙、「小い時のお光が、成人顔見て嬉しい」と抱き附てぞ
泣給ふ、名古屋かさねて懷中より一通を取出し、「是は田上郡七百町の御朱印、永
代知行なされ」と頂戴させ、「扱田上郡は給所」の入組にて地割中々むつかし、
某が父主計の介天文の曆算に達し、鼠算盤と云物を工み、積り物・割物人の聲に
従つて、算盤の表明白に現はる、是を以て考へば間積り知行高、刹那に相濟申
すべし」と有ければ元信聞給ひ、「それに付延喜の帝、陸平永寶・駒引錢を鑄させ
て民を賑はし給ふ、其駒は晉の韓幹が馬を移されし、我又其駒の圖を傳へ覺えて
候へば、駒引錢を鑄て領内を賑はし申へし」、「是は珍重然らば善はいそがしや、
嫁入罽入國人して本祝言の儀式は重ねて、先々今宵は祝ふてざつとめでたふ候べ
く候」盤粒に萬代、積るぞ 豊か成年は子の年、大黒女夫力次第に子孫も涌き出
る、地からは五穀手からは金が涌き出く子々孫々迄、長久榮花の家繁昌は君
が、惠の威徳なり

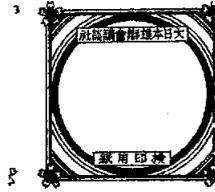
○子の年 寛永五年戊子をいうた。即ち本曲がこの年の上演
であることの證となる。
○手からは金 盤を描いて金を得ること。

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六三〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番
五六三〇〇番

(本製地海天)